

戸沢川代遺跡 熊ヶ平遺跡

平成 7 年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第192集

と ざわ かわ だい
戸沢川代遺跡
くま が たい
熊ヶ平遺跡

- 県営農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査 -

平成 7 年度

青森県教育委員会

序

下北半島には、旧石器時代から歴史時代に至る多くの

埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

本報告書は、平成6年度に県営農免農道整備事業の実

施に先立って、当該路線内に所在する川内町戸沢川代遺

跡及び熊ヶ平遺跡を発掘調査した結果をまとめたもので

あります。

今回の調査によって、本遺跡は縄文時代と弥生時代に

営まれた遺跡であることが明らかになりました。

この成果が、今後埋蔵文化財の保護と活用に役立てば

幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施及び報告書の作成に

当たって、ご指導、ご協力いただいた関係各位に対して

心から謝意を表します。

平成8年3月

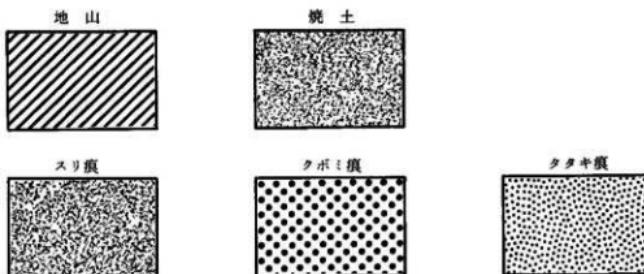
青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例　　言

- 1 本報告書は、平成6年度に実施した川内町に所在する戸沢川代遺跡及び熊ヶ平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の青森県遺跡登録番号は51024で、熊ヶ平遺跡は51002である。
- 3 本報告書の執筆者名は、依頼原稿については文頭に、その他は文末に付した。
- 4 資料の同定・分析等は、次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

放射性炭素による年代測定	学習院大学教授	木越 邦彦
石器の石質鑑定	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
遺跡の地学的環境	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
- 5 本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図を10万分の1に縮小したものである。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真的縮尺は統一していない。
- 7 遺構・遺物の文・図中の表現は、原則として次の様式・基準に拠った。
 - (1) 遺構内堆積土の注記には、「新版標準土色帖」(小山、竹原; 1993) を用いた。
 - (2) 遺物には観察表・計測値を付し、出土地点、法量及び諸特徴を一覧できるようにした。
なお、計測値の（　）は、推定値を示す。
 - (3) 出土遺物の量は、収納箱のデスクトレー（縦31.5cm、横24.5cm、深さ5.5cm）で表したところもある。
 - (4) 図中で使用したスクリーン・トーンの表示は以下のとおりである。



- 8 引用・参考文献については本文末に収めた。文中に引用した文献については、著者名・編集機関と西暦年で示した。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書作成にあたって下記の諸氏からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。
- 寺田徳穂、高橋 潤、富岡一郎、菊池充三、本田泰貴、橋 善光、千葉周司、蝦名 純
鈴木 徹

目 次

序

例言

目次

〈戸沢川代遺跡〉

第Ⅰ章 発掘調査概要

第1節 調査要項	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3

第Ⅱ章 遺跡周辺の地形と地質

第1節 遺跡周辺の地形と地質	7
----------------	---

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

第1節 土 坑	12
第2節 溝 跡	16
第3節 炭 烹 跡	16

第Ⅳ章 遺構外出土遺物

第1節 縄文時代の遺物	22
第2節 弥生時代の遺物	31
第3節 石 器	39
第4節 その他の遺物	40

第Ⅴ章 自然科学的分析

第1節 炭素年代測定	50
------------	----

第Ⅵ章 ま と め

第1節 ま と め	51
引用・参考文献	52
写 真 図 版	55

〈熊ヶ平遺跡〉

第Ⅰ章 発掘調査概要	
第1節 調査に至る経過	67
第2節 調査概要	67
第3節 調査の方法	69
第4節 調査の経過	70
第Ⅱ章 遺跡の環境と出土遺物	
第1節 遺跡の環境と基本層序	71
第2節 出土遺物	74
(1) 土器	74
(2) 石器	80
(3) 陶磁器・古錢	87
第Ⅲ章 ま　と　め	
引用・参考文献	88
写真図版	91
報告書抄録	99

第Ⅰ章 発掘調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

川内町の県営農免農道整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する戸沢川代遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成6年8月22日から同年11月17日まで

3 遺跡名及び所在地 戸沢川代遺跡
下北部川内町川内字川代133、外

4 調査面積 2,800平方メートル

5 調査委託者 青森県農林部

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 川内町教育委員会 下北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 深 弘前大学教授（現 青森大学教授）（考古学）

調査協力員 三浦 悅之助 川内町教育委員会教育長

調査員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

高島 成侑 八戸工業大学教授（建築史）

遠藤 正夫 青森市教育委員会社会教育課課長補佐（考古学）

（現 同市埋蔵文化財対策室室長）

葛西 効 青森山田高等学校主事教諭（考古学）

（現 青森短期大学助教授）

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

10 発掘担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課 課長 三浦 主介（現 県文化課総括主幹
埋蔵文化財班班長）

主　事　増尾　知彦（現　上北町立上北第一小学校教諭）
　　〃　　小館　孝浩（現　東青教育事務所）
調査補助員　本間　修、相馬　優子、斎藤　美穂

第2節 調査の方法

1 調査区の設定

調査区域内に存在する工事用測量杭（県農林部設置）の2本を結び南北ラインの基本とした。このラインを基準に20メートル四方の大グリッドを設定し、さらに4メートル四方を1グリッドとする小グリッドを設定した。調査区域が南北に長いことから、グリッド番号は東から西方向にアルファベットA、B、C…を用い、北から南方向に算用数字1、2、3…を用いて付した。グリッドの呼称は北東隅の交点を使用することとした。この南北ラインは、座標北から東に44.0°ずれていることを図面上で確認した。水準点についても、県農林部で設置した水準点より引き込み、調査区域内に数ヶ所設置した。

2 発掘調査

- 1 グリッド単位で発掘区を拡張する方法をとった。
- 2 試掘的に先行して部分的な粗掘りを層位・段階的に進め、遺構・遺物の確認をしてから下層の掘り下げについて判断した。
- 3 土層観察は、各地点毎に南北方向及び東西方向にそれぞれ土層観察用のベルトを設定した。

3 実測図の作成

- 1 遺構については、4分法・2分法によって土層観察用のベルトを設定し、精査した。
- 2 遺構の実測図（平面図・断面図）は、縮尺1/20を原則として作成した。
- 3 遺構内出土遺物については、遺構の実測図と同縮尺を原則とし出土地点を記録した。
- 4 遺構外出土遺物はグリッド単位に土層毎の取り上げを行った。また、必要に応じてポイント・レベルを記録した。
- 5 調査区の基本土層については、必要に応じて1/20の実測図を作成した。

4 写真撮影

- 1 遺構については、確認状況・土層断面・遺物出土状態・完掘状況等を中心に撮影した。
- 2 その他必要に応じて、基本土層・遺物の状況、調査状況についても記録した。
- 3 使用カメラは35ミリ小型カメラを用い、フィルムはモノクローム・カラーリバーサルの2種類を使用した。

戸沢川代遺跡

第3節 調査の経過

平成6年7月28日、川内町立公民館において、関係機関の担当者及び埋蔵文化財調査センター職員による打合せ会議が開催され、熊ヶ平遺跡の発掘調査も同時並行で行うことが確認された。会議終了後、熊ヶ平遺跡・戸沢川代遺跡の調査現場を踏査した。

8月22日にプレハブ事務所の設営、調査器材の搬入、調査区域内の環境整備を行い、翌日からトレンチ法により遺構・遺物の確認作業に入った。調査初日から調査員山口氏に遺跡周辺の地形及び地質の指導を受け、堆積状態を把握してからの調査となった。

調査区域が長く、地形も起伏に富むため便宜上調査区域をI～IV区に分けたが、II・III区ではながいも畑による搅乱が確認された。I区においては遺物の散布が見られ、包含層まで浅いことから、移植ベラを用いての調査へと移行した。

9月5日から14日迄の間、調査III・IV区に残る立ち木の伐採が行われることから、作業員の安全確保のため、並行して発掘調査を行っている熊ヶ平遺跡へ作業員全員を振替え、重点的に熊ヶ平遺跡の調査を行った。

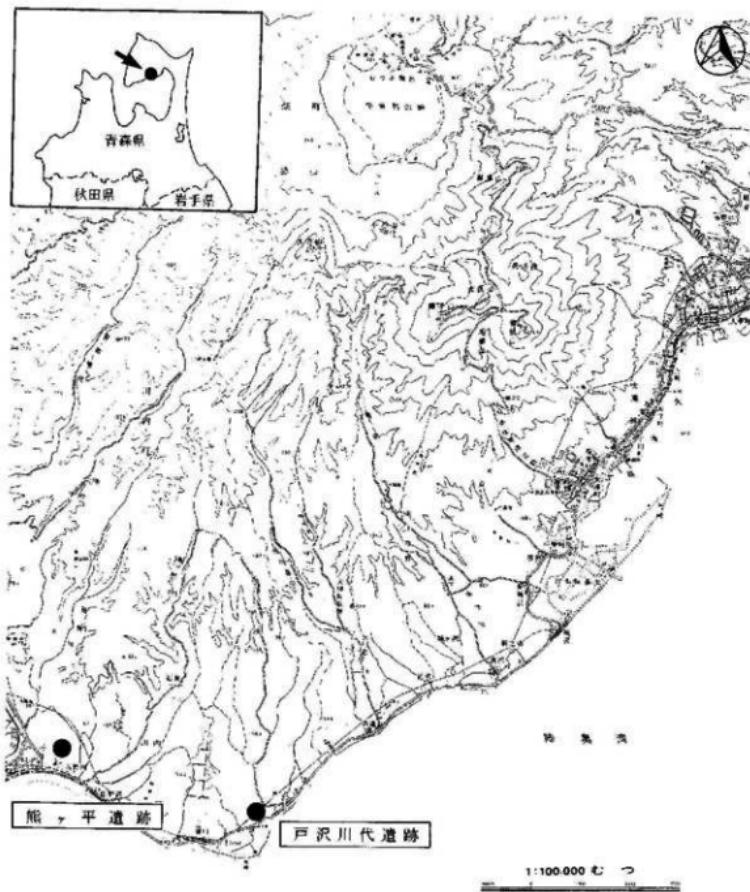
9月下旬には、調査I区の土器の取り上げを終了し、遺構の精査を重点的に行った。また、III区中央部から南側にかけては、深さ1～2mにも及ぶ搅乱を確認したため、元地権者に聞き取り調査を行ったところ、重機を用いて斜面の上方を削り、下に盛って平坦地を作り出すという大規模な整地作業を行った事実を確認した。

10月3日には熊ヶ平遺跡の調査が終了したため、作業員が合流し作業の進捗状況の遅れを取り戻すため、これまで未着手の調査IV区の粗掘を開始した。同時に調査I区では、遺物の取り上げ作業及び駄目押しで行っていたローム層の精査を終了する。さらに、10月中旬には、大規模な搅乱が確認されたIII区に南北に分けて2回の重機を導入し、搅乱土の除去作業を行った。作業後の精査では、用途不明の小土坑が数基確認された。

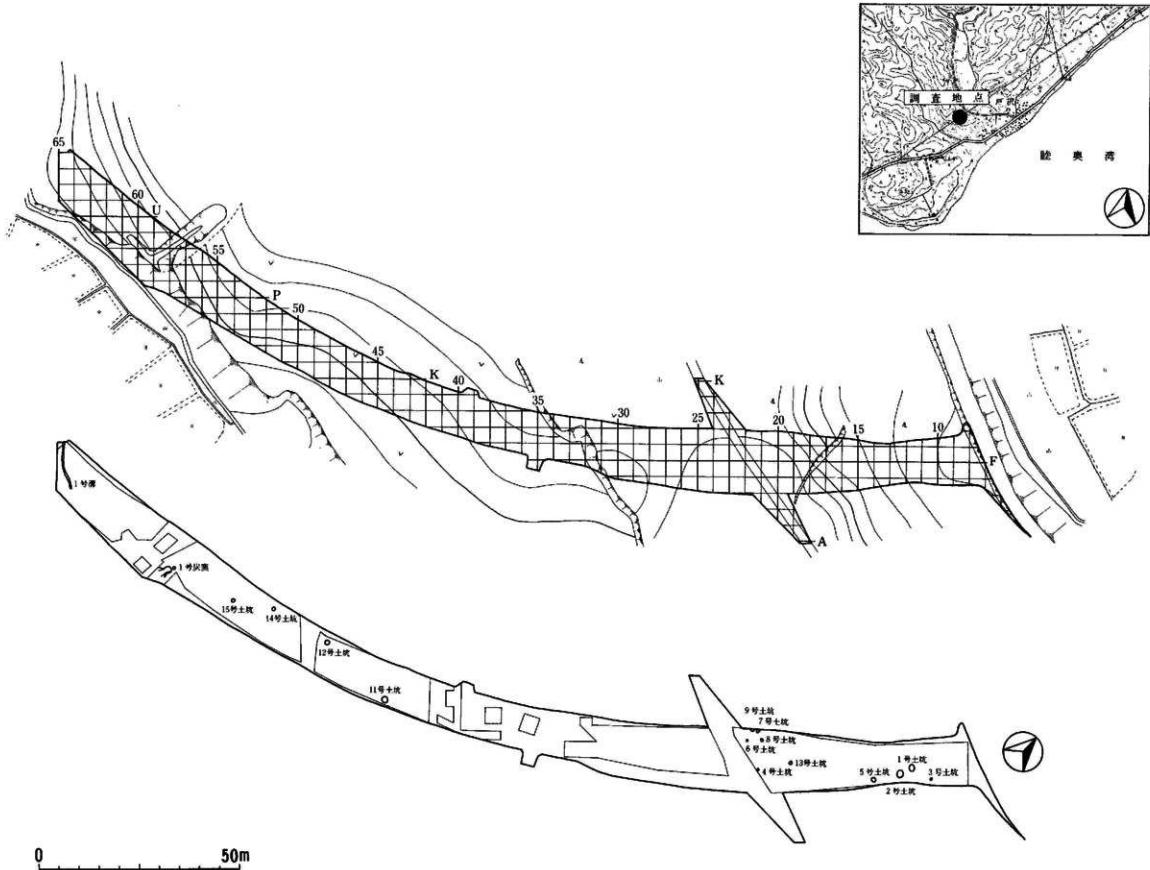
11月に入りIII・IV区の精査作業は順調に進んだが、最後に検出された第15号土坑は斜面に作られた大型の炭窯であり、また、天候も雪の降る日が見られるようになり、記録写真は思うように撮影できないまま作業を進めた。

11月17日の最終日にまで第15号土坑の精査は続いたが、無事精査を終了し、器材等の撤収作業も完了し無事発掘作業を終えた。

(小鎌 孝浩)



第1図 遺跡位置図



第2図 グリット及び遺構配置図

第二章 遺跡周辺の地形と地質

第1節 遺跡周辺の地形と地質

青森県立板柳高等学校 教諭 山口 義伸

下北半島は斧の形状をなし四周を海に囲まれる。斧の刃部にあたる部分には西部山地があって、奥羽脊梁山脈の北の延長部に相当する。西部山地の東縁部には第四紀火山である恐山火山が、北東縁部には雄岳火山が存在する。半島中央部には田名部低地帯があり、田名部川が低地帯を蛇行し、河口には三角洲が展開する（奈良1989）。他に、下北半島の主要河川としては川内川及び大畠川がある。大畠川はほぼ西部山地と恐山火山の山麓部との境界部を南流して陸奥湾に注ぐ。

恐山火山は、ほぼ中央部に直径5kmのカルデラがあり宇曇利山湖をなす。カルデラ内には後カルデラ丘としての鶴頭山と剣山の溶岩ドームが存在する。カルデラの周囲には、屏風山・小巖山・大巖山・円山などの諸峰を連ねた外輪山があり、さらに外輪山南麓には釜臥山・毛無山・障子山・北国山・荒川岳などの諸峰が存在する。恐山火山の噴火物は主に安山岩溶岩・角礫凝灰岩・軽石流堆積物・褐色ロームなどからなり、分布範囲はNE-SW方向を長軸とする橢円状を呈し、火山体東方に偏る（奈良1989）。恐山火山体は標高約200mまでは急峻な火山体をなし主に安山岩溶岩からなる。標高約80mまでは山麓地をなし主に角礫凝灰岩や軽石流堆積物などからなる。そして、標高約40m付近までは火碎流堆積物からなる火山性丘陵地を形成する。本遺跡は高野川一戸沢川間の田野沢台地東縁部にあり、この台地は標高40m付近まで軽石流堆積物からなる火山性丘陵地である。

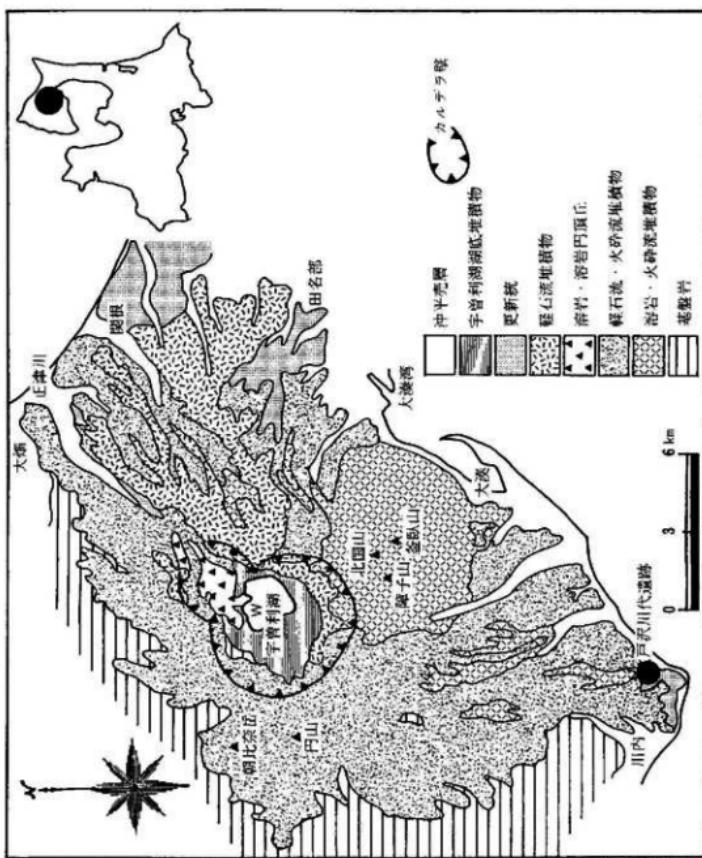
生出・中川・蟹沢（1989）による恐山火山発達史の概要は次のとおりである。

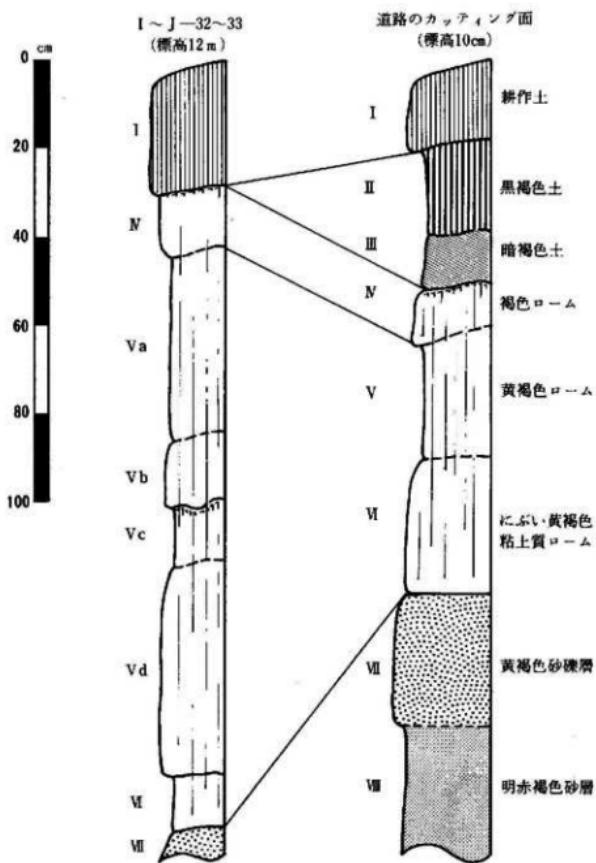
恐山火山は數十万～十萬年前に形成されたと推定され、その活動は釜臥山活動期・主活動期・カルデラ形成期・後カルデラ形成期の4期に区分される（第3図）。初期の釜臥山活動期では、恐山火山体の南麓において安山岩溶岩・火碎流堆積物からなる釜臥山成層火山体を形成する。釜臥山形成後に障子山の熔岩円頂丘が形成される。主活動期では、屏風山から大巖山を経て円山・朝比奈岳に至る火口群から大量の軽石流・火碎流堆積物及び少量の熔岩が噴出する。このため大部分の釜臥山活動期の噴出物が覆われる。この火碎流の噴出に関連して、カルデラ形成期としての宇曇利カルデラが形成される。そして、後カルデラ形成期では火山体東部へ軽石流堆積物が硫化し、のちにカルデラ内に剣山及び鶴頭山の熔岩円頂丘が形成される。

本遺跡は、陸奥湾北岸のほぼ中央部に位置する川内町に所在する。陸奥湾北岸に分布する段丘は宿野部段丘・川内段丘・永下段丘の3段である（中川、1972）。高位段丘の宿野部段丘は標高約40mで、山地及び丘陵地縁辺部に断片的に分布し開析度が大きい。中位段丘の川内段丘は標高15～20mで、海岸及び河岸沿いに発達し平坦面を有する。低位段丘の永下段丘は標高4～10mで、河岸沿いにあって河川に向かって緩やかに傾斜する。

本遺跡は田野沢台地東方を流れる戸沢川流域にあって、標高12～13mの中位段丘相当の川内段丘上に立地する。調査区域は戸沢川とその支流に挟まれた舌状の台地をほぼ東西に横断する形で分布する。したがって、東西両端は谷に向かう傾斜地であり、傾斜地はローム質の盛土が厚く盛られ耕地整備さ

第3図 息山火山の地質図（生出ほか 1989より転載）





第4図 調査区域内における土層の模式柱状図

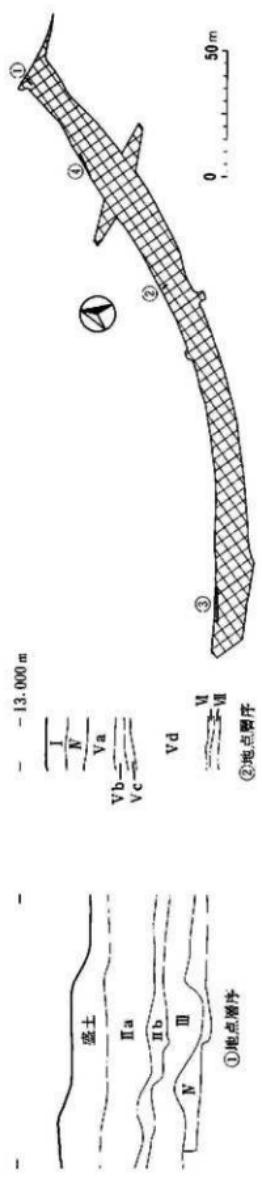
れている。戸沢川へは比高約10mの段丘崖で接し、支流へは急傾斜面で接する。なお、本遺跡の背後には火山性丘陵地が迫り、急崖もなく中位段丘から丘陵地へと地形的に移行する。

次に、本遺跡における基本層序の概要について述べる。調査区域全体がすでに開墾による土取り及び削平が行われていたので、基本層序の確認作業は調査区域に通じる道路のカッティング面で実施した。また、調査区域内のI～J-32～33付近に土取りによる落差1m強のカッティング面があったので特にローム層の特徴を把握した。32～33ライン以西では基本層序第V層まで削平し、50ライン以西ではおよそ第VI層まで削平しその上に搅乱したローム層を耕作土として盛り土している。なお、本遺跡の背後には恐山火山の火碎石堆積物からなる火山製の丘陵地が展開することから、その構成物である安山岩礫及び凝灰岩礫などが風化した軽石としてローム層に包含されているものもある。第4図は調査区域における土層の模式柱状図を、第5図は調査区内のセクションを表した。

I 層 暗褐色土 (10YR 3/3)	厚さ20～30cm。耕作による搅乱層である。全体的にローム質であり円礫の混入も多い。格子状の割れがみられ艶い。
II 層 黒褐色土 (10YR 2/3)	厚さ約20cm。粘性・湿性がありやや腐食質である。全体的にかたく締まる。ローム粒・炭化粒・焼土粒・小円礫などの混入物が目立ち、特にローム粒の混入が多い。
III 層 暗褐色土 (10YR 3/4)	厚さ5～10cm。漸移層である。粘性・湿性があり、全体的にローム質である。かたく締まる。
IV 層 褐色ローム (7.5YR4/6)	厚さ約10cm。粘土質である。最上部にクラックがみられ、暗色帯の特徴を持つ。
V 層 黄褐色ローム (10YR5/6)	厚さ約30cm。粘土質である。全体的にMn粒の混入が目立つ。I～J-32～33付近のカッティング面では4層に細分され120cm～130cmほどの厚さを有する。Vb層は特にMn粒が目立ち、Vc層は暗色帯の特徴を持ち、Vd層は粘性が強く下位のVI層に漸移する層である。
VI 層 にぶい黄褐色粘土質ローム (10YR5/4)	厚さ約30cm。かたく締まる。全体的に細粒砂質で径5mm以下の円礫もかなり含む。また、Mn粒及び軽石粒の混入もある。
VII 層 黄褐色砂礫層 (10YR5/6)	厚さ約30cm。全体的に酸化する。軽石質で、淘汰不良の砂質である。径5mm以下の円礫を多量に含む。また石英粒や風化した鉱物片あるいは軽石片と思われる白色斑点が目立つ。
VIII 層 明赤褐色砂層 (5YR5/8)	厚さ100cm以上。全体的に酸化した淘汰不良の粗粒砂を主体とする。砂鉄層及び軽石質砂層のラミナがみられ成層する。下部ほど径5mm以下の円礫を含む砂礫層へと変化する。

引用・参考文献

- 中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質(第二部) 青森県
生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史 1989 日本の地質2 東北地方 共立出版株式会社
奈良正義 1989 むつ市史 自然編 むつ市



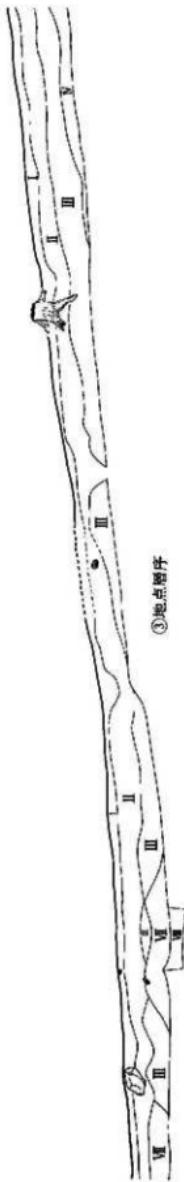
10,000 m

0

50 m

① 地点断面
② 地点断面

③ 地点断面
④ 地点断面

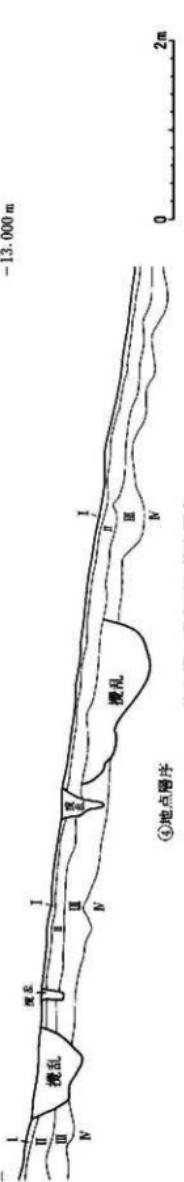


-13,000 m

0

10,000 m

① 地点断面
② 地点断面



-13,000 m

0

2 m

③ 地点断面
④ 地点断面

⑤ 地点断面
⑥ 地点断面

第三章 検出遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、土坑13基、溝跡1条、炭窯跡1基である。

出土遺物は、1号土坑、6号土坑、9号土坑、溝からそれぞれ縄文時代の土器片が出土した。

第1節 土 坑 (第7~10図)

本遺跡から検出された土坑は13基である。

第1号土坑 (第7図)

[位 置] E-11グリッドに位置する。

[重 複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、橢円形を呈する。開口部長軸166cm・短軸124cm、坑底部長軸98cm・短軸35cmで、深さは55cmである。壁は、南東側に段が見られるが、その他の壁は、底面から開口部にかけてやや急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。層中に、炭化物粒とロームブロックを微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 縄文時代中期と思われる土器片が1片出土した。

第2号土坑 (第7図)

[位 置] F-11・12グリッドに位置する。

[重 複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、不整形である。開口部長軸207cm・短軸162cm、坑底部長軸62cm・短軸53cmで、深さは78cmである。壁は、底面から開口部にかけて急に立ち上がり開口部が広がる。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 6層に分層できた。層中に、炭化物粒とロームブロックを微量に含む。断面観察等から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

第3号土坑 (第7図)

[位 置] D・E-9・10グリッドに位置する。

[重 複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部直径50cm程、坑底部直径36cm程の円形を呈する。深さは32cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり開口部が若干広がる。底面は、若干起伏が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。層中に、炭化物粒を微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

第4号土坑 (第7図)

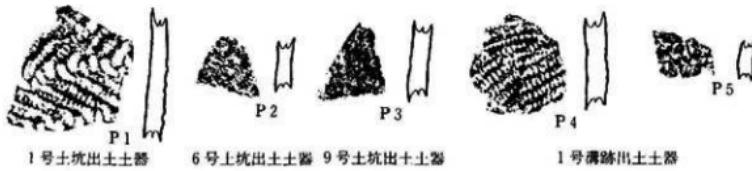
- [位置] E-20グリッドに位置する。
- [重複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、開口部直径50cm程度の円形を呈する。深さは15cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面のほぼ中央に深さ17cmのピットを1個検出した。
- [堆積土] 3層に分層できた。層中に、炭化物粒を微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] なし

第5号土坑 (第8図)

- [位置] D・E-13グリッドに位置する。
- [重複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、開口部直径90cm程度、坑底部直径80cm程度の円形を呈する。深さは54cmである。壁は、底面から開口部に垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、平坦である。
- [堆積土] 3層に分層できた。層中に、炭化物粒とロームブロックを微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] なし

第6号土坑 (第8図)

- [位置] G-21グリッドに位置する。
- [重複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、不整形である。開口部長軸87cm・短軸68cm、坑底部長軸44cm・短軸32cmで、深さは40cmである。壁は、南東側に段が見られるが、その他の壁は、底面から開口部にかけて急に立ち上がり、開口部が広がる。底面はほぼ平坦である。
- [堆積土] 3層に分層できた。層中に、炭化物粒とロームブロックを微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] 繩文時代後期と思われる土器片が1片出土した。



第6図 遺構内出土遺物

第7号土坑（第8図）

- [位 置] G・H-20グリッドに位置する。
- [重 複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、橢円形を呈すると思われる。開口部及び坑底部長軸は、本遺構が調査区域外に伸びるため不明である。開口部短軸90cm、坑底部短軸78cmで、深さは24cmである。壁は、北側は不明であるが、その他の壁は、底面から開口部にかけて垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。
- [堆 積 土] 5層に分層できた。層中に炭化物粒とロームブロックを微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] なし

第8号土坑（第8図）

- [位 置] G-20グリッドに位置する。
- [重 複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、不整形である。開口部長軸75cm・短軸63cm、坑底部長軸64cm・短軸52cmで、深さは27cmである。壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、開口部が若干広がる。底面は、ほぼ平坦である。
- [堆 積 土] 1層である。層中に炭化物を微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。
- [出土遺物] なし

第9号土坑（第9図）

- [位 置] G・H-21グリッドに位置する。
- [重 複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 本遺構の北側が調査区域外に伸びているため、平面形及び規模は不明である。深さは55cmである。確認できた壁は、底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり開口部が若干広がる。底面は起伏が認められる。
- [堆 積 土] 3層に分層できた。層中に炭化物粒とローム粒を微量に含む。断面観察等から自然堆積と考えられる。
- [出土遺物] 繩文時代中期末から後期初頭に比定されると思われる土器片が1片出土した。

第11号土坑（第9図）

- [位 置] I-44グリッドに位置する。
- [重 複] 認められなかった。
- [平面形・規模] 平面形は、開口部直径130cm程、坑底部直径105cm程の円形を呈する。深さは47cmである。壁は、南側が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は、底面から開口部にかけて急に立ち上がり、開口部が広がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。層中に炭化物粒とローム粒を少量に含む。断面観察等から自然堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

第12号土坑 (第9図)

[位置] L・M-47・48グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、方形を呈する。開口部長軸146cm・短軸130cm、坑底部長軸115cm・短軸96cmで、深さは52cmである。壁は、底面から開口部にかけて急に立ち上がり、開口部が広がる。底面のはば中央に、深さ18cmのピットを1個検出した。底面は、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。層中に、貝殻の破片が少量と炭化物と焼土を多量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

第13号土坑 (第9図)

[位置] D・E-18グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は、開口部直径65cm程、坑底部直径35cm程の円形を呈する。深さは20cmである。壁は、底面から開口部にかけて急に立ち上がり、開口部が広がる。底面は、若干起伏が認められる。

[堆積土] 2層に分層できた。層中に炭化物粒を微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

第14号土坑 (第10図)

[位置] O-53グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。開口部長軸139cm・短軸105cm、坑底部長軸45cm・短軸25cmで、深さは54cmである。壁は、南側が底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がり、開口部が広がる。

[堆積土] 3層に分層できた。層中に炭化物粒を微量に含む。断面観察等から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] なし

(小館 孝浩)

第2節 溝跡 (第10図)

本遺跡から検出された溝跡は、1条である。

第1号溝跡 (第10図)

[位置] V・W・X-64グリッドに位置する。

[重複] 認められなかった。

[平面形・規模] 溝跡の全形は、北西側が調査区域外のため不明である。検出された部分は緩い弧状を呈し、長さ12m、幅39cm～45cmで、深さ54cmである。底面は、平坦である。

[堆積土] 4層に分層できた。暗褐色土を基調としている。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 繩文時代前期の土器の小破片が2片出土した。

[その他] 調査区域内の本遺構の周辺では他の遺構は検出されず、出土遺物の繩文土器についても覆土中の出土のため流れ込みと考えられる。構築時期については、不明である。

(小館 孝浩)

第3節 炭窯跡 (第11図)

本遺跡から検出された炭窯跡は、1基である。

第1号炭窯跡 (第11図)

[位置] P・Q-57・58グリッドに位置する。

[確認] 本遺跡の調査以前に斜面の堆積土を確認するために、トレンチを設定し掘り下げたところで確認されたものである。よって、煙道部の覆土等を確認できなかった。

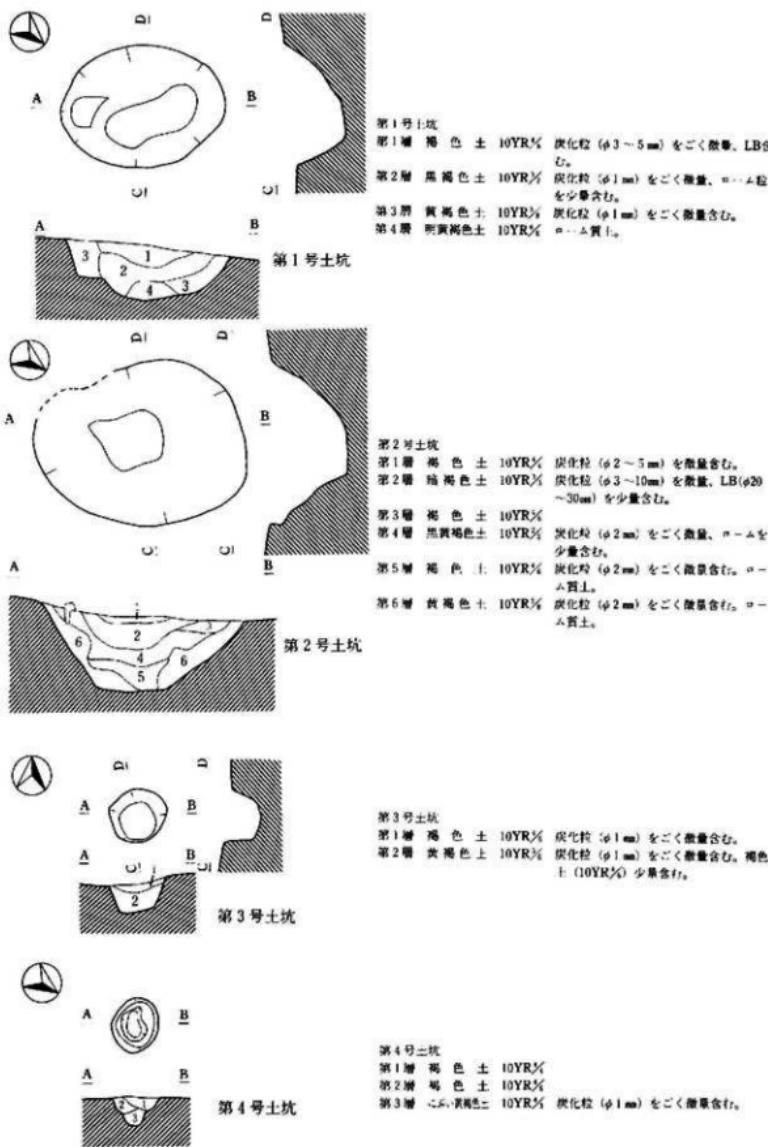
[平面形・規模] 平面形は、東側と南側が調査区域外に延びるため不明であるが、検出された部分は円形の焼成部と南側に末広がりに前庭部が存在する。炭化室は直径145cmほどで確認された深さは173cmである。壁は底面から内反して立ち上がっている。焼成部と前庭部を繋ぐ燃焼部は、長さ80cm、幅36cmである。前庭部は調査区域外に広がるため確認できなかった。窯底は、平坦である。煙道部は、崩落等により全容は確認できなかったが、確認できた範囲では北側に反るように造られていたと考えられる。煙道口は、直径25cmほどの円形である。煙出部には3個の鏡石が意図的に重ねられており、下位の石の両脇には壁面に埋め込んだ石も検出された。

[堆積土] 5層に分層できた。層中下位に多量の炭化物及び焼土を含む。火山灰等は検出されなかった。炭窯廃棄等による人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 出土しなかった。

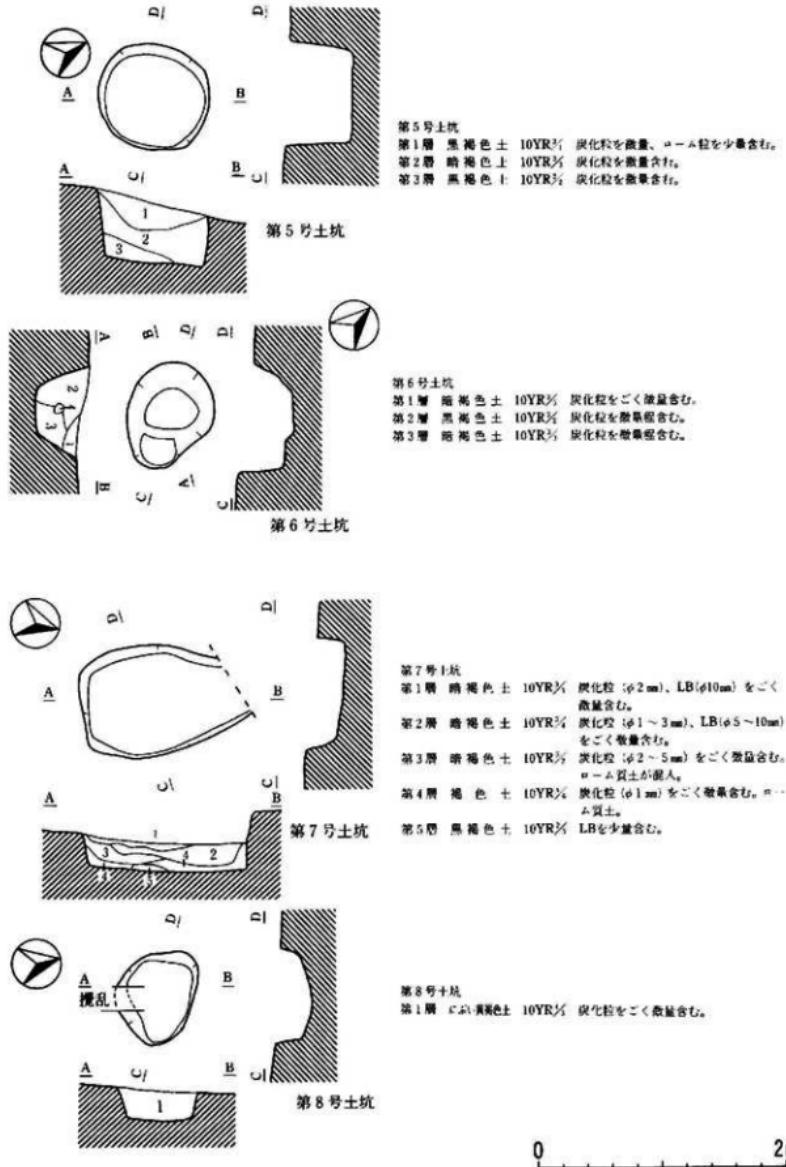
[小結] 本遺跡は、地山斜面を利用して、直径10～20cmほどの礫を多量に含み堅くしまりのある第Ⅱ層を掘り込んで作られた横穴式の炭窯であったと思われるが、崩落等により全容は確認できなかった。また、本遺跡は、調査区域外にまたがる斜面で確認され、それに続く斜面が調査区域外に延びるため他に同様の炭窯があったかは確認できなかった。構築時期については、地元の老人がその存在を知らなかつたことなどから、少なくとも明治前半からそれ以前に遡るものと思われる。

(小館 孝浩)

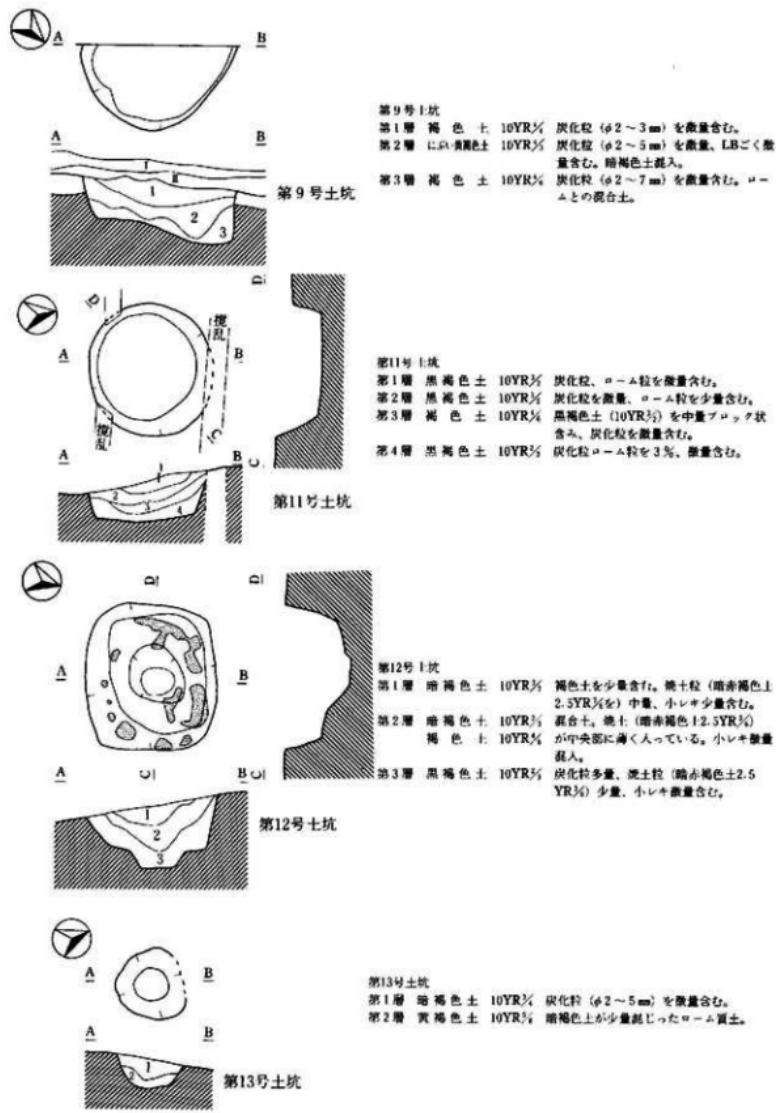


第7図 土坑 I (1号～4号)

0 2m

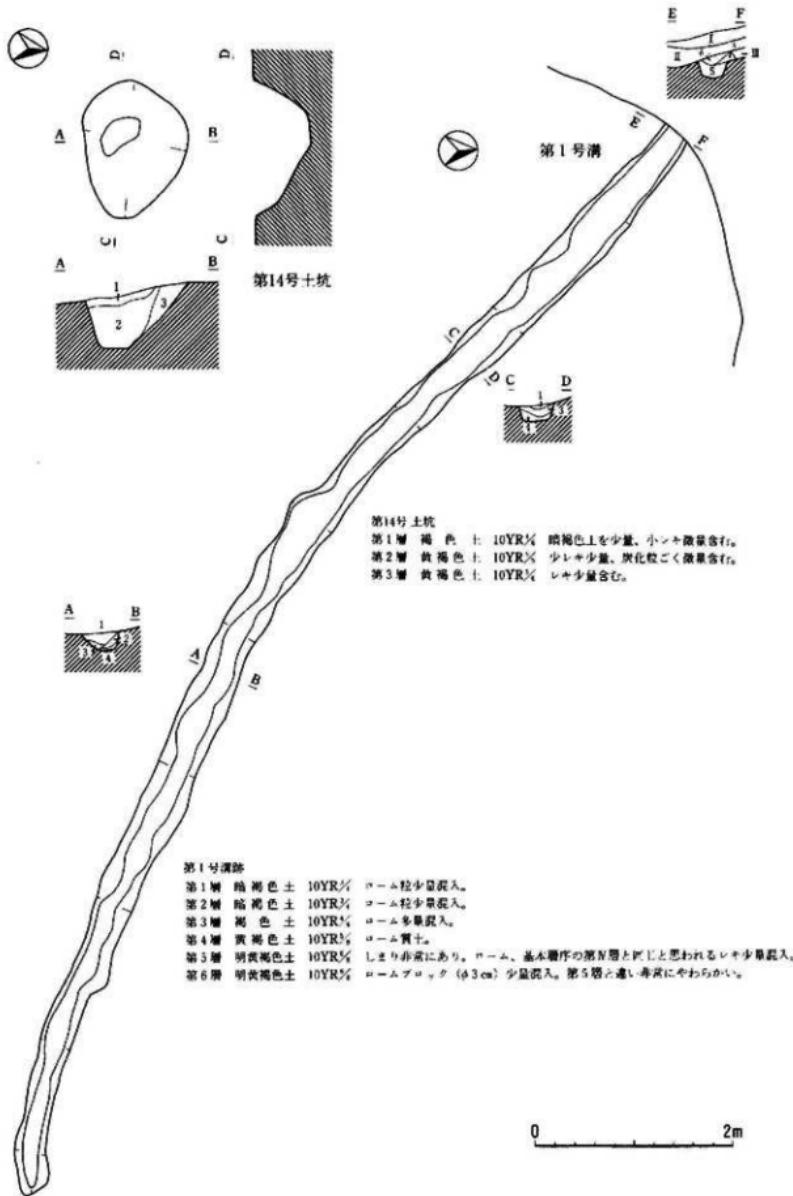


第8図 土坑2 (5号～8号)

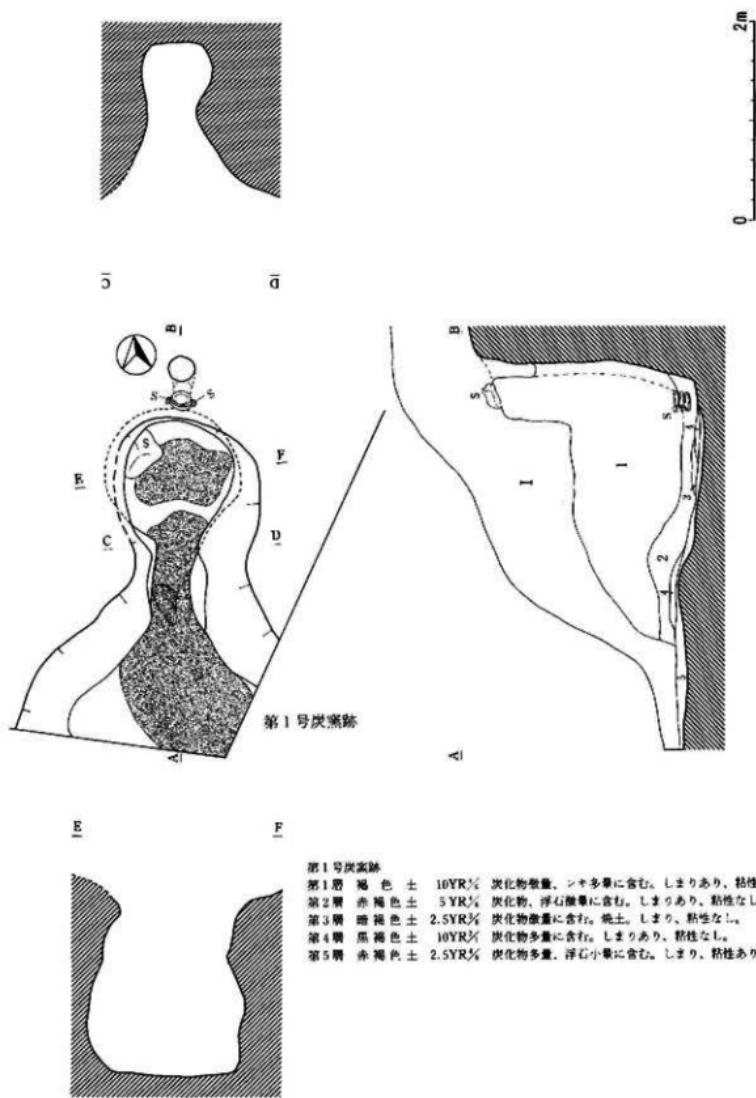


0 2m

第9図 土坑3（9号・11号～13号）



第10図 土坑4（14号）・溝跡（1号）



第11図 炭窓跡

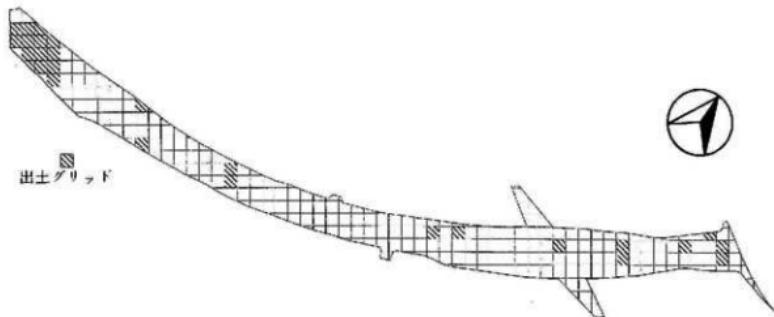
第IV章 遺構外出土遺物

第1節 繩文時代の遺物

遺構外から出土した縄文土器は段ボール箱2箱分である。その出土分布状況は、調査区全域から分散的に出土しているが、調査区西側からの出土量がやや多い（第12図）。

復元可能なものは1個体もなく、器形や施文文様全体をとらえることはできなかった。

以下、その概要について記述する。



第12図 縄文土器出土分布状況

1 上 器

I群土器（第13～16図）（第2～4表）

縄文時代前期の土器で、円筒下層a～b式土器に比定されるものを一括した（1～7, 9, 12, 38, 45, 46, 53, 55, 57）。

口部文様帶を区画する隆帯のないもの（1～4）とあるもの（5, 6, 12）が川上している。胴部に膨らみをもたせたものも見られる（1）。7の底面には縄文の圧痕がみられる。

II群土器（第13～16図）（第2～4表）

縄文時代中期の土器を一括した。円筒上層a～c式土器に比定されるものと思われる。出土した縄文土器の大部分を占めている。破片が多く、器形のわかるものは極めて少ない。したがって、円筒上層式土器だと思われるものの、地文縄文部分のみのため形式不詳の土器片をD類として一括した。

以下、A～D類に分類して記述する。

- A類 円筒上層a式に比定されるもの
- B類 円筒上層b式に比定されるもの
- C類 円筒上層c式に比定されるもの
- D類 時期不詳の土器

A類 (第13図10, 11, 13, 16, 17) (第14図19~22, 24~29) (第15図34, 37, 39)

円筒上層a式に比定されるものである。Ⅱ群土器の大部分を占める。大型の弁状突起を有し、突起部は膨隆する。口唇部及び隆帯上には、撚糸圧痕が密に刻まれている。口頸部文様帶は、突起部直下に貼り付けられた隆帯によって区画され、その内部を原体の側面圧痕による縦位、横位、鋸歯状、渦巻状等の文様が多様に施されている。

B類 (第13図14) (第14図23, 30, 31) (第15図33)

円筒上層b式に比定されるものである。突起頂上部の凹みが深く、口頸部文様帶内部には、原体側面圧痕による馬蹄状文や羽状文がみられる。

C類 (第14図18) (第15図32, 35, 36)

円筒上層c式に比定されるものである。突起が大きく、把手状を呈する。原体の側面圧痕による刻目が粗くなり、貼り付けられた隆帯も細身である。口頸部文様帶は隆帯によって区画され、その隆帯に沿って刺突列が施されている。a、b類土器に比べ、器厚は薄い。

D類 (第13図8) (第15図42~44) (第16図47~52, 54, 56, 58)

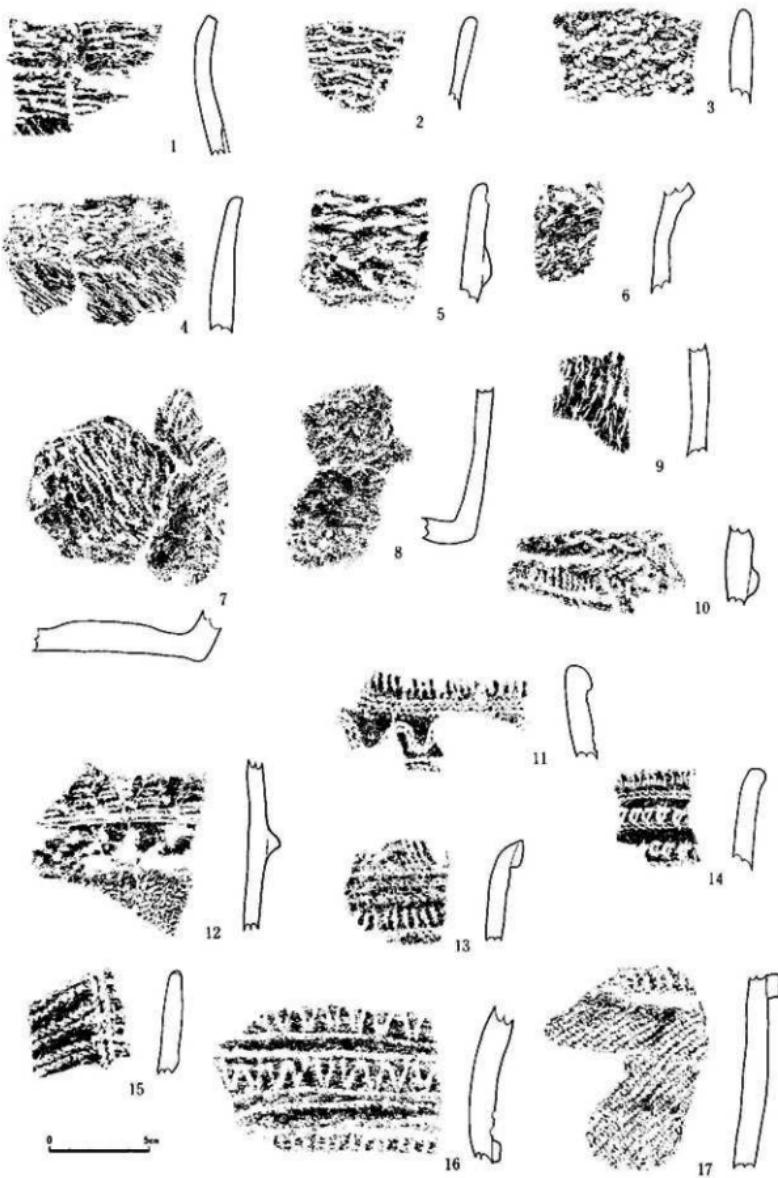
地文繩文部分のみの土器小片で、上記A~C類土器のような形式決定のメルクマールを持たないものを一括した。

III群土器 (第15図40, 41) (第4表)

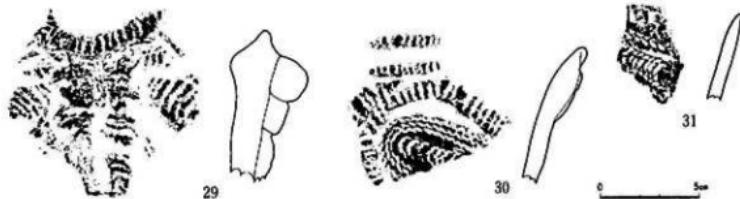
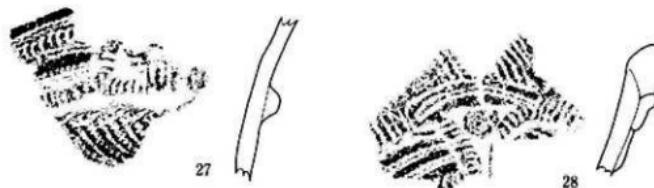
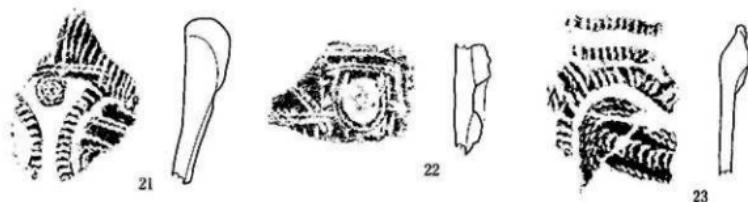
中期末葉～後期初頭に比定されると思われる土器である。粗製土器の口縁部2片の出土である。器形は口縁部がやや外反気味であるが、ほぼ胴部から口縁部まで直立する円筒形を呈すると思われる。口縁部は、3cmほどの幅で折り返され、指で荒く磨り消している。

N群土器 (第16図59~62) (第4表)

繩文時代後期初頭に位置付けられると思われる土器である。出土破片数は4片のみで、いずれも胴部片である。沈線による区画文と磨消繩文によって、文様が構成されている。

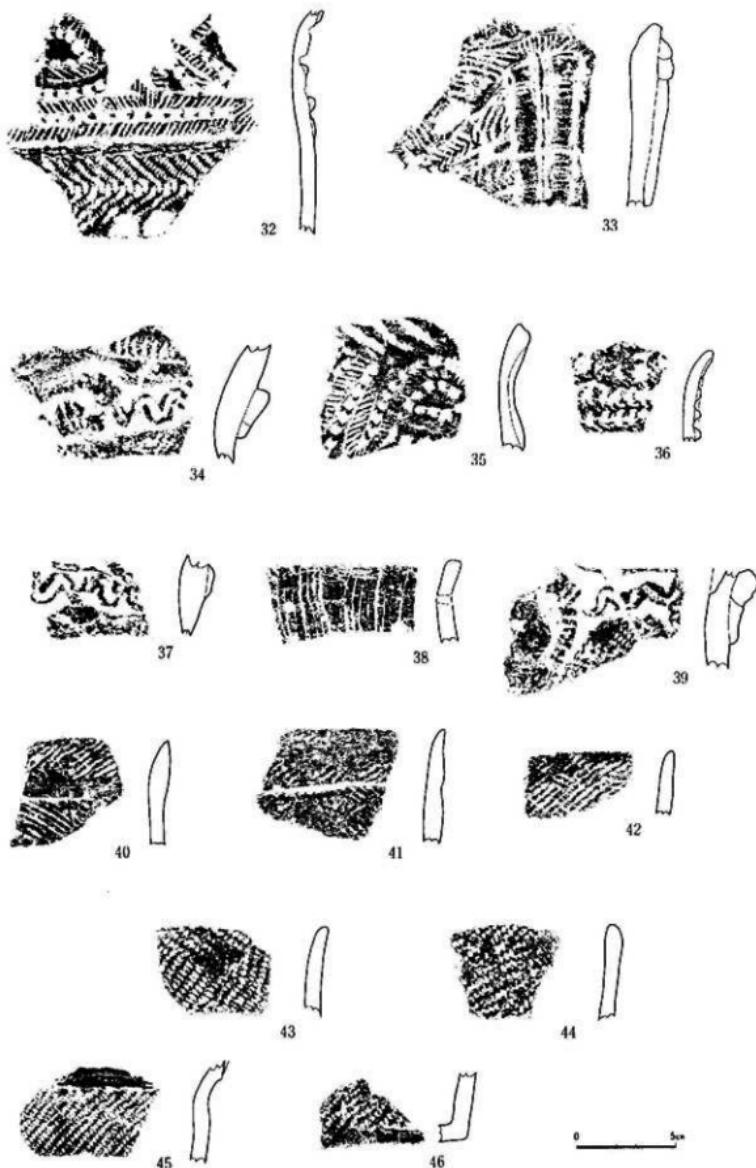


第13図 遺構外出土土器 I (縄文時代)



0 5mm

第14図 遺構外出土土器2（縄文時代）



第15図 遺構外出土土器3 (縄文時代)



第16図 遺構外出土土器4（縄文時代）

器番号	出土遺跡	層位	部位	外文	文様	備考
P 1	1号土坑	覆土	胸 部	R L · L R 終束羽状縞文		
P 2	6号土坑	覆土	胸 部	磨消縞文		摩滅激しい、炭化物付着
P 3	9号土坑	覆土	胸 部	磨消縞文		繊維混入
P 4	10号土坑	覆土	胸 部	L R 斜行縞文		
P 5	10号土坑	覆土	胸 部			繊維混入・摩滅激しい、

第1表 通縛内外出土器観察表

器番号	出土地・層	分類	部位	位	土文	様	「その他の技法」	地文	文	繊維	備考
1	M-54・II	I	口 線 部	LR 単輪条体回転文						57	繊維混入
2	M-54・II	I	口 線 部	LR 単輪絶条体回転文						58	繊維混入
3	U-61・II	I	口 線 部				RL 斜行縞文			7	繊維混入
4	F-8・III	I	口 線 部	単輪絶条体回転文				LR 斜行縞文		26	繊維混入
5	F-8・III	I	口 線 部	隆帶上 LR 側面圧痕文、絆条体回転文						28	繊維混入
6	E-8・II	I	肩 部	隆帶による区画文						9	繊維混入
7	E-5・II	I	底 部	底面に RL 斜行縞文			RL 斜行縞文			6	繊維混入
8	E-I, D-I, II	II D	底 部	底部直上調整のための研磨						17	
9	O-50・II	I	肩 部				R 撥り戻し			19	繊維混入
10	V-63・II	II A	胴 部	結節圧痕文、隆帶上 LR 側面圧痕文						42	
11	Us, Vs & I	I A	口 線 部	口唇部 LR 側面圧痕文、波状圧痕文						36	
12	M-54・II	I	口 線 部	口唇部縫帶貼付						60	繊維混入
13	T-61・II	II A	口 線 部	RL 平行圧痕文、RL 列点状圧痕文						52	
14	V-62・II	II B	口 線 部	口唇部 LR 側面圧痕文、馬蹄状圧痕文						39	

第2表 通縛外出土器観察表 1 (縞文時代)

圖番号	出土地・層	分類	部位	主 文	様	「その他の技法」	地	文	類別	備 考
15	W-64・II	IIA	口縁 部	口唇部工具による刺突文、RL側面圧痕文					37	
16	W 63・II	IIA	口縁 部	LRL平行圧痕文、鋸齒状圧痕文					47	
17	W-63・II	IIA	觸 部	隆脊上RL側面圧痕文		LR斜行繩文			48	
18	D-8・II	IIIC	口縁 部	隆脊による弧状文、I.貝による刺突文					29	
19	F-11・II	IIA	口縁 部	隆脊上にLR湯匙状圧痕文					10	
20	V-63・II	IIA	口縁 部	円状隆脊貼付文、隆脊上RL側面圧痕文					27	
21	T-61・II	IIA	口縁 部	LR側面圧痕文、ボタン状貼付文					51	
22	U-62・II	IIA	口縁 部	隆脊上RL側面圧痕文					33	
23	V62, 63・II	IIIB	口縁 部	把手状突起、LRL馬蹄状圧痕文					38	
24	X-64・III	IIA	口縁 部	口唇部隆脊貼付、RL側面圧痕文		LR・RL結束羽状繩文			59	
25	V-63・II	IIA	口縁 部	RL側面圧痕文、刺突文					45	
26	W-62・II	IIA	口縁 部	RL側面圧痕文、ボタン状貼付文		RL結束繩文			46	
27	T-61・II	IIA	口縁 部	RL側面圧痕文		RL結束繩文			49	
28	T-61・II	IIA	口縫 部	LR側面圧痕文、ボタン状貼付文					50	
29	V-62・II	IIA	口縫 部	把手状突起、隆脊上LR側面圧痕文					41	
30	V-63・II	IIIB	口縫 部	把手状突起、LRL馬蹄状圧痕文					31	
31	V-63・II	IIIB	觸 部	LR側面圧痕文、馬蹄状圧痕文					21	
32	E-11・II	IIIC	体部上半	RL側面圧痕文、刺突文		LR・RL結束羽状繩文			56	
33	U-62・II	IIIB	口縫 部	隆脊上RL側面圧痕文、RL側面圧痕文					40	
34	U-62・II	IIA	口縫 部	隆脊上LR側面圧痕文		LR斜行繩文			44	繊維混入
35	E-11・II	IIIC	口縫 部	把手状突起、刺突文、RL側面圧痕文					55	
36	E-8・III	IIIC	口縫 部	隆脊上区画文					8	
37	U-62・II	IIA	觸部上半	隆脊上LR側面圧痕文					43	補修孔（2ヶ所）
38	X-64・II	I	口縫 部	工具による櫛口状文					34	繊維混入

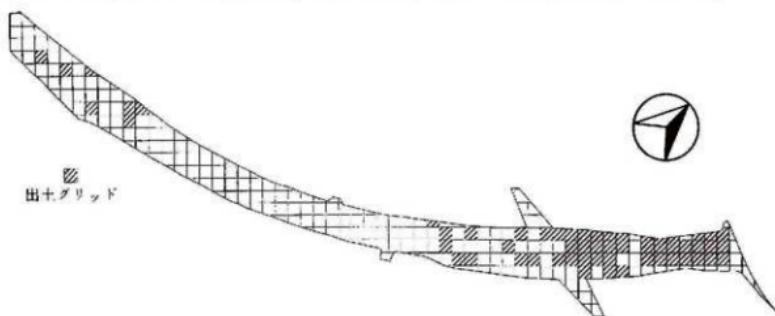
第3表 週縁外出土器觀察表2（繩文時代）

図番号	出土地・層	分類	部 位	主 文 横	様	〔その他の技法〕	地 文	文	織錦	備 考
39	W-62・II	IIA	口縫 韻	隆帯上R L側面压痕文					61	
40	K-47・N	III	口縫 韵	口縫部壓消「折り返し口縫」		斜行縫文			16	
41	K-47・N	III	口縫 韵	口縫部壓消「折り返し口縫」		斜行縫文			15	
42	K-47・N	IID	口縫 韵	口縫部壓消「折り返し口縫」		L R斜行縫文			23	
43	Q-58・II	IID	口縫 韵	口縫部		L R斜行縫文			18	
44	L-47・N	IID	口縫 韵	口縫部		R L斜行縫文			14	
45	W-64・II	I	胸 韵	口縫部直下壓消「指などで調整痕」		L R斜行縫文			35	織錦混入
46	F-11・II	I	底 韵	部	〔底面研磨〕	L R斜行縫文			4	織錦混入
47	W-63・II	IID	胸 韵	部		L R斜行・結束縫文			11	
48	D-7・II	IID	胸 韵	部		L R・R L羽状縫文			25	
49	W-13・II	IID	胸 韵	部		L R・R L結束羽状縫文			24	
50	D-7・II	IID	胸 韵	部		L R・R L結束羽状縫文			22	
51	V-63・II	IID	胸 韵	部		R L斜行縫文			54	炭化物付着
52	V-63・II	IID	胸 韵	部		L R・R L結束羽状縫文			53	
53	V-61・II	I	胸 韵	部		L R斜行縫文			30	織錦混入
54	X-64・II	IID	胸 韵	部		L R斜行縫文			32	
55	D-7・II	I	胸 韵	部		R L燃り戻し			12	織錦混入
56	W-63・II	IID	胸 韵	部		L R斜行縫文			13	
57	F-8・II	I	底 韵	部		R L斜行縫文			20	織錦混入
58	G-17・II	IID	胸 韵	部		L R横走縫文			62	
59	Q-54・III	N	胸 韵	部	沈線文、光填縫文〔磨消〕				2	
60	Q-54・III	N	胸 韵	部	沈線文、光填縫文〔磨消〕				1	
61	Q-54・III	N	胸 韵	部	沈線文、光填縫文〔磨消〕				3	
62	Q-54・III	N	胸 韵	部	沈線文、光填縫文〔磨消〕				5	

第4表 通様出土器觀察表3 (縫文時代)

第2節 弥生時代の遺物

遺構外から出土した弥生時代の遺物は段ボール箱3箱分である。その出土状況は、Gライン以東の調査区東側に集中している（第17図）。土器とともに、中空土偶の腰部が1点出土している。



第17図 弥生土器・土偶出土分布状況

1. 土 器

器形が分かる段階まで復元できたものは3個体にとどまり、あとはほとんどが小破片である。したがって、器形による分類を避け、施文されている文様による分類を試み、器形の判別または推定できるものについてはその都度記述することとした。

I群土器（第18～20図）（第5～7表）

主文様によって、A～Eの5つに分類した。

- A類 工字文を施文したもの
- B類 変形T字文を施文したもの
- C類 波状工字文を施文したもの
- D類 沈線を施文したもの
- E類 主文様のみられないもの

A類（第18図13, 19）（第19図22, 34, 36～38）（第20図①）

工字文を施文した類の上器である。肩部上半に最大径を持ち、肩部が内湾し、口縁部が外反する鉢形を呈するものが多い（①, 13, 22, 34, 36, 38）が、肩の張った壺形（37）、壺形（19）を呈するものもある。口縁部は、13が波状を呈する他は、平縁である。主文様のT字文は、肩部から頸部中央にかけて流水状に施文されている。19と37は結節部に粘土瘤を持つ。①の肩部下半にはRL単節縄文が横走している。沈線間を無文化したものもある（①, 19）。器内外面に炭化物の付着したものが多い。

B類（第18図1, 2, 4, 5, 7, 21）（第19図23～28, 30, 31, 33, 41）

変形T字文を施文した類の土器である。山形突起を有する波状口縁のものと平縁のものとがみられ

る。器形には、胸部から口縁部まで直立気味に立ち上がるものと、肩部が内湾し口縁部が外反するものがある。山形突起を有する土器片の胎土・焼成が良く、器内外面とも丁寧に研磨されているのに対して、平縁の土器片は摩滅が激しい。結節部の粘土瘤は、押し引きによって結節部に集められ、大きさを整えている。口唇上面に沈線を施したもの（1, 23）、口端部に刻目を施したものもみられる。

C類（第18図8, 10, 16, 18）（第19図40）（第20図②）

波状工字文を施した類の土器である。肩部が内湾し口縁部が外反する鉢形（8, 10, 18, 40）もしくは台付深鉢形（②-a, b）を呈する。16は、胸部下半から口縁部まで直線的な断面形状である。口端部に刻み目を施した波状口縁を呈し、口縁部は沈線に沿って無文帯を形成し、主文様帯がそれに続くように頸部に施されている。主文様は波状工字文と上下2条ずつの横位平行沈線、刺突文充填によって構成される。波状工字文の結節部には、粘土瘤が貼り付けられているが、B類のそれに比べるとかなり小さくなっている。②, 8, 10, 16の体部下半には、RL単節繩文が縱走する。18と40は、主文様施文後に文様帯部分を研磨せず、地文繩文をそのまま残している。

D類（第18図3, 6, 9, 11, 12, 14, 15, 17）（第19図29, 32, 35, 42～50）（第20図63）

沈線を施した類の土器である。沈線の幅は4～5mmと幅広で浅い。2～3条を横走させたものが多いが、4条のもの（29）、6条のもの（17）もみられる。いずれも小破片であるが、胎土・器厚等の観察から、A～C類のいずれかに属する可能性が高い。

E類（第20図51～55, 57～59, 64～66, ③）

地文繩文のみで主文様がみられない類の土器である。地文繩文はいずれもRL単節繩文が縦位に施文されている。断面形状から、深鉢形ないしは壺形を呈すると思われる。D類と同様、A～C類のいずれかに属する可能性が高い。

II群土器（第18図20）（第20図56, 60～62, ④）（第5・7表）

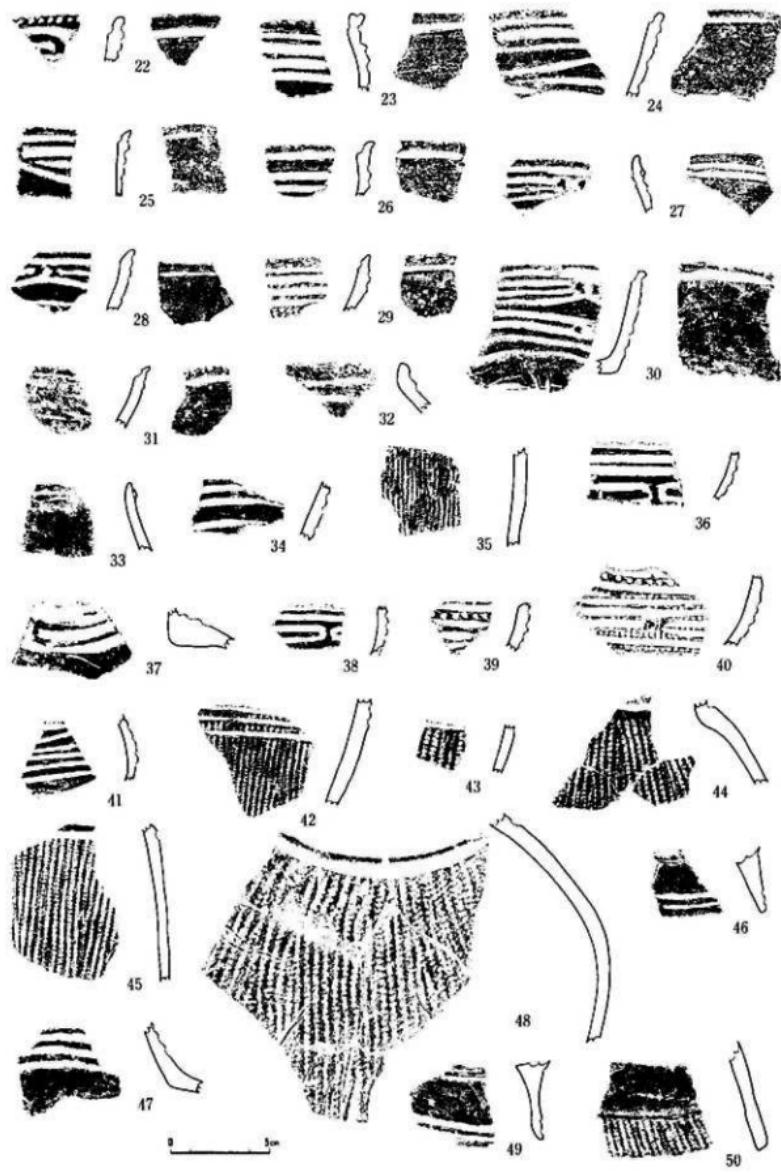
時期不詳の土器群である。6片あるが、④と60, 61, 62は、素文の土器片である。61と62は丁寧に研磨されており、④には指撫による器面調整痕がみられる。いずれも小破片であるが、胎土・器厚等の観察から、弥生時代の土器である可能性が高い。20は器厚が8mm～9mmと厚く、口縁は不規則な波状を呈する。地文の繩文原体は、I群土器に比べ太く、燃りもI群土器にほとんどみられないLRの単節である。繩文時代の土器の可能性も考えられる。

2 土偶（第20図67）（第11表）

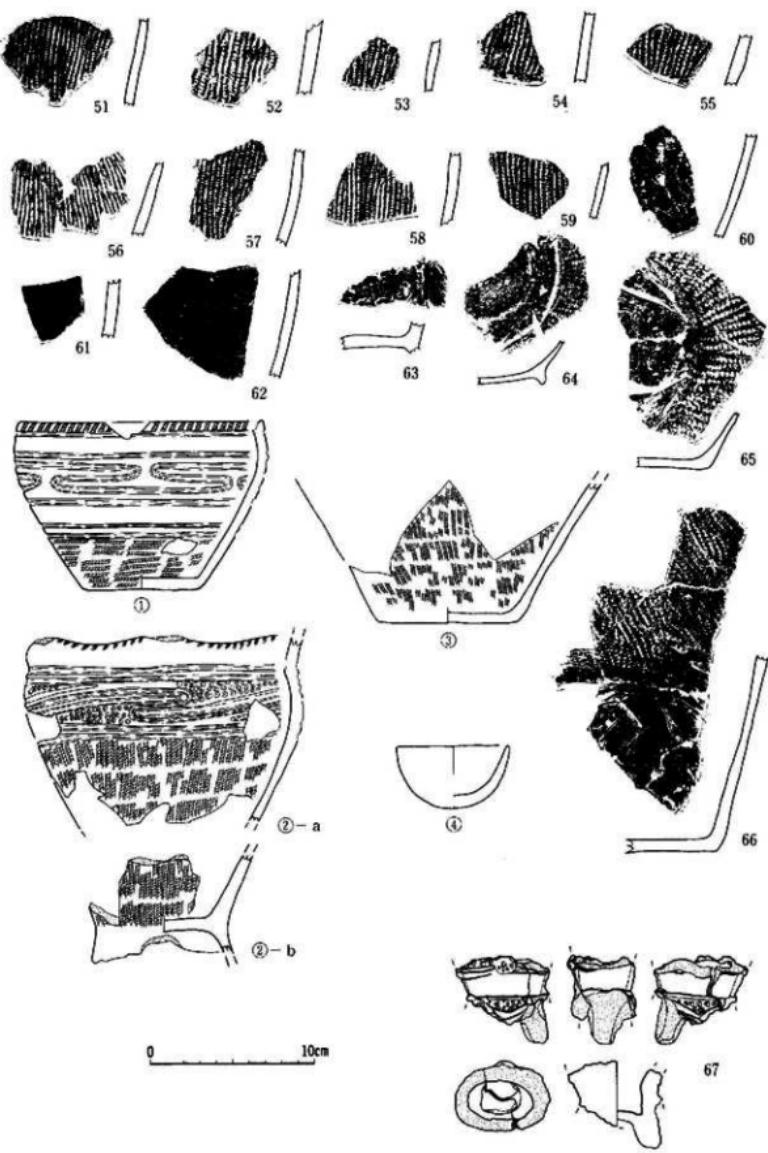
腰から脚の付け根部分である。沈線と刺突、小ボタン状粘土粒貼付によって文様が施され、装飾されている。粘土粒は、腰もしくは身に付ける装飾品を表すものであろうか。脚部は欠損しているが、残存部分の形状から、腰部と脚部の接合は、腰部から延びた芯部に脚部をはめ込むという方法を採っていたと思われる。この土偶片は、②土器と共に出土している。



第18図 遺構外出土土器 5 (弥生時代)



第19図 遺構外出土土器6（弥生時代）



第20図 遺構外出土土器7・土偶(弥生時代)

器物名	出土地・層	分類	部 位	外 面 の 文 標	(地文)	内面	器 形	體積	備 考
1	G-17・II	I B	II 緑 部	山形突起、変形工字文、粘土瘤、口唇部沈線、ミガキ		沈線	鉢	42	炭化物付着
2	G-20・III	I B	口 緑 部	山形突起、変形工字文、粘土瘤、ミガキ		沈線	鉢	43	
3	G-18・II	I D	口 緑 部	山形突起、横位沈線（2条）、(R L綫走縦文)		沈線	一	36	
4	F-20・III	I B	口 緑 部	山形突起、横位沈線（2条）、 ^ノ 文消縦文		沈線	一	61	
5	E-18・II	I B	口 緑 部	二叉状山形突起、口端キザシ、唇消縦文		沈線	鉢	51	炭化物付着
6	E-18・II	I D	II 緑 部	山形突起、横位沈線（2条）、口端キザシ		沈線	壺	56	
7	F-19・III	I B	口 緑 部	二叉状山形突起、口端キザシ、唇消縦文		沈線	鉢	—	26
8	F-10・II	I C	口 緑 部	波狀口縁、波狀工字文、口端キザシ、横位沈線（1条）、刺突		沈線	鉢	47	炭化物付着
9	E-18・II	I D	口 綠 部	楕位沈線（2条）、II端キザシ		沈線	壺	5 3	
10	E-10・II	I C	口 緑 部	波狀口縁、波狀工字文、口端キザシ、刺突、(R L綫走縦文)		沈線	鉢	49	炭化物付着
11	F-3・III	I D	口 緑 部	波狀口縁、楕位沈線（1条）、口端キザシ		沈線	浅鉢	17	
12	D-17・III	I D	口 緑 部	波狀口縁、楕位沈線（1条）、II端キザシ、ミガキ		沈線	鉢	20	
13	G-19・II	I A	口 緑 部	波狀口縁、変形工字文、口端キザシ、ミガキ		沈線	浅鉢	35	炭化物付着 摩滅
14	E-18・II	I D	II 緑 部	波狀口縁、楕位沈線（2条）、無文帶		沈線	深鉢	44	炭化物付着
15	G-18・II	I D	口 緑 部	波狀口縁、唇消縦文		沈線	—	41	
16	F-17・II	I C	口 緑 部	波狀口縁、波狀工字文、口端キザシ、刺突、		沈線	鉢	48	炭化物付着
17	G-18・II	I D	口 緑 部	波狀口縁、楕位沈線（6条）、無文帶 (R L綫走縦文)		沈線	壺	27	
18	F-18・II	I C	体部上半	波狀口縁、波狀工字文、口緣無文帶 (R L綫走縦文)		沈線	鉢	55	
19	G-20・III	I A	口 緑 部	波狀口縁、I字文、粘土瘤、無文帶		沈線	壺	54	炭化物付着
20	E-18・II	II	口 緑 部	波狀口縁 (R L綫走縦文)		沈線	—	28	
21	F-19・II	I B	口 緑 部	波狀口縁、変形工字文、粘土瘤、ミガキ		沈線	鉢	16	
22	E-17・II	I A	口 緑 部	平縁、工字文、II端キザシ		沈線	—	19	
23	G-18・II	I B	口 緑 部	平縁、変形工字文、口唇部沈線、ミガキ		沈線	鉢	31	
24	G-21・II	I B	II 緑 部	平縁、変形工字文、粘土瘤		沈線	浅鉢	30	炭化物付着

第5表 遺構出土器觀察表4 (弥生時代)

貯番号	出土地・層	分類	部	位	外 面	の 文 様	(地文)	内面	器 形	縁 型	備 考
25	G-21・II	I B	体部上半	平縁、変形工字文、粘土瘤、 <i>ゞガキ</i>				沈線	浅鉢	39	摩擦激しい、
26	G-19・II	I B	口縁部	平縁、変形工字文				沈線	浅鉢	66	
27	F-17・II	I B	口縁部	平縁、変形工字文、粘土瘤				沈線	—	10	内面沈線 2 条施文
28	E-24・N	I B	口縁部	平縁、変形工字文、粘土瘤、 <i>ゞガキ</i>				浅鉢	11	煤状炭化物付着	
29	G-19・II	I D	口縁部	平縁、横位沈線 (4 条) (R L 縦走彌文)				沈線	浅鉢	59	炭化物付着
30	注記なし	I B	口唇～底部	平縁、変形工字文、粘土瘤、 <i>ゞガキ</i>				沈線	浅鉢	25	摩擦激しい、
31	G-19・II	I B	口縁部	平縁、変形工字文				沈線	—	32	
32	E-10・II	I D	口縁部	平縁、横位沈線 (2 条)				—	—	60	
33	E-20・II	I B	口縁部	平縁、隆起、磨消彌文				壺	52		
34	G-21・III	I A	胴部上半	横位沈線 (3 条)、無文帯				—	—	33	炭化物付着
35	G-18・V	I D	胴 部	横位沈線 (1 条) (R L 縦走彌文)				—	—	13	炭化物付着
36	G-21・III	I A	胴部上半	工字文				—	—	34	
37	D-10・II	I A	口 部	工字文、粘土瘤				壺	24		
38	G-18・II	I A	胴部上半	工字文				—	—	37	
39	G-18・II	I D	胴部上半	波状工字文、粘土瘤、刺突				鉢	38	45 と同一個体	
40	D-19・II	I C	胴部上半	波状工字文、粘土瘤、刺突				鉢	45		
41	E-24・N	I B	胴 部	変形工字文				浅鉢	12	炭化物付着	
42	E-20・II	I D	胴 部	横位沈線 (3 条) (R L 縦走彌文)				—	—	5	
43	F-16・II	I D	胴 部	横位沈線 (1 条) (R L 縦走彌文)				—	—	40	
44	E-18・II	I D	胴部上半	横位沈線 (1 条) (R L 縦走彌文)				—	—	29	
45	D-19・III	I D	胴部上半	横位沈線 (2 条) (R L 縦走彌文)				—	—	23	
46	F-18・II	I D	台 台	横位沈線 (2 条)				台付鉢	8		
47	H-31・I	I D	胴 部	横位沈線 (3 条)、頸部無文帯				壺	57		
48	M-31・II	I D	胴部上半	横位沈線 (2 条) (R L 縦走彌文)				広口壺	67		

第 6 表 通報外出土器觀察表 5 (弥生時代)

図番号	出土地・層	分類	部位	外面の文様 (地文)	内面	器形	鉢身	備考
49	G-22・II	I D	台	部 橫位沈線 (2条)		台付鉢	58	
50	E-20・II	I D	台	部 滅消繩文 (RL綫走繩文)		台付鉢	2	
51	E-20・II	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	4	
52	D-9・II	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	14	
53	G-22・III	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	18	
54	E-7 表様	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	7	
55	F-17・II	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	15	
56	D-19・III	II	胴	部 (RL綫走繩文)		—	22	
57	G-21・III	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	6	
58	E-20・II	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	1	
59	D-17・III	I E	胴	部 (RL綫走繩文)		—	21	
60	D-16・III	II	胴	部 素文、ミガキ		—	50	
61	D-18・II	II	胴	部 素文、ミガキ		—	46	
62	G-20・III	II	胴	部 素文、ミガキ		—	3	
63	G-20・III	I D	台	部 滅消繩文		台付鉢	9	炭化物付着
64	G-18・II	I E	底	部 (RL綫走繩文)		台付鉢	65	
65	D-17・II	I E	底	部 (RL綫走繩文)		—	62	
66	D-16・III	I E	体部下半	(RL斜繩文)		—	64	底部へラ削り調整
①	G-20・III	IA	完	形 平継、変形工字文、滅消繩文 (LR綫走繩文)	沈線	鉢	立4	
②	G-21・II	IC	略完	形 波状口縁、波状工字文、粘土瘤、刺突、口端キャラ (RL綫走繩文)	沈線	台付深鉢	立1	
③	G-21・II	I E	体部下半	(RL綫走繩文)		甕	立3	
④	G-21・III	I E	略完	形 素文		ミニチャア	63	

第7表 通様出土器觀察表 6 (弥生時代)

第3節 石 器

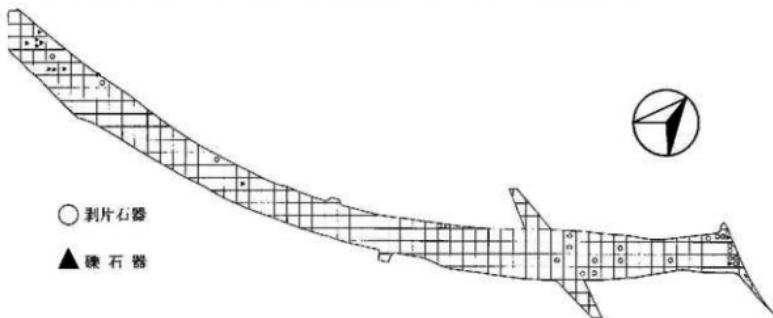
遺構外から出土した石器は、剥片石器がデスクトレーで1箱分、敲磨器類が段ボール箱1箱分である。出土地点は土器とほぼ一致しているものの(第21図)、縄文、弥生のいずれの土器形式に伴うものか把握できなかった。

出土数は、剥片石器が25点、礫石器が12点である。

以下、剥片石器(定形石器・不定形石器)、礫石器(敲磨器類)の順で記述する。

剥片石器(点)						礫石器(点)	
定形石器				不定形石器		敲磨器	棒状石製品
石錐	石錐	石槍	石匙	スクレイバー	R-フレイタ		
5	1	2	6	5	6		
14				11		10	2
				25		12	
					37		

第8表 出土石器の組成



第21図 石器出土分布状況

剥片石器

剥片石器の石材は、5が黒曜石である以外はすべて珪質頁岩である。

1 定形石器 (第22、23図) (第9表)

石錐 (第22図) 5 (1~5) 点。両面とも比較的丁寧な調整が加えられている。

形状は、尖基のもの(1)、凹基で無茎のもの(2,3)、凸基で有茎のもの(4)、平基で有茎のもの(5)がある。2は尖頭部が折損している。

石錐 (第22図) 1点 (6)。錐部が折損している。つまみ部側縁部に細かい調整痕がみられることから、スクレイバーの可能性もある。

石槍 (第22図) 2点 (7,8)。7は先端角の角度が鈍く、長楕円形に近い形状を呈する。重心線はやや刃部よりに位置する。8は先端角が7よりも鋭角で、重心線がより刃部に近い。

石匙 (第23図) 6点 (9~14)。横厚は14のみで、残りは紙厚である。いずれも、つまみ部の抉りは小さいが、刃部には丁寧な調整が加えられている。9は下半部の残片である。

2 不定形石器 (第23、24図) (第9表)

スクレイバーの類 6点 (15~20)。急斜度に調整された刃部を持ち、石箒に似た形状のもの (15)、先端部に両面調整が加えられ石匙に似た形状のもの (16)、剥片の側縁部に浅い調整が加えられたもの (17~20) 等がある。

R-フレイクの類 5点 (21~25)。剥片の一部に簡単な細部調整が加えられているものである。

砾 石 器

敲磨器類が12点出土した。

3 敲磨器類 (第25~26図) (第10表)

石材として、安山岩、閃緑岩、凝灰岩が用いられ、安山岩が最も多い。

このうち2点 (30, 35) が、平坦面の中央部に付近に凹孔がみられ側縁部に磨痕の認められる、いわゆる凹石と磨石の複合石器である。いずれも、両面に凹孔がある。中には、側縁部両面に刃部形成のための調整と思われる剥離痕が認められるものがあり (26, 27, 37)、他の石器の制作途中で磨石に転用した可能性も考えられる。一方の側面のみを使用しているものがほとんどで、両側面を使用しているものは37のみである。

第4節 その他の遺物 (第27図) (第12~15表)

遺構外から出土した縄文時代及び弥生時代以外の遺物は、デスクトレー箱2分の1箱分である。

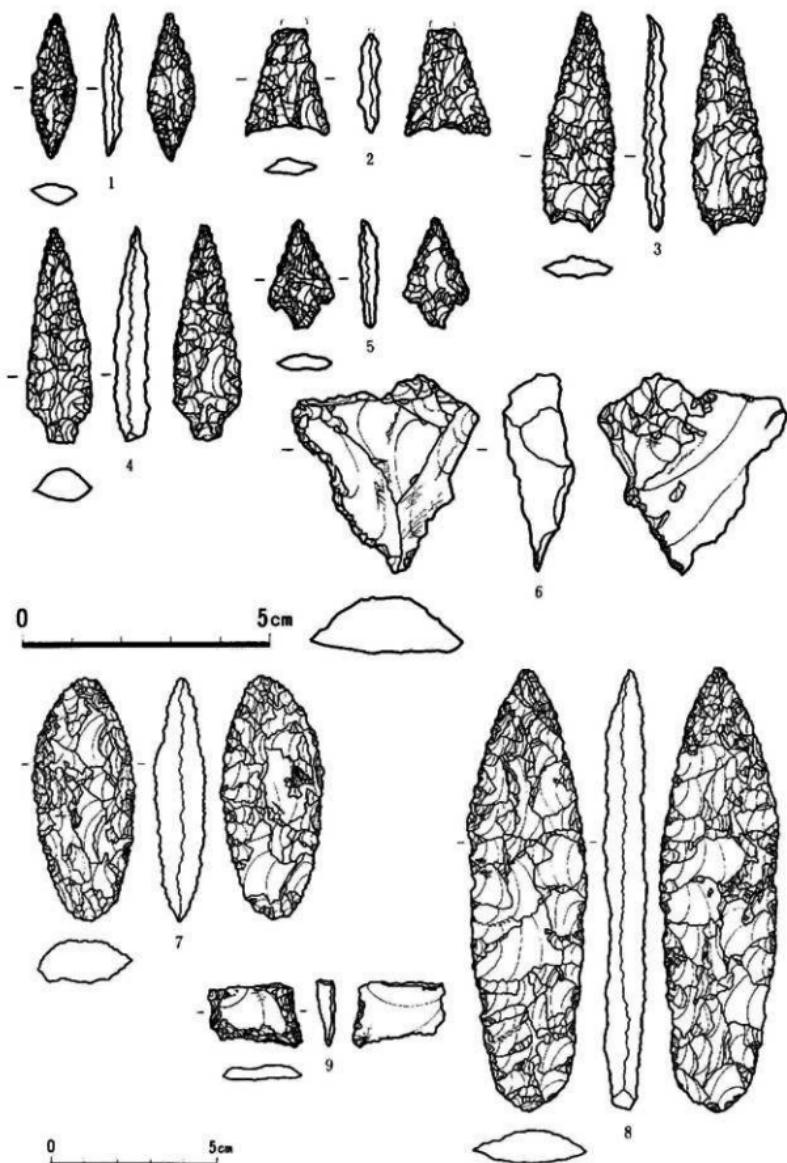
1 陶磁器 8点 (1~8)。近世 (江戸幕末期) のものと思われる。碗が多い。磁器は、肥前あるいは肥前系の青磁、染付けが多く、京焼系と思われる陶器片が1点出土している。

2 古 錢 3点 (10~12)。いずれも江戸時代の寛永通宝である。

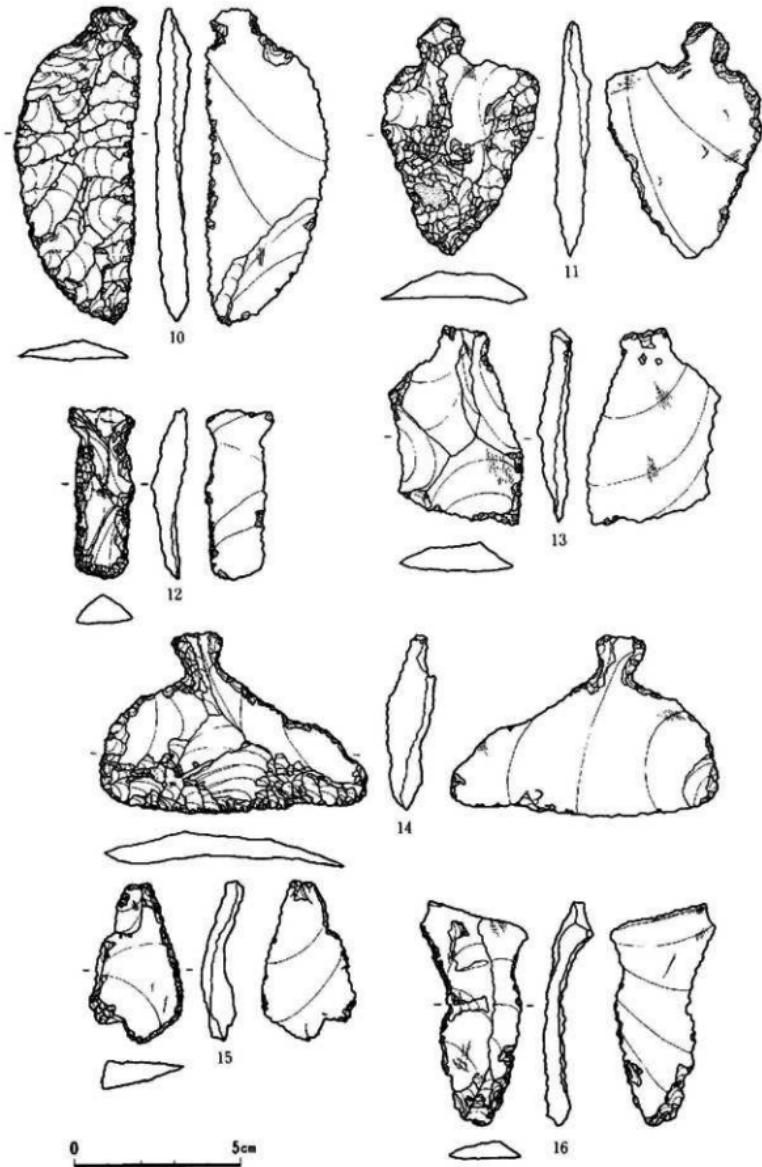
3 砥 1点 (13)。「海」の部分のみで、「陸」の部分が欠損している。石材は、凝灰岩である。

4 鉄 淬 1点 (9)。

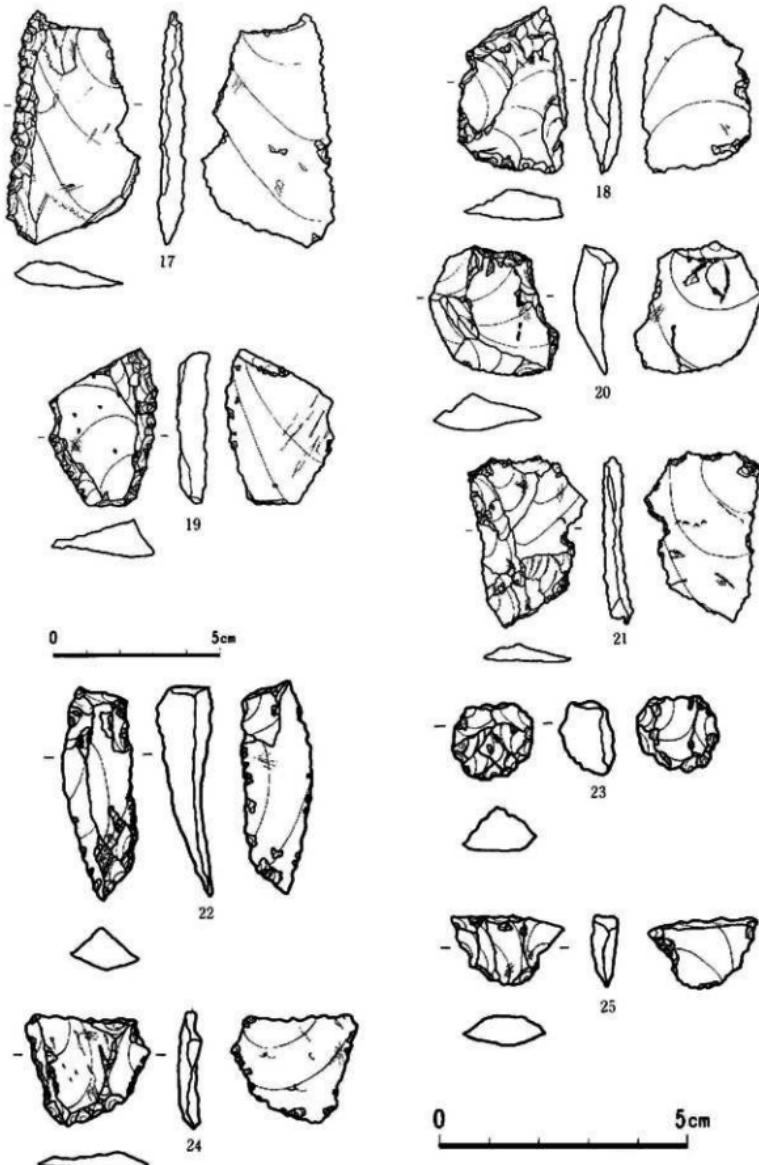
(奈良岡 淳)



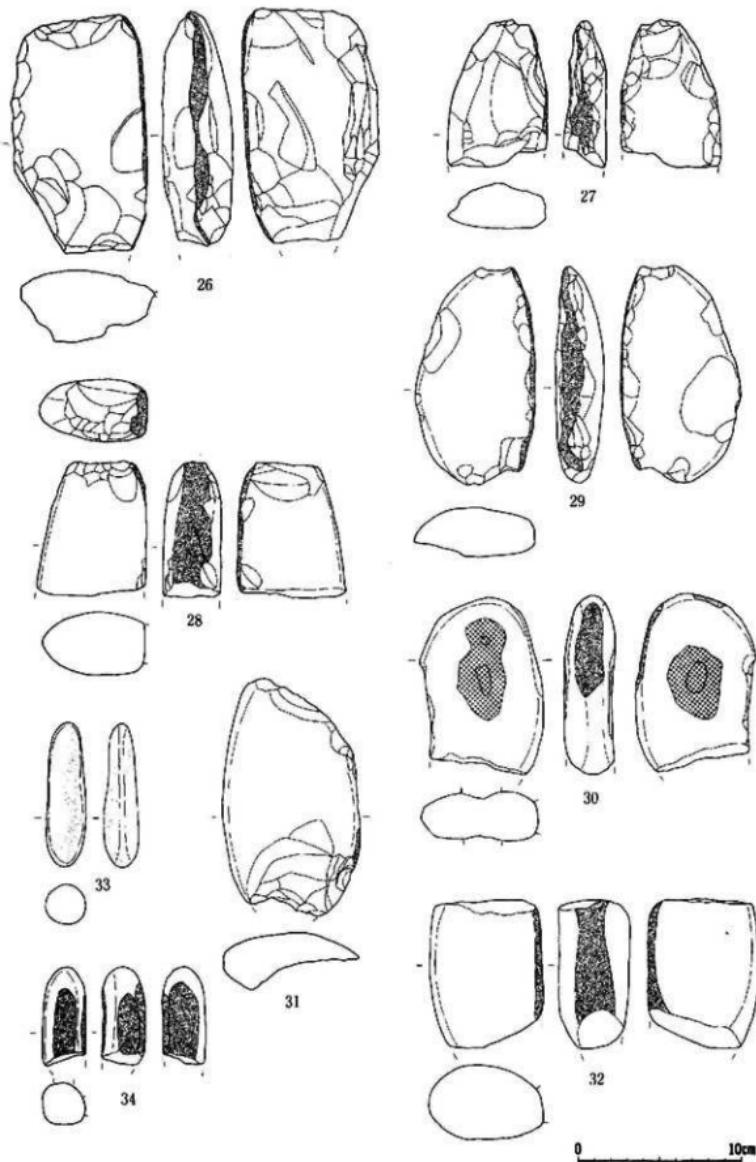
第22図 遺構外出土石器 1



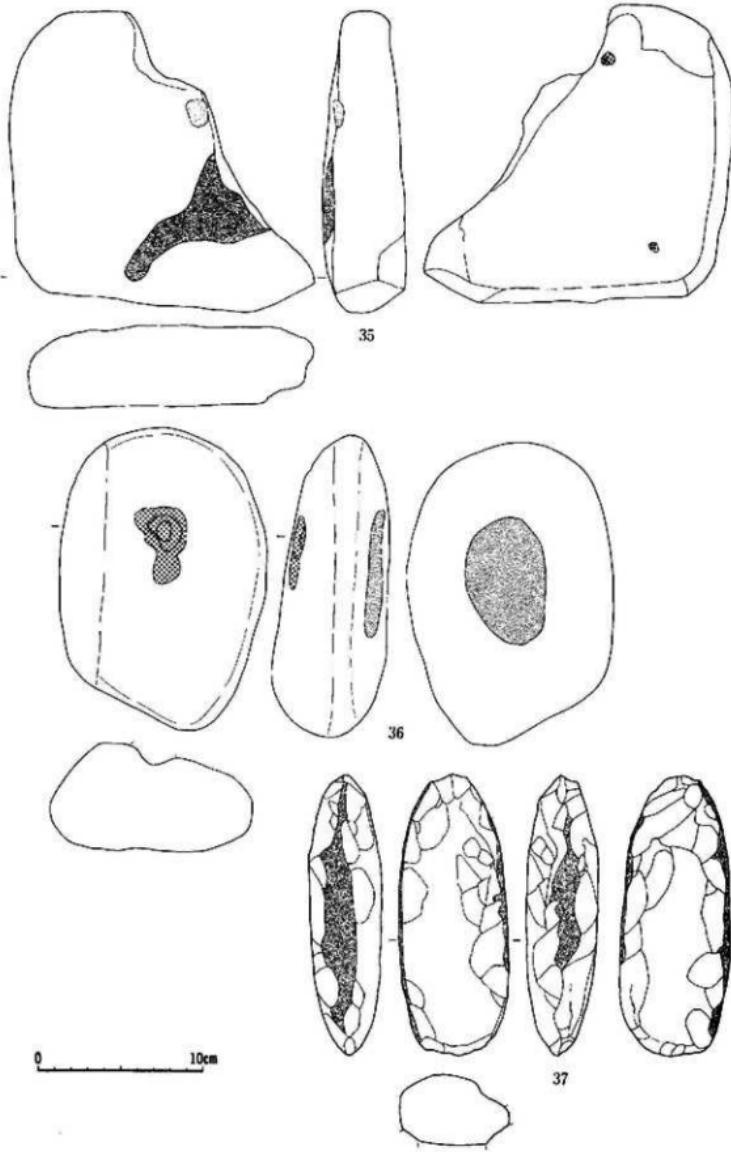
第23図 遺構外出土石器 2



第24図 遺構外出土石器 3



第25図 遺構外出土石器4



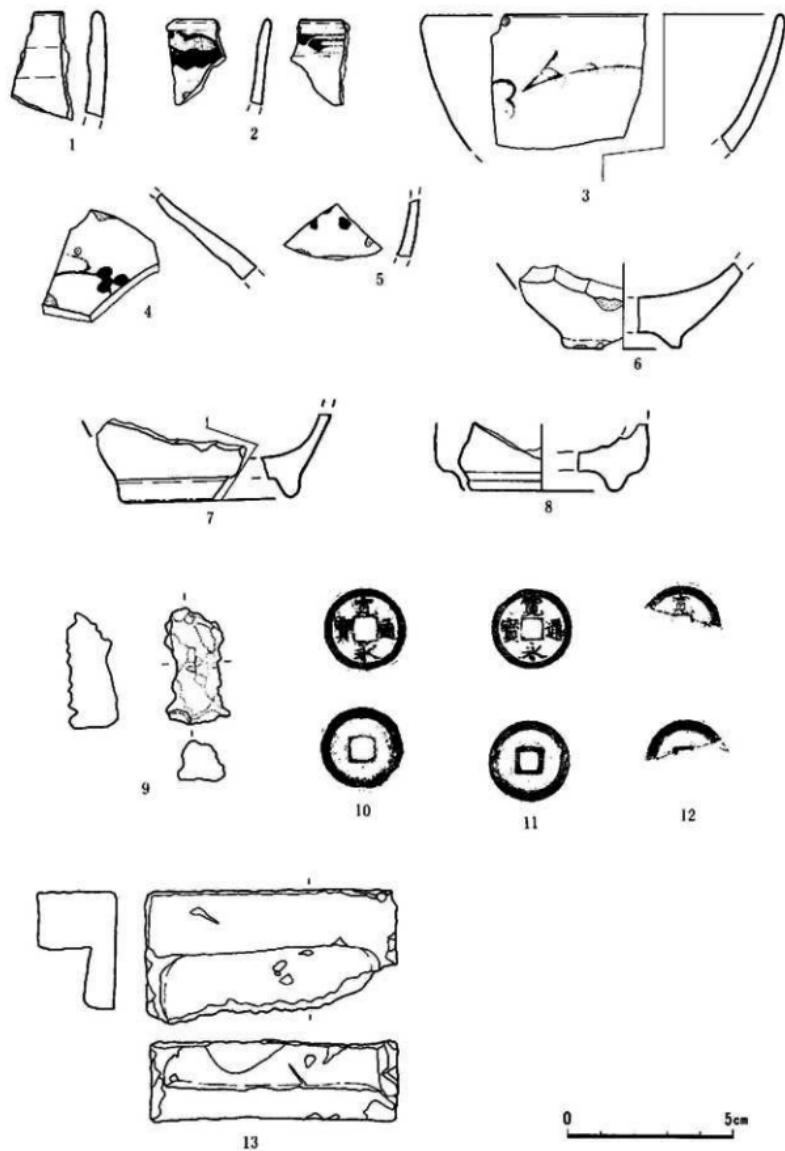
第26図 遺構外出土石器 5

図番号	分類	出土地・層	長さ[m]	幅[m]	厚さ[m]	重量 [kg]	石 材	備 考	整理番号
1	石 砕	G-10・II	(19)	(11)	0.9	珪質頁岩	尖基錐		2
2	石 砕	G-9・II	29	9	3	0.8	珪質頁岩	凹基無基錐	折損 1
3	石 砕	N-49・II	42	14	4	2.2	珪質頁岩	凹基無基錐	5
4	石 砕	T-58・II	43	13	6	2.9	珪質頁岩	凸基有基錐	3
5	石 砕	E-8・II	22	11	3	0.7	黒 鞍 石	平基有基錐	4
6	石 錐	F-19・III	40	31	11	13.3	珪質頁岩		
7	石 錐	E-8・II	73	29	12	36.3	珪質頁岩		
8	石 槍	F-8・III	113	34	11	60.3	珪質頁岩	錐形	折損 18
9	石 槍	G-21・II	19	25	4	2.9	珪質頁岩	錐形	7
10	石 槍	H-31・III	95	35	6	25.0	珪質頁岩	錐形	6
11	石 槍	E-19・III	71	44	8	21.2	珪質頁岩	錐形	11
12	石 槍	E-23・III	52.5	17	10	7.2	珪質頁岩	錐形	12
13	石 槍	D-20・II	56	35	7	16.3	珪質頁岩	錐形	9
14	石 槍	F-8・III	54	73	8	29.3	珪質頁岩	楕形	10
15	不定形石器	E-8・II	49	25	8	10.1	珪質頁岩	スクレイバー	20
16	不定形石器	G-9・III	51	27	5	9.5	珪質頁岩	スクレイバー	24
17	不定形石器	道路表接	71	33	6	19.3	珪質頁岩	スクレイバー	17
18	不定形石器	H-31・I	50	31	9	16.7	珪質頁岩	スクレイバー	25
19	不定形石器	E-13・II	47	31	11	13.5	珪質頁岩	スクレイバー	22
20	不定形石器	D-19・II	39	33	10	13.1	珪質頁岩	R-フレイク	13
21	不定形石器	U-62・II	69	21	5	11.0	珪質頁岩	R-フレイク	23
22	不定形石器	H-31・I	43	14	8	3.8	珪質頁岩	R-フレイク	14
23	不定形石器	E-8・II	15	15	9	2.8	珪質頁岩	R-フレイク	16
24	不定形石器	E-17・II	22	23	3	1.9	珪質頁岩	R-フレイク	15

第9表 連続外出土剥片石器觀察表

図番号	分類	出土地・層	長さ	幅	厚さ	重量 (kg)	石村	備考	整理番号
25	不定形石器	F-17・II	14	12	6	1.7	珪質岩	R-フレイク	19
26	敲磨器	G-8・III	14	80	44	760	閃綠岩	敲石+磨石櫛	8
27	敲磨器	W-63・II	(90)	60	25	(180)	鞍山岩	磨石	3
28	敲磨器	V-63・II	(82)	35	38	(320)	凝灰岩	敲石+磨石	6
29	敲磨器	E-8・II	132	74	31	380	鞍山岩	敲石+磨石	4
30	敲磨器	V-64・II	(108)	71	31	(310)	鞍山岩	凹石	1
31	敲磨器	T-62・II	145	83	35	410	砂岩	石牌欠損品?	2
32	敲磨器	K-47・W	(90)	69	45	400	鞍山岩	磨石	5
33	棒状石製品	V-63・II	87	25	24	61.5	鞍山岩		9
34	棒状石製品	V-63・II	(60)	26	25	60	鞍山岩	磨痕あり	7
35	敲磨器	T-61・II	182	174	49	2,320	鞍山岩	凹石	12
36	敲磨器	T-58・II	182	126	65	1,280	凝灰岩	凹石	11
37	敲磨器	T-62・II	170	66	42	713	閃綠岩	磨石	10

第10表 遺構外出土砾石器調査表



第27図 遺構外出土陶磁器・硯・鐵滓・銅錢（歴史時代）

図版番号	出土地・層	部 位	施 文 文 様	特 微
第24図-67	G-20・Ⅲ	腰 部	横位沈線（2条）、刺突、粘土粒貼付、ミガキ	朱塗りの影跡残存、腰部から伸びた芯部に脚部嵌入

第11表 遺構外出土土偶觀察表

図版番号	出土地・層	種類	名 称	産 地	器 形	年 代	特 微	素 地	施 装か器表記
1	K-49・Ⅱ	陶器	—	隨意	碗	近世		黄白色	黄白色
2	F-8・Ⅱ	磁器	染付	藤々	碗	近世	外面草花文、呉須薄い、緞色	白灰色	薄青白色
3	G-10・Ⅱ	磁器	染付	肥前	碗	近世	外面草花文、呉須淡い、緞色	白灰色	薄青白色
4	注記なし	磁器	染付	肥前	瓶	近世	外面草花文、呉須薄い、緞色、内面露胎	白灰色	薄青灰色
5	F-9・Ⅱ	磁器	染付	肥前	碗	近世	呉須淡い、緞色	白灰色	薄青白色
6	注記なし	磁器	青磁	肥前	碗	近世	二次焼成を受けている	灰 色	淡綠色
7	G-27・Ⅱ	磁器	—	肥前	瓶か	近世	内面露胎	灰白色	薄白灰色
8	注記なし	磁器	青磁	肥前	—	近世	内面露胎	灰白色	淡綠白色

第12表 遺構外出土陶磁器觀察表

図版番号	出土地・層	直徑mm	厚さmm	重さ(g)	内孔形状・辺長	備 考	銘記
10	F-12・Ⅱ	24.5	1	2.2	方形・7mm	寛永通寶（江戸時代）	
11	G-8・Ⅱ	24.0	1	2.7	方形・6mm	寛永通寶（江戸時代）	
12	H-40・Ⅱ	(24.0)	1	(1.2)	方形・—	寛永通寶（江戸時代）折損	

第13表 遺構外出土古銭觀察表

図版番号	出土地・層	長辺mm	短辺mm	高さmm	石 材	備 考	銘記
13	F-19・Ⅱ	(36)	76	30.5	凝灰岩	折損	

第14表 遺構外出土硯觀察表

図版番号	出土地・層	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	備 考	銘記
9	H-31・I	35	18.5	12		

第15表 遺構外出土鐵滓觀察表

第V章 自然科学的分析

第1節 炭素年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1995年3月27日

青森県埋蔵文化財調査センター

阿部五十夫殿

1994年12月14日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記のとおりご報告致します。
なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ に基いて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての係数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

<u>Code No.</u>	<u>試料</u>	<u>年代 (1950年よりの年数)</u>
Gak-18448	木炭 NO 7 from 青森県下北郡川内町 戸沢川代遺跡	450 ± 60 A.D. 1500

以上

木越邦彦

第VI章 ま　と　め

第1節 ま　と　め

1 遺跡の立地

本遺跡は、むつ湾に望む田野沢台地東方を流れる戸沢川流域にあって、標高12~13mの中位段丘相当の川内段丘上に立地する。

平成2年度（以下、「前回」という）に川内町教育委員会が隣接地を発掘調査（1990葛西・高橋）し、弥生時代の遺物捨て場を検出している。

2 遺跡の基本層序

調査区の基本土層は、I層からⅤ層まで区分された。I層及びⅡ層からは陶磁器が、Ⅱ~Ⅲ層には、大部分の縄文時代、弥生時代の土器及び石器が包含されていた。また、Ⅱ層及びⅢ層で遺構を確認することができた。

3 検出遺構

今回の発掘調査によって検出した遺構は、土坑13基、溝跡1条、炭窯跡1基である。

遺構は、伴出遺物が極めて少なく、時期を明確に判断できるものはほとんど皆無である。ただし、北東側斜面では、遺構に伴わないが弥生時代前期の土器が比較的集中して出土したことを考えれば、北東側斜面で検出された土坑もその時期に伴う可能性が高いと考えられる。

炭窯に関しては、決定的な遺物も証言も得られなかったが、炭素年代測定結果がおよそA.D.1500年という測定結果を得たことから推察しても、少なくとも明治時代前半からそれ以前に遡るものと考えられる。

4 出土遺物

遺物は、遺構内及び遺構外から縄文時代前期、中期、後期、弥生時代の土器、これらのいずれかの時代・時期に帰属すると思われる剥片石器及び礫石器、近世の陶磁器、古銭（寛永通宝）、帰属年代の不明な鏡片と鉄滓が段ボール箱7箱程出土した。この中で主体的な弥生時代の土器は、調査区北東側の斜面から集中して出土した。また、縄文時代の土器は、調査区西側から散在的に出土したが、これは台地の上方からの流れ込みと考えられる。

土器片の出土量は少くなかった。復元できたものは弥生時代の土器4個体のみで、残りはすべて破片資料であった。このような出土状況では、土器組成の全容及び特徴をとらえることができなかつた。

遺構内から出土した遺物は縄文時代の土器片が4片で、しかも覆土中からの出土であったため、堆積途中の流れ込みによるものと思われ、遺構の構築時期を推定する資料とはならなかつた。

剥片石器は、組成の上からみると石箋を欠いており、石箋、石匙の出土比率が高くなっている（第8表）。

前回の調査によって得られた遺物と比較してみると、前回の調査では、縄文時代早期初頭の日計形押型文土器が2片出土しているが、今回の調査では当該時期の遺物は出土していない。縄文時代前期の土器は、前回、今回とも若干の出土をみているが數は少なく、いずれも小破片である。前回の調査で第Ⅲ群土器とした縄文時代中期の土器（円筒上層a, b式）は、今回の調査でも20数片出土している。

前回と今回の調査で出土遺物の主体となる弥生時代前期の土器を比較すると、今回出土の弥生土器は小破片が多く、器形組成上の比較は難しいが、施文文様からみると同時期のものであると言える。

石器は、剥片石器、礫石器とともに今回の調査では出土数は少なく、前回の調査で出土した籠状石器や磨製石斧は、今回は出土していない。

以上のことから、前回の調査区と今回の調査区は、遺物の面からもほぼ同時期・同一遺跡であると見做すことができると思われる。

5 まとめ

今回の調査区域は、前回の調査区域に接続するため、当初、調査区内の平場から弥生時代前期の砂沢式から二枚構式に併行する時期の住居跡が検出されるのではないかと予測された。しかし調査を実施したところ、その平場には、長芋が作付けされたため、かなり深くまで機械による擾乱を受け、遺構の確認は不可能であった。したがって、弥生期の遺構は検出されず、前回の発掘調査に関連する点としては、土器の出土状況はかなり稀薄ではあるが、北東側斜面に土器捨て場と考えられていた箇所が続いていることが挙げられる。

また、調査区西側半分の緩やかな斜面は、農作地を造成するにあたって斜面にかなりの量の土を搬入して平坦地を造り、畑地として利用していたことが判明した。自然地形をとどめるのは、最西端の縄文時代中期前葉の土器が出土した場所だけである。

今回の調査区域から縄文時代前期前葉・中期前葉・後期及び弥生時代前期の遺物とこのいずれかの時期に伴うと思われる遺構が検出されたことによって、これらの時代・時期の複合遺跡であることが判明した。そして、遺物の出土状況からみると、縄文時代中期前葉き最西端の斜面、弥生時代前期は北東側斜面と大きく2つの時期に分けられる。

しかし、今回の調査では住居跡等は検出されず、大規模な農地構造によって削丙・擾乱されてしまったものか、集落の中心が台地の続く北西側に存在するものか、一概に判断することはできなかった。

(調査担当者一同)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会1993『高野川(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第153集
青森県立郷土館 1989『三厩村宇鉄遺跡発掘調査報告書(II)』 青森県立郷土館調査報告第25集考古-8
弘前市教育委員会1992『砂沢遺跡』
川内町教育委員会1981『川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書』
川内町教育委員会1991『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』
川内町教育委員会1992『鞍越・斐川遺跡発掘調査報告書』
川内町教育委員会1993『川内町埋蔵文化財発掘調査報告書 田野沢(2)遺跡・戸沢川大遺跡・戸沢(1)遺跡・鞍越遺跡』
村越 薫 1974『円筒土器文化』 考古学選書10 雄山閣
岡田 康博 1988『青森県におけるの弥生式土器編年研究の現状と課題』「東北地方の弥生式土器の編年について」 第2回縄文文化検討会シンポジウム資料
須藤 隆 1990『東北地方における弥生文化』『考古学古代史論叢』
須藤 隆 1973『土器組成論』『考古学研究』19-4

写 真 図 版



調査区 遠景(N→)



調査区 遠景(S→)



作業風景



作業風景



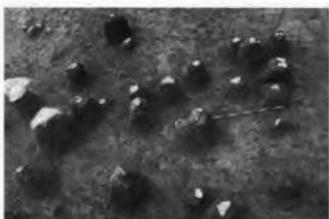
第3区 遺構(土坑)検出状況



第3区 精査終了全景



遺物出土状況(弥生土器・土偶)



第4区 遺物出土状況(縄文中期土器群)

調査区遺景・作業風景・遺構・遺物検出状況



第1区 基本層序(N E→)



第3区 基本層序(N→)



第4区 基本層序(S→)



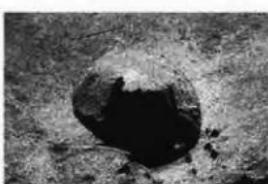
第1号土坑 セクション(S→)



第1号土坑 完掘状況(S→)



第2号土坑 セクション(S→)



第2号土坑 完掘状況(E→)



第3号土坑 セクション(SW→)



第3号土坑 完掘状況(E→)

基本層序・遺構(1)



第4号土坑 セクション(S→)



第4号土坑 完掘状況(N→)



第5号土坑 セクション(N→)



第5号土坑 完掘状況(S→)



第6号土坑 セクション(N→)



第6号土坑 完掘状況(N→)



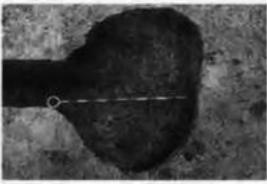
第7号土坑 セクション(N→)



第7号土坑 完掘状況(E→)



第8号土坑 セクション(E→)



第8号土坑 完掘状況(E→)



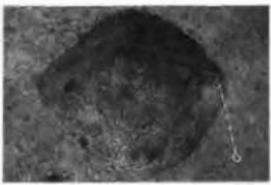
第9号土坑 セクション($N \rightarrow$)



第4号土坑 完掘状況($S \rightarrow$)



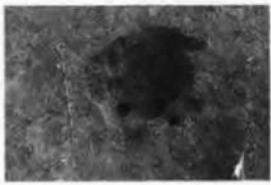
第12号土坑 セクション($SW \rightarrow$)



第12号土坑 完掘状況($S \rightarrow$)



第13号土坑 セクション($S \rightarrow$)



第13号土坑 完掘状況($N \rightarrow$)



第14号土坑 セクション($N \rightarrow$)



第14号土坑 完掘状況($N \rightarrow$)



第11号土坑 セクション($SW \rightarrow$)



第11号土坑 完掘状況($N \rightarrow$)



第1号溝 ABセクション(S→)



第1号溝 CDセクション(S→)



第1号溝 EFセクション(S→)



第1号溝 完掘状況(SW→)



第1号炭窯 南北セクション(E→)



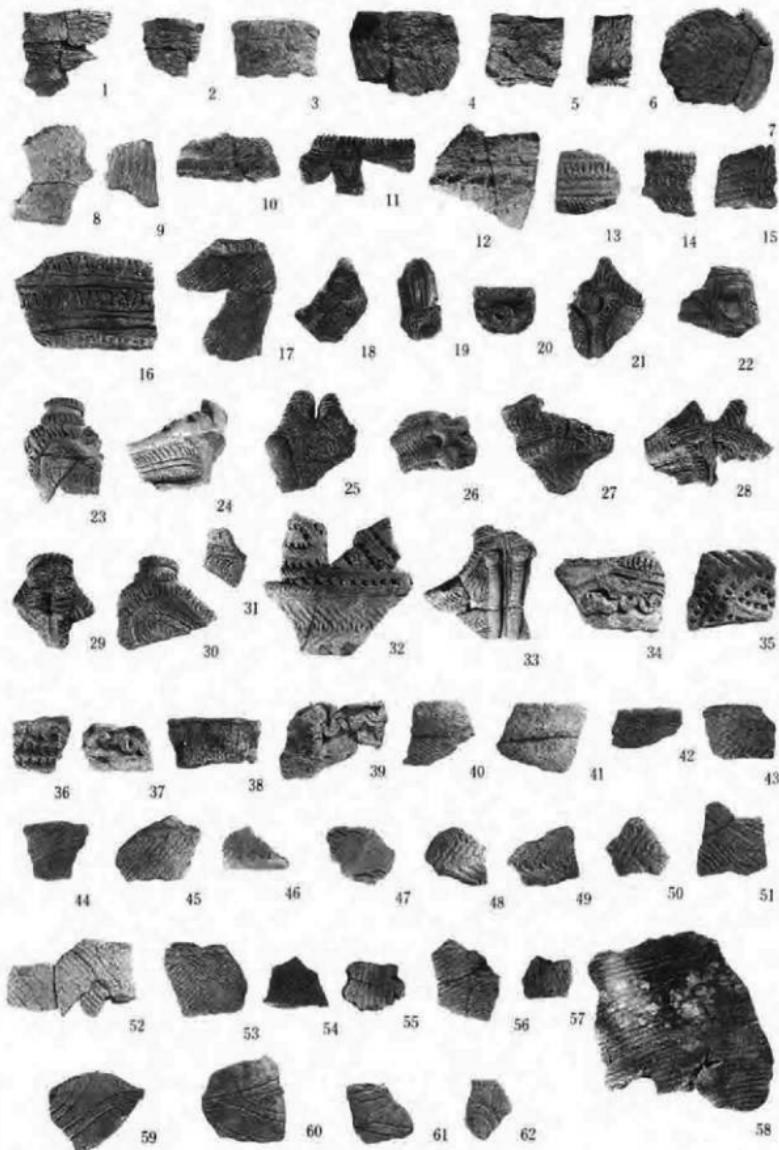
第1号炭窯 窑底検出状況(S→)



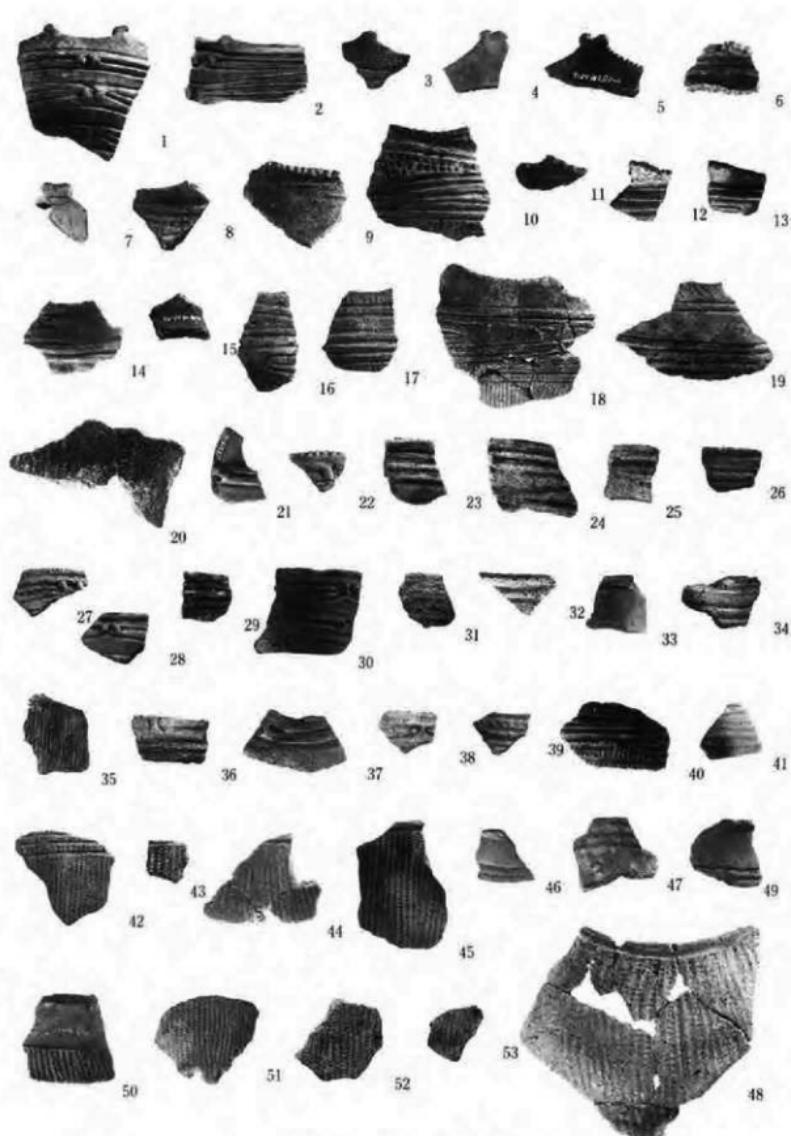
第1号炭窯 煙出部検出状況(S→)



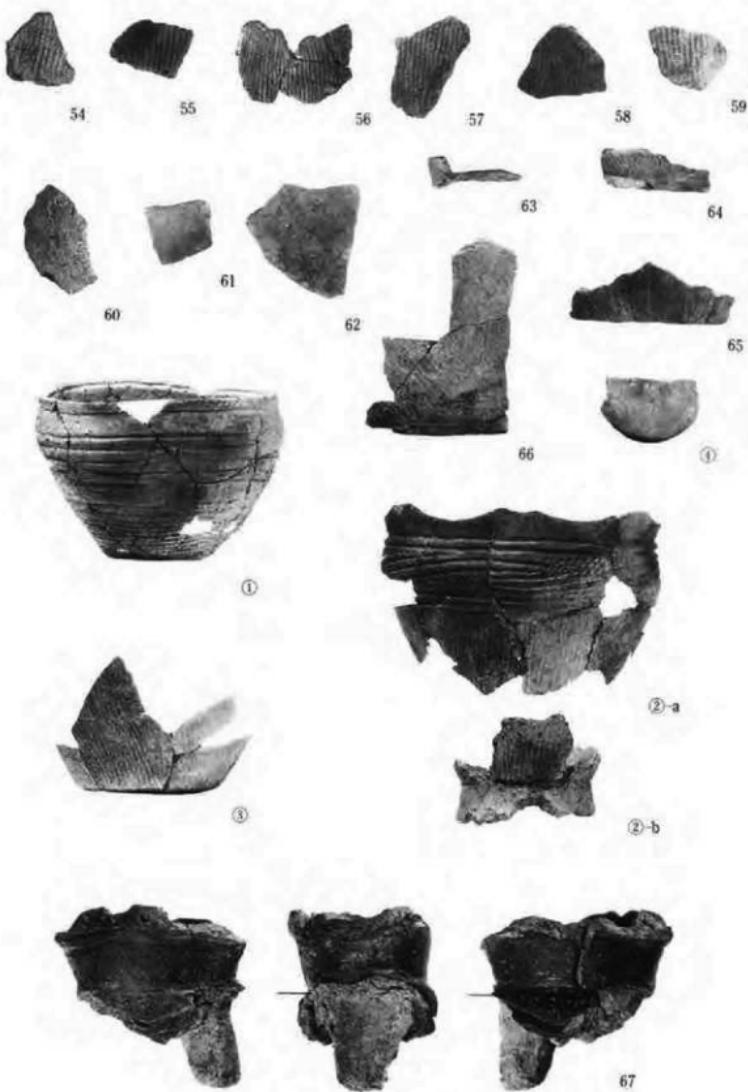
第1号炭窯 完掘状況(S→)



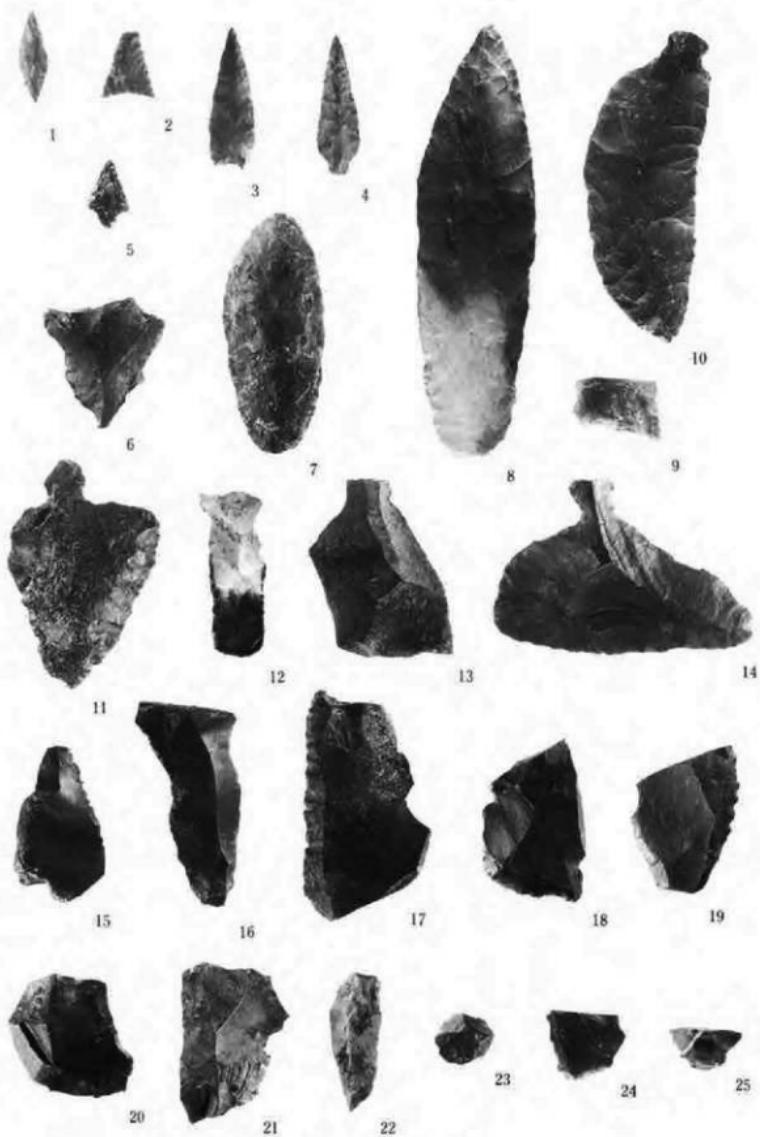
遺構外出土遺物 1 (繩文土器)



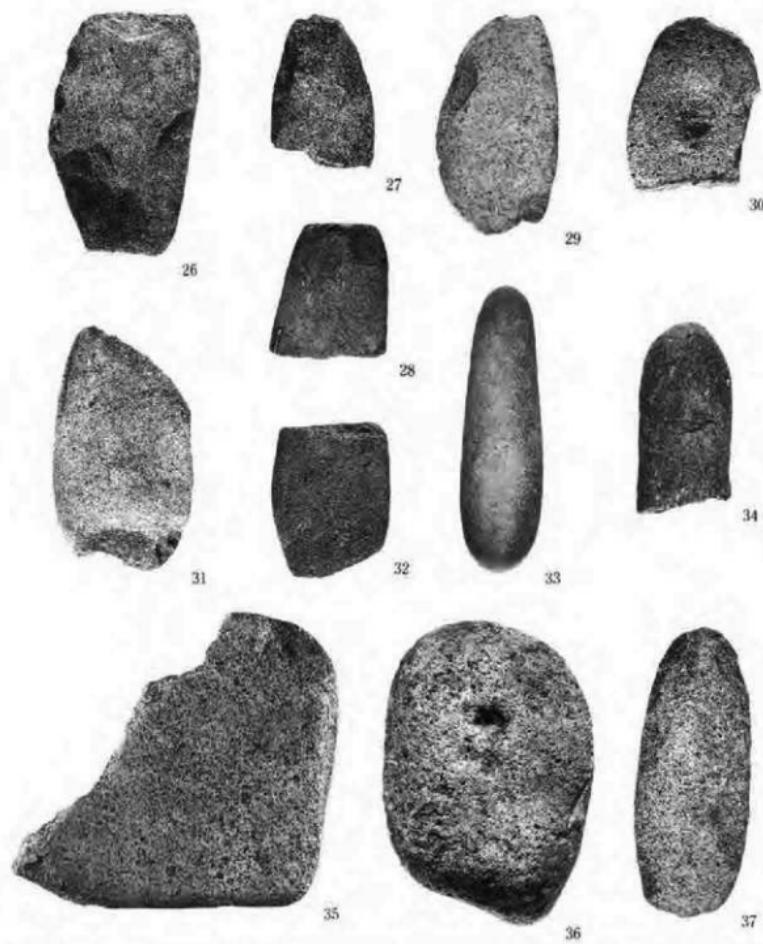
遺構外出土遺物 2 (弥生土器)



遺構外出土遺物 3 (弥生土器・土偶)



遺構外出土遺物4（刮片石器）



遺構外出土遺物 5 (砾石器・硯・古錢・鐵滓)

熊ヶ平遺跡

第Ⅰ章 発掘調査概要

第1節 調査に至る経過

県農林部では、平成2年度から下北郡川内町を中心とする地域で、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業として県営農免農道整備事業（高野川地区）を計画してきた。

平成2年10月、文化課では農免農道の計画路線内に川内町熊ヶ平遺跡（県埋文報第180集：1995）が所在することを確認し、平成3年度にその発掘調査が実施されることになった。

平成3年7月1日から川内町熊ヶ平遺跡の発掘調査が開始された。7月下旬になって、県教育庁文化課が中心となって路線内の現地踏査が行われ、新たに川内町高野川(2)遺跡（県埋文報第153集：1993）、川内町板子塚遺跡（県埋文報第180集：1995）、および川内町高野川(3)遺跡（県埋文報第179集：1995）が発見された。関係機関で協議したところ、高野川(2)遺跡については平成3年10月中に発掘調査を実施し、高野川(3)遺跡と熊ヶ平遺跡および板子塚遺跡については、平成4年度に並行して発掘調査を実施することになった。

そして、平成4年度の調査結果に基づいて、平成5年度にも第2次の高野川(3)遺跡の発掘調査が計画された。

なお、平成5年度の高野川(3)遺跡発掘調査の進展に従い、調査区域の西端を流れる熊野川をはさんで接する熊ヶ平遺跡寄りの農道予定地にも遺物の散布が認められた。その措置について文化課及び事業者である青森県農林部農地建設課と協議を重ねた結果、高野川(3)遺跡発掘調査の人員及び予算の中で対応し、その期間内で並行して熊ヶ平遺跡東端部の一部の発掘調査を実施することになった。

平成6年度には、熊ヶ平遺跡の前年度に残った部分を発掘調査することになった。

（相澤 治）

第2節 調査概要

1 調査目的

県営農免農道整備事業（高野川地区）の実施に先立ち、当該地区に所在する熊ヶ平遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成5年10月18日から同年11月18日まで

平成6年9月5日から同年9月30日まで

3 遺跡名及び所在地 熊ヶ平遺跡（県遺跡番号51002）

下北郡川内町大字川内字熊ヶ平115、116、外

4 調査対象面積 平成5年度 1,070平方メートル（内、510平方メートル精査）

平成6年度 700平方メートル（内、300平方メートル精査）

- 5 調査委託者 青森県農林部
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査協力機関 川内町役場、川内町教育委員会、下北教育事務所
- 9 調査参加者
- 調査指導員 村越 潔 弘前大学教授（現 青森大学教授）（考古学）
- 調査協力員 三浦 悅之助 川内町教育委員会教育長
- 調査員 市川 金丸 青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）
(平成6年度より 青森県考古学会会長)
- 高島 成侑 八戸工業大学教授（平成6年度、建築史）
- 遠藤 正夫 青森市教育委員会社会教育課課長補佐（考古学）
(現 同市埋蔵文化財対策室長)
- 葛西 効 青森山田高等学校主事教諭（考古学）
(現 青森短期大学助教授)
- 山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
- 発掘担当者 青森県埋蔵文化財調査センター
- 〔平成5年度〕
- 調査第三課 課長 鈴木 克彦（現 総括主幹）
- 総括主査 木村 鉄次郎（現 主幹）
- 主事 相澤 治
- 調査第一課 主事 中嶋 友文（現 主査）
- 調査第三課調査補助員 斎藤 正宏、 村越 英二郎、 斎藤 美穂
工藤 一美
- 調査第一課調査補助員 蝶名 純、 安孫子睦子
- 〔平成6年度〕
- 調査第二課 課長 三浦 圭介（現 県文化課総括主幹埋蔵文化財班班長）
- 主事 増尾 知彦（現 上北町立上北第一小学校教諭）
- 主事 小籠 孝浩（現 東青教育事務所主事）
- 調査補助員 本間 修、 相馬 優子、 斎藤 美穂
(相澤 治)

第3節 調査の方法

〔平成5年度〕

調査区域の設定にあたっては、同年すでに発掘調査を実施していた熊野川東岸の高野川(3)遺跡の設定方法を、熊野川を挟んで隣接する本遺跡にもそのまま用いた。

高野川(3)遺跡の調査区域内に存在する道路建設用中心杭No.63を基準点(D-4)とし、No.63とNo.51を結ぶ東西方向の基準線をDライン、中心杭No.63に直行する南北方向の基準線を4ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.63(D-4)を起点として、東へ3, 2, 1、西へ5, 6, 7, . . . の順に算用数字を付し、また、北へC, B, A、南へE, Fの順にアルファベット文字を付して、アルファベットと算用数字との組合せで示した。具体的にはそのグリッドの北東隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドの東西方向の基準線は、N-57°-Wである。測量原点(B. M)は、林道熊野川線工事用原点から移動し、調査区域内に数箇所設置した。

調査にあたっては、グリッド法を用いた分層発掘とし、必要に応じて土層観察用のメインセクションベルトを残した。

遺物については、遺構外のものはグリッド一括として、層位ごとに取り上げることとしたが、熊ヶ平遺跡の調査区域に関しては、數度にわたる熊野川の氾濫や流路の変化を受けており部分部分で土層の堆積がかなり異なっている状態であった。したがって層位ごとの遺物の取り上げが困難だと判断し熊野川の流れの影響を受けた2次堆積部分からの遺物を一括して種類別に取り上げることとした。

土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い、注記した。

写真撮影は、カラーリバーサル及びモノクロームの2種類を使用した。

(相澤 治)

〔平成6年度〕

平成6年度の調査は、平成5年度の発掘調査対象区域内の終了できなかった部分について遺構・遺物の有無を確認する目的で実施した。したがって、調査区域の設定及びグリッドの呼称・測量原点については、前年度に設定されたものをそのまま踏襲することとした。

調査にあたっては、前年度に設定されたトレントを延長・拡張し、遺物の確認、遺構の存在する可能性が考えられる際には適宜拡張する試掘先行の方法で実施した。

遺物は、遺構が存在しなかったことから遺構外出土の遺物のみであった。數度にわたる河川の氾濫による2次堆積土内に遺物が存在するという前年度の指摘から、遺物の取り上げは、出土層位の特徴・土色を付し、グリッド毎に、種類別に分けて行った。

写真撮影は、カラーリバーサル及びモノクロームの2種類を使用し、必要に応じて適宜行った。

(増尾 知彦)

第4節 調査の経過

〔平成5年度〕

平成5年8月18日、高野川(3)遺跡の発掘調査開始。

9月下旬、熊野川を挟んで高野川(3)遺跡の西端と隣り合う、熊ヶ平遺跡寄りの農道建設予定地部分にも遺物の散布が認められるため、その措置について文化課及び青森県農林部農地建設課と協議に入った。その結果、高野川(3)遺跡発掘調査の人員及び予算の中で対応し、その期間内で並行して熊ヶ平遺跡部分の発掘調査を実施することになった。

10月18日、熊ヶ平遺跡の調査を本格的に開始。グリッドは、高野川(3)遺跡のグリッドをそのまま延長して設定した。河川の流れによって形成されたと思われる疊群の検出や、かなり摩滅した土器片の出土等、土層を観察しながら粗掘りを進めるにしたがって、熊ヶ平遺跡の調査区域、特に東半部が何處かの熊野川の氾濫や流れの変化に遭っていることが確認された。土器片は、縄文時代前期と後期のものが、ほぼ半々の割合で出土している。遺構は検出されなかった。

11月18日、高野川(3)遺跡の遺構の精査と遺物の取り上げが完了。調査器材と遺物を撤収して調査を無事終了した。熊ヶ平遺跡については当初の調査予定面積1,770平方メートルの内、1,070平方メートルについては調査を終了したもの、期間が押し迫ったため予定面積すべての調査を終了することはできなかった。しかしグリッドによつては、やや遺物の出土が密な部分もあることから、遺構が存在する若干の可能性があり、次年度以降の調査継続が必要ということで協議の対象となつてゐる。

(相澤 治)

〔平成6年度〕

平成6年7月28日の戸沢川代遺跡発掘調査についての委託者との打合せの際に、急速、戸沢川代遺跡よりも、熊ヶ平遺跡の前年度調査終了できなかつた地点の調査を優先させて欲しいとの強い要望があった。そのため、戸沢川代遺跡と並行して発掘調査をすることとした。

9月5日、8月22日から発掘調査を行つてゐる戸沢川代遺跡から、必要に応じ調査担当者・作業員を投入することとし、発掘調査を開始した。

調査は、前年度の先行トレンチから、南北に直行する形で4メートルトレンチを入れたが、遺物は縄文時代前期・後期の土器片・石器が散発的に出土するものの、遺構は検出されなかつた。

基本土層及び遺物の包蔵状態の確認のために数ヵ所にわたり地山までの掘り下げを行つた結果、熊野川の氾濫は本年度の調査区域にまで及んでおり、地点により堆積状態は著しく異なつてゐた。また遺構の可能性があつた落ち込みも、二分法・四分法で調査した結果、流路若しくは流路でえぐられたものであつた。

9月中旬には、調査人員を増員しトレンチの拡幅を行い、調査区西側では、上方からの流れ込みと思われる弥生時代の土器片を数点確認した。未調査部分の43%に当る約300平方メートルを精査したが、遺物の出土も微量であり、遺構も検出されなかつたことから、9月30日をもつて調査を終了し、翌日から再び戸沢川代遺跡の調査に合流した。

(増尾 知彦)

第Ⅱ章 遺跡の環境と出土遺物

第1節 遺跡の環境と基本層序

本遺跡は、川内町の東側を南流する川内川と熊野川との間に舌状に発達した中位段丘に相当する川内段丘上に立地して、現在は、杉林となっている（本遺跡の位置については4頁第1図を参照）。

本遺跡の発掘調査は、すでに平成3年度及び4年度に実施されている。その当時の調査区域は、標高18~28mの東側への緩傾斜面およそ6,000平方メートルであり、平坦な川内段丘下位面の上端部付近に位置する。調査の結果、調査区域の西端部に縄文時代前期（円筒下層d式）の堅穴住居跡及びフ拉斯コ状ピット、中央部や西側に縄文時代前期（円筒下層c式）の堅穴住居跡及び遺物密集ブロック、東端部に縄文時代後期の堅穴住居跡及びフ拉斯コ状ピット等が検出され、前期末葉の土器を中心とする縄文時代前期～後期の多数の遺物が出土している。

平成5・6年度の調査区域は、平成3・4年度の調査区域の東端からさらに東側に位置する。調査区域は、平坦な川内段丘から熊野川への急傾斜面と流域に分布する自然堤防に立地して、その標高は5~12メートルである。熊野川を挟んで高野川(3)遺跡の西端に隣接する（第1図・第2図）。

次に、本遺跡の基本層序について概要を記す。今回の調査区域は、熊野川の氾濫や流路の変化に長期間さらされており、場所により著しく堆積の様子が異なるが、概ね下記のようになる（第4図）。

I層 黒褐色土（10YR3/1）……耕作土。全体的に耕作による搅乱が認められる。粘性・湿性があるが、縮まりはややソフトである。炭化粒を微量に混入する。厚さは30~50cmほどである。

II層 黒褐色土（10YR2/2）……I層よりは色調が暗く全体的に腐食質。炭化粒・ローム粒の混入が見られる。粘性・湿性があり、堅さ・縮まりも認められる。厚さ20~60cmほどである。

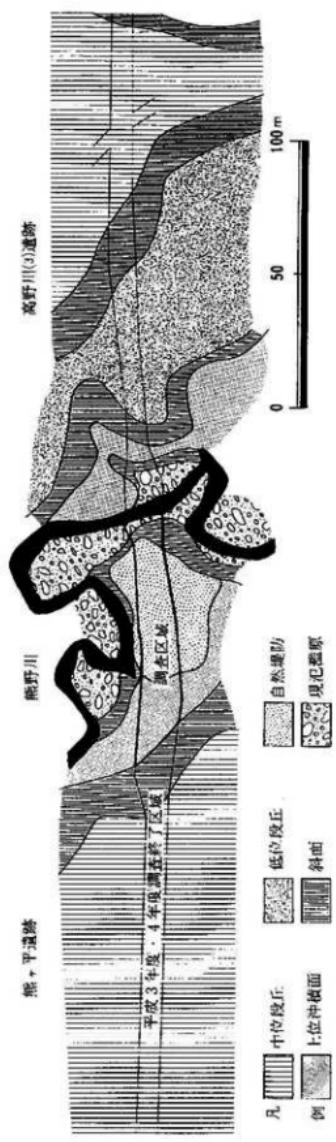
間層 黒褐色土（I層乃至II層）と、2次堆積層（III層乃至N層）とに挟まれた間層を一括した。黒色土、黒褐色土、暗褐色土、灰黃褐色土等がある。ローム粒やロームブロックの混入が見られ、厚さ20~60cmほどである。北西側斜面からの流れ込みと考えられる層である。

III層 ロームを主体とした2次堆積層を一括した。黄褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい黄橙色土等がある。場所により、細粒砂または中粒砂の多量の混入が見られる。厚さ20~70cmほどである。

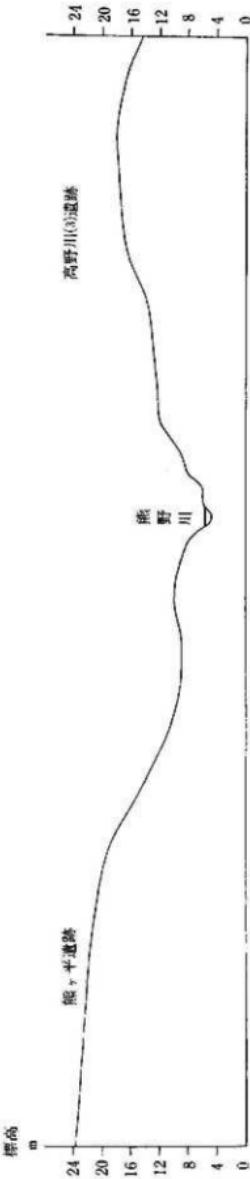
N層 砕、砂等を含む、氾濫による2次堆積層を一括した。砂質土と粘質土の互層を形成しており、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、淡黄褐色土、赤褐色土、灰白色土、褐灰色土等、多様な色調の層が見られる。細粒砂、中粒砂、粗粒砂、礫の混入が多く見られ、熊野川の氾濫や流路・流速の変化が、かなり長い期間、繰り返しあったことを示している。第I層から本層の上部まで遺物の出土が見られるが、本層から出土した土器片はかなり摩滅したものが多い。調査期間の制約から、本層の途中で粗掘を終了せざるを得なかったが、厚い所では1メートル以上に及ぶと思われる。

なお、本遺跡周辺の地形と地質、及び本遺跡の周辺に分布する遺跡の詳細については、『熊ヶ平遺跡・板子塚遺跡』（県埋文報第180集：1995）を参照されたい。

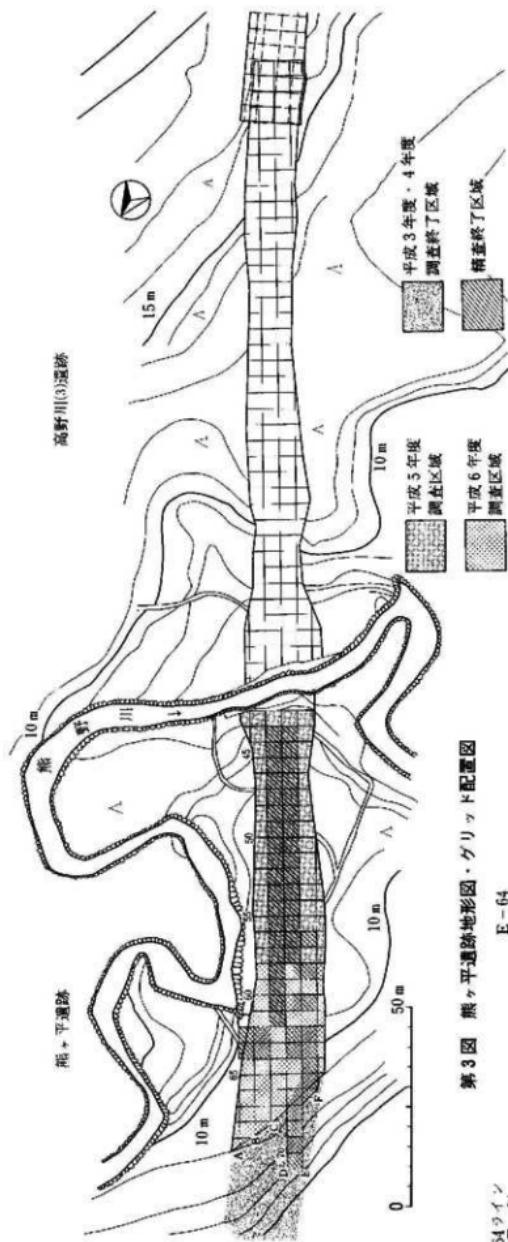
（相澤 治）



第1図 調査区域の地形区分図

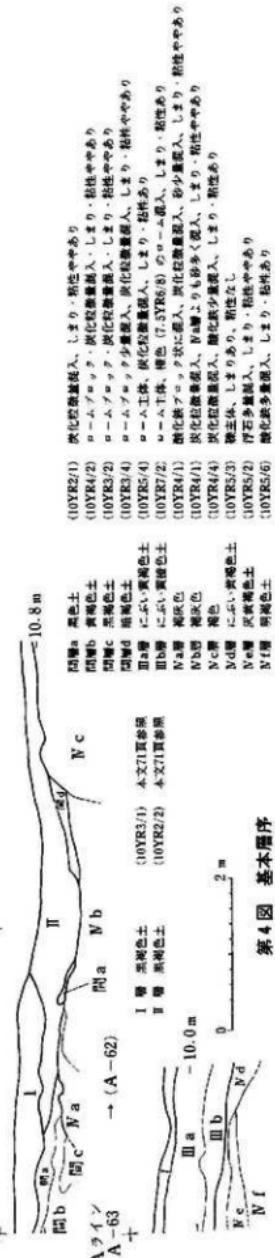


第2図 調査区域内の地形断面図



第3図 熊ヶ平遺跡地形図・グリッド配置図

64
F-64



第四十回

第2節 出土遺物

平成5年度及び6年度の調査において、調査区域から遺構の検出はなかった。したがって、本書で取扱う出土遺物は、すべて遺構外出土の遺物である。平成5年度の調査では、土器・石器、その他の遺物を合わせて段ボール箱約7箱分、平成6年度の調査では約4箱分出土した。

(1) 土器（第5図～第7図）

出土した土器は、ほとんど縄文時代の土器で、なかでも縄文時代前期と後期の土器が主体を占める。これらの出土土器を大まかに時期ごとに群別し、さらに各群中において型式により細分した。土器観察表は79頁に示した。

第I群土器—縄文時代前期 第II群土器—縄文時代中期 第III群土器—縄文時代後期
第IV群土器—縄文時代晩期後葉～弥生時代前期

第I群土器（第5図1～11）

縄文時代前期の土器を一括した。量的には、後期の土器とほぼ同等の割合で出土しているもの熊野川の氾濫による2次堆積層からの出土が多いため、摩滅した土器片がほとんどで、図示に堪え得るものはごくわずかであった。

1～4は口縁部の土器片で、円筒下層d式に比定される。5～11も、概ね円筒下層式土器の範疇に含まれるものと思われる。6は口唇部の内面に横方向の条痕が3条見られる。

第II群土器（第5図12～16）

縄文時代中期の土器を一括した。量的には第I群土器ほど多くは見られなかった。大半が摩滅した土器片である。

12～14は口縁部の土器片で、円筒上層a式に比定される。14は胎土に植物纖維が観察された。

15も口縁部の土器片であるが、爪形撓糸痕を施し、円筒上層b式に比定されるものである。

16は小破片であり判然としないが、刺突と沈線を組み合わせた施文の様子から、最花式土器に比定される可能性を持つ。

第III群土器（第5図17～第7図69）

縄文時代後期の土器を一括した。第I群土器と同様、出土遺物の主体をなす土器群である。本群も前述の土器群の例にもれず、摩滅した土器片が多かったが、図示できるものも比較的多かった。さらに本群の土器を、以下のように分類した。

1類 後期初頭（十腰内I式より古式）のもの（第5図17・18・23・24、第6図25～28・31～38・40～46、第7図47～54）

25・28・32・33・37・38は折返口縁を持つ口縁部である。32・33は、折返部分にR L縄文（横位）を施し、箆状工具で口唇部端を門形に整えている。25・28・37は、折返部分に沈線で長方形文様を連続して施文する。

また、貼付隆帯（線）を持つものも見られ、細い粘土紐を貼り付けて文様の構成をなしているもの（17・23・24・31・40～42）と、ある程度幅がある隆帯上に繩文原体を回転施文しているもの（27・34・53）とに大きく分けられる。17・18は、同一個体の深鉢形土器の破片と思われる。23・40・41は隆帯（線）の脇を沈線で縁とする手法が用いられている。40・41・42は甕棺の胸部破片である可能性がある。また42は、細片のため断定はできないが狩獵文である可能性も持つ。

43は、沈線によるコ状文を持つ胸部破片である。44は、沈線と磨消によってコ状文を施した胸部破片の一部と思われる。

45～48は、繩文の地文の上に渦巻文を持つものである。地文はないが、35もこれと同類のものと思われる。

2類 十腰内I式に比定されるもの（第6図29・30・39、第7図55～67）

29・30・39は、貼り付けた粘土紐のわきを深い沈線でしっかりと縁とることにより、渦巻文・曲線文を際立たせる、半肉彫り的な技法が用いられた口縁部の破片である。29・30は同一個体の深鉢形土器の破片であり、粘土紐上に無筋の繩文原体を回転施文している。

59・60は、入り組まない渦巻文を横1列に並べて施文していると思われる同一個体の土器の胸部破片である。59の施文の様子から、渦巻文の列は、縦に2段以上廻っている可能性がある。その他、62・63も渦巻文を施した胸部破片である。

3類 十腰内I式以降と思われるもの（第7図68・69）

型式・全体形は判然としないが、いずれも十腰内I式以降と思われる。69の刺突状の凹みは、刻目列が摩滅したもの可能性がある。

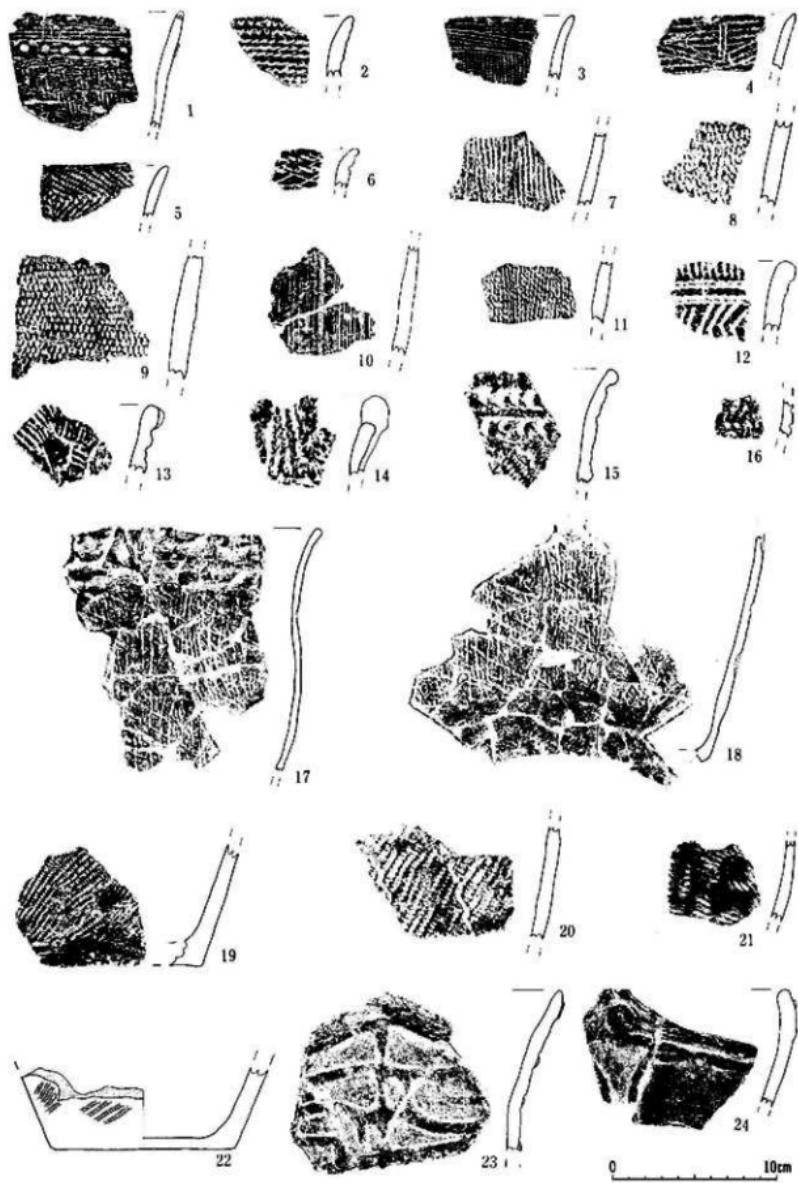
4類 詳細な時期・型式を特定し得ないもの（第5図19～22）

時期・型式が判然としない、中期末葉から後期初頭にかけてのものと考えられる胸部・底部の土器片（19～22）を一括して本類に含めた。

第IV群土器（第7図70・71）

繩文時代晚期後葉から弥生時代前期にかけての土器を一括した。ごくわずかの出土である。70・71の2点を図示したが、いずれも口縁部の小破片であり、全体形を知り得るものではなかった。71は、工字文の施文から判断して、繩文時代晚期後葉の大洞A式の範疇に含まれる可能性がある。

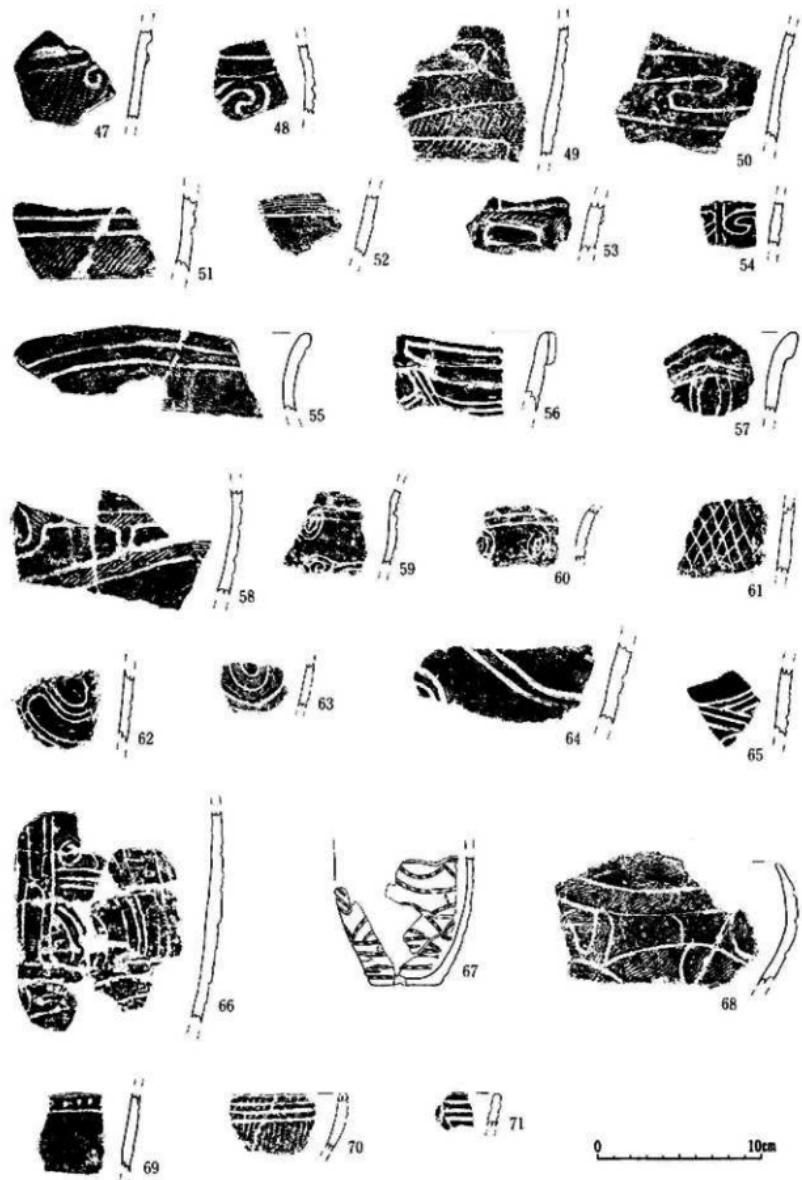
（相澤 治）



第5図 出土遺物（土器 Ⅰ）



第6図 出土遺物（土器 2）



第7図 出土遺物（土器 3）

表一 熊ヶ平遺跡出土器物測定表

因版番号	出土地点	種	部位	外 西 南 文 文 横	備 考	分類
5回-1	C-47	IV	口 線 部	陸上網彌正痕、R圧痕、擦文。		I
5回-2	C-51	IV	口 線 部	R L圧痕、網目状捺文压痕		I
5回-3	C-43	IV	口 線 部	R圧痕、S R圧痕、擦文		I
5回-4	C-43	IV	口 線 部	R L圧痕、L圧痕、軽いミガキ		I
5回-5	C-56	IV	口 線 部	L R・R L圧痕、擦(横位)	スヌ状炭化物付着	I
5回-6	C-43	IV	口 線 部	網目状捺文、L R(0段多条)圧痕	口唇内面条痕3条	I
5回-7	C-59	IV	口 線 部	R擦文		I
5回-8	C-52	IV	口 線 部	多輪筋条体(縦位)		I
5回-9	C-56	IV	口 線 部	多輪筋条体(縦位)		I
5回-10	D-43	III	網 部	多輪筋条体(縦位)		I
5回-11	C-43	III	網 部	R擦文		I
5回-12	D-67	II	口 線 部	L R圧痕、S網面状压痕		I
5回-13	D-68	I	口 線 部	粘土細點付、R(0段多条)圧痕、L圧痕		I
5回-14	D-68	I	口 線 部	粘土細點付、L R圧痕	胎土擦痕含む	I
5回-15	D-68	I	口 線 部	L R・R圧痕、刮削擦文压痕、R L網文(0段多条、横位)		I
5回-16	D-62	I	網 部	D-62、刺突、沈縫		II
5回-17	E-65	II	口 線 部	波状口縫、貼付隆起、無難な網目状捺文	内面ミガキ	III-1
5回-18	E-65	III	底 部	粗雑な網目状捺文、底部付近くミガキ	17と同一個体	III-1
5回-19	D-47	IV	底 部	R L網文(0段多条、網目)		III-4
5回-20	C-61	IV	網 部	R L網文(縦位)、織路文(横格部分のみ篠文)		III-4
5回-21	D-47	カタクチ	網 部	網文(萬葉文)		III-4
5回-22	C-46	I	底 部	R L網文(0段多条、横位)、底部付近擦:ミガキ		III-4
5回-23	D-47	IV	口 線 部	折返口縫、粘土細點付、沙綿、ミガキ		III-1
5回-24	C-61	IV	口 線 部	山形口縫、粘土細點付、ミガキ	胎土擦痕骨針含む	III-1
6回-25	D-47	III	口 線 部	折返、波状口縫、貼付隆起、R L網文(横位)、沈縫、磨削		III-1
6回-26	D-44	III	口 線 部	山形口縫、沈縫、ミタクン状貼付		III-1
6回-27	C-61	IV	口 線 部	波状口縫、腰帶:ミタクン状貼付、L(横位)、沈縫、ミガキ		III-1
6回-28	D-44	III	口 線 部	折返、波状口縫、L(横位)、R L網文(横位)、沈縫、腰帶		III-1
6回-29	C-56	IV	口 線 部	波状口縫、粘土細點付、沈縫曲線文、L網文、ミガキ、穿孔	30と同一個体	III-2
6回-30	C-56	IV	口 線 部	波状口縫、粘土細點付、沈縫曲線文、L網文、ミガキ	29と同一個体	III-2
6回-31	C-61	VI	口 線 部	波状口縫、粘土細點付、沈縫	胎土擦痕骨針含む	III-1
6回-32	C-56	IV	口 線 部	折返、波状口縫、R L網文(横位)、沈縫、磨削		III-1
6回-33	D-45	IV	口 線 部	折返口縫、R L網文(横位)、沈縫、刺突		III-1
6回-34	D-47	IV	口 線 部	折返口縫、貼付隆起、R L網文(横位)、沈縫、ミガキ		III-1
6回-35	E-62	I	口 線 部	波状口縫、画文、口唇部研摩		III-1
6回-36	E-66	II	口 線 部	波状口縫、沈縫、ミガキ、口唇部押引列点		III-1
6回-37	D-47	III	口 線 部	折返、波状口縫、貼付隆起、沈縫、ミガキ		III-1
6回-38	E-65	I	口 線 部	口唇内斜上部貼付、ロ晋湖沈縫、折返縫、沈縫、ミガキ		III-1
6回-39	D-67	IV	口 線 部	波状口縫、粘土細點付、沈縫曲線文、ミガキ	口壁部内面凹線	III-2
6回-40	C-61	N	網 部	貼付隆起、リム状貼付	要接の一部?	III-1
6回-41	D-47	N	網 部	貼付隆起、沈縫、ミガキ、竹管状工具による刺突	要接の一部?	III-1
6回-42	C-61	N	網 部	貼付隆起、ミガキ	要接の一部?	III-1
6回-43	D-47	III	網 部	コ次文、ミガキ		III-1
6回-44	D-47	III	網 部	沈縫、状次文、L R網文(横位・縦位)、腰帶、ミガキ		III-1
6回-45	D-47	N	網 部	沈縫、R圧痕、ミガキ		III-1
6回-46	C-43	I	網 部	L網文(横位)、沈縫		III-1
7回-47	C-61	N	堅 部	貼付隆起、R L網文(横位)、沈縫		III-1
7回-48	D-61	N	網 部	平行沈縫、入組文、ミガキ		III-2
7回-49	D-47	IV	網 部	沈縫、R L網文(横位)、ミガキ	スヌ状炭化物付着	III-1
7回-50	C-61	N	網 部	沈縫曲線文、ミガキ	スヌ状炭化物付着	III-1
7回-51	C-56	IV	網 部	R L網文(横位)、平行沈縫、ミガキ	スヌ状炭化物付着	III-1
7回-52	C-61	III	網 部	木片押引による条痕(アケメ)	スヌ状炭化物付着	III-1
7回-53	D-68	I	網 部	貼付隆起、L R網文(横位)、沈縫、腰帶		III-1
7回-54	D-66	II	網 部	沈縫曲線文、ミガキ		III-1
7回-55	C-57	II	口 線 部	平口縫、沈縫、ミガキ		III-2
7回-56	E-66	II	口 線 部	波状・折返口縫、沈縫、ミガキ		III-2
7回-57	E-65	I	口 線 部	波状口縫、貼付隆起、沈縫、ミガキ		III-2
7回-58	D-44	III	網 部	沈縫、具条縫文(横位)、ミガキ		III-2
7回-59	E-66	II	網 部	渦状文、ミガキ、化粧粘土	60と同一個体	III-2
7回-60	E-66	II	網 部	平行沈縫、腰帶文、化粧粘土	59と同一個体	III-2
7回-61	D-E 58	II	網 部	網目状捺文名(單輪筋条体5類)		III-2
7回-62	E-63	I	網 部	渦卷文、ミガキ		III-2
7回-63	D-45	III	網 部	渦卷文、L R網文(0段多条)、腰帶		III-2
7回-64	C-56	N	網 部	沈縫曲線文、ミガキ	(スヌ状炭化物付着) 胎土擦痕骨針含む	III-2
7回-65	C-61	N	網 部	多条沈縫、ミガキ		III-2
7回-66	C-44	III	網 部	不規則沈縫、ミガキ		III-2
7回-67	D-47	IV	底 部	孤狀文、ミガキ	胎土砂粒多く含む	III-3
7回-68	D-47	III	網 部	沈縫、R L網文(横位)、ミガキ、横ナサ		III-3
7回-69	D-45	II	網 部	沈縫、刺突(?)、ミガキ		III-3
7回-70	E-64	I	口 線 部	R L網文(横文)、平行沈縫、腰、ミガキ		IV
7回-71	E-65	I	口 線 部	上字文、ミガキ	口唇内面沈縫	IV

(2) 石 器 (第8図～第11図)

本遺跡の縄文時代の石器は、石鎌・石錐・石匙・石範・不定形石器・磨製石斧・打製石斧・敲磨器類・石皿等が出土している。これらを器種毎に分類し、さらに形態により次のように細分した。石器観察表は86頁に示した。

石鎌 (第8図1～11)

16点。石質は、珪質頁岩15点、黒曜石1点である。

I類 無茎のもの

- a. 平基のもの 1点。(1)
- b. 円基のもの 2点。
- c. 尖基のもの 1点。2は先端部分が短く、細かな調整が施されている。最大幅部分から基部の端部に向かっては、側縁部のみ調整されている。この形状から、石錐の可能性もある。

II類 有茎のもの

- a. 凹基のもの 3点。4は3よりも基部の抉りが鋭い。
- b. 平基のもの 3点。(5・6)
- c. 凸基のもの 6点。11の基部にアスファルト状の物質がわずかに付着。(7～11)

石錐 (第8図12)

1点。石質は、珪質頁岩である。石鎌に似た形状で、錐部をかなり短く作出している。

石匙 (第8図13～15・第9図16)

4点。石質は、珪質頁岩3点、黒曜石1点である。すべて縦型の石匙である。13は両面調整がなされており、赤みが部分的に混じる黒曜石を素材としている。14は片側の側縁部に一箇所ノッチに入る。16はつまみを作出した際の抉りが明瞭に見出だせず、刃部の調整も疎らだが、石匙に分類した。基部にアスファルト状の物質の付着が見られる。

石範 (第9図17)

1点。石質は、珪質頁岩である。三角形の形状を呈する。両側縁の刃部に、若干のツブレが見られる。

不定形石器 (第9図18～20)

41点。石質は、珪質頁岩39点、流紋岩1点、鉄石英1点である。

I類 定型的な刃部を持つもの (スクレイパー類) 18点。18は、意図的に調整を施してない側縁部に、使用痕が認められる。(18・20)

II類 定型的な刃部を持たないもの (R-フレイク) 7点。(19)

III類 使用のため生じた微細剥離のあるもの (U-フレイク) 17点。

石核 (第9図21)

1点。石質は、珪質頁岩である。側縁部に自然に形成されたツブレが見られる。細石刃核に近い形状を持つ。

磨製石斧 (第10図22～24)

8点。石質は、閃綠岩2点、緑色細粒凝灰岩1点、輝綠岩1点、安山岩1点、不明3点である。

I類 断面が橢円形のもの 3点。(22)

II類 断面が扁平なもの 3点。23は入念に研磨がなされている。

III類 全体が小型のもの 1点。24も研磨がなされている。

IV類 折損のため細分不可能なもの 1点。

打製石斧 (第10図25・26)

2点。石質は、ともに閃綠岩である。円礫の表面を残し、もう一方の面を剥離して成形したもの(25)と、両面を剥離して成形したもの(26)が見られた。

敲磨器類 (第10図27~30)

7点。石質は、安山岩2点、閃綠岩2点、凝灰岩2点、砂岩1点である。

I類 磨痕のあるもの 6点。27・28は、先端部や側縁部に意図的に剥離がなされ、片側の側縁部を使用している。28には、使用の際に指を当てて摩滅したと思われるくぼみが見られる。29は、磨製石斧を転用したものと思われる。30は全面に磨痕を有し、片側の側縁部に特に明瞭な磨痕を残す。

II類 敲打痕のもの 1点。

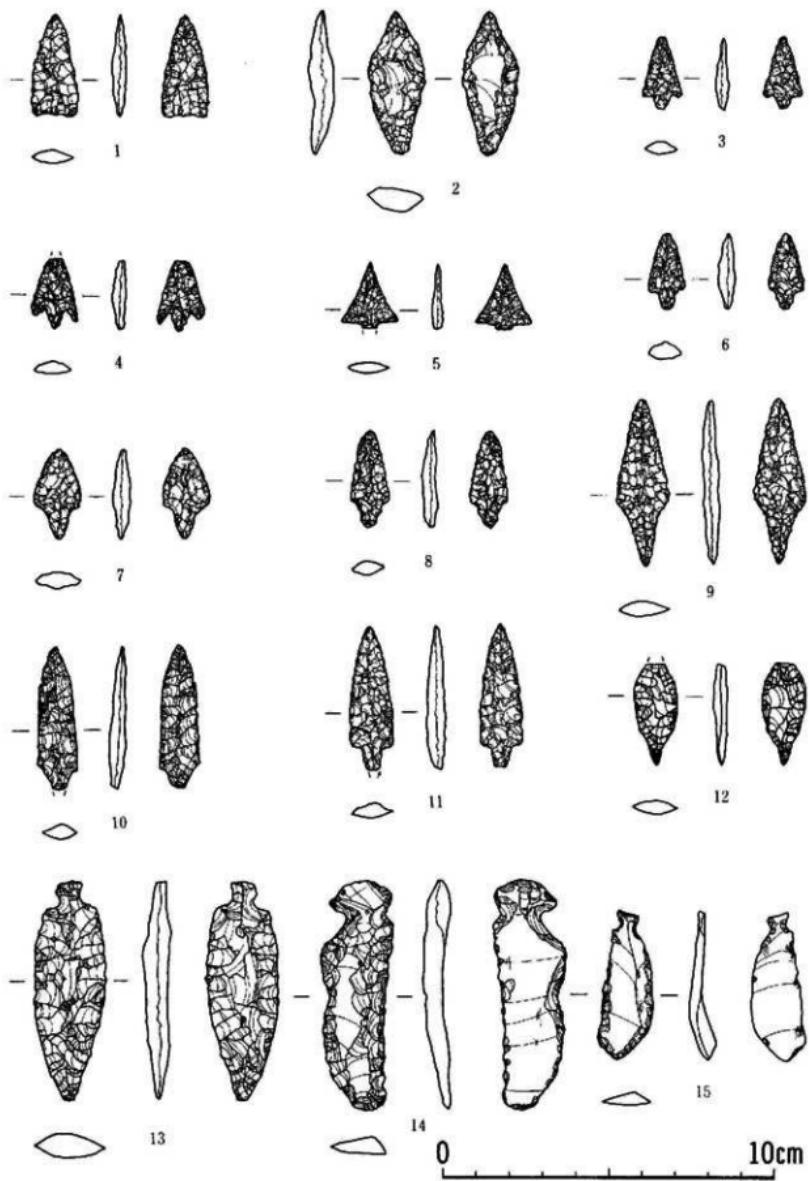
石皿 (第10図31・第11図32~34)

5点。石質は、安山岩2点、砂岩1点、凝灰岩1点、流紋岩1点である。

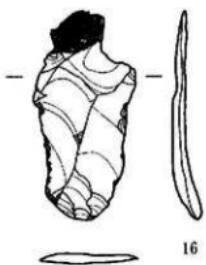
I類 脚または縁を作出したもの 2点。31は、4脚と縁の部分を作出しているが、砂岩を素材としているためか、かなり脆い。使用面がほとんど湾曲しておらず、ほぼ平坦である。氾濫層からまとまってはいるが、ひびが入って、伏せた状態で出土した。33は、縁を作出した石皿の破片である。

II類 脚または縁を作出してないもの 3点。32・34は両面を使用しているが、34は使用した単位で細かく分けると、さらに6乃至7面を数える。また、火を受けた痕跡を有していてかなり脆く割れた状態で出土している。スス状炭化物も若干付着している。

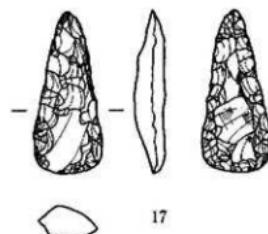
(相澤 治)



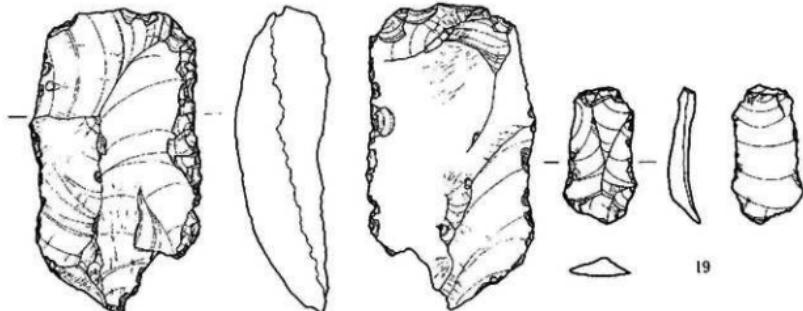
第8図 出土遺物(石器 1)



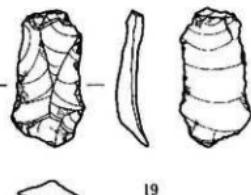
16



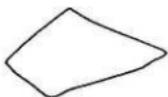
17



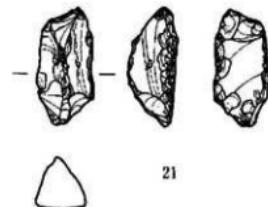
18



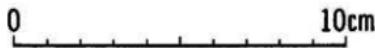
19



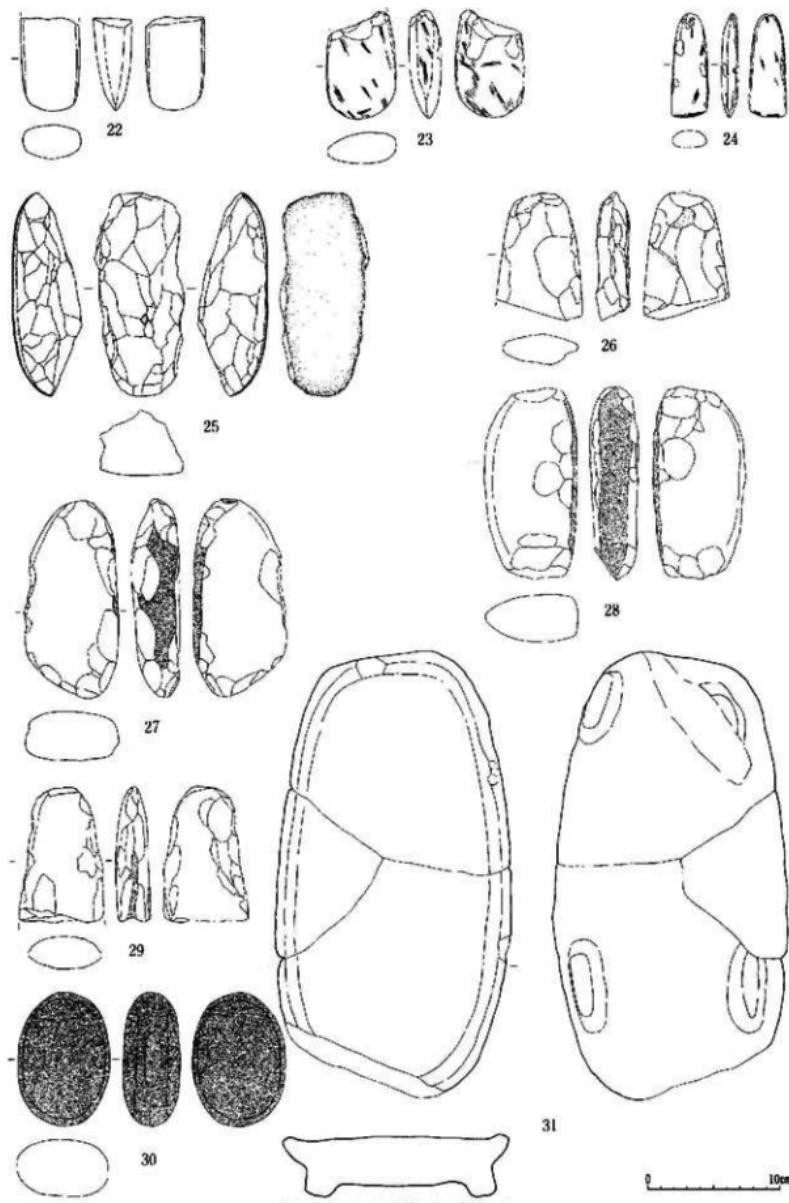
20



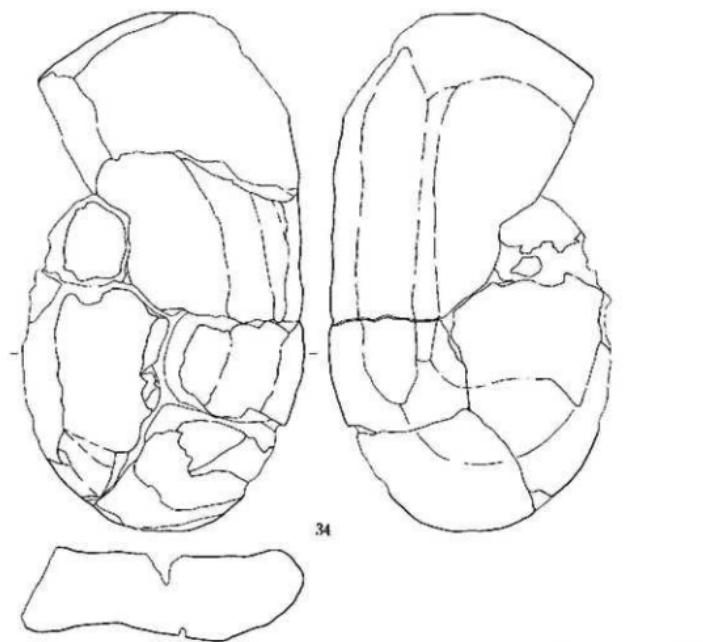
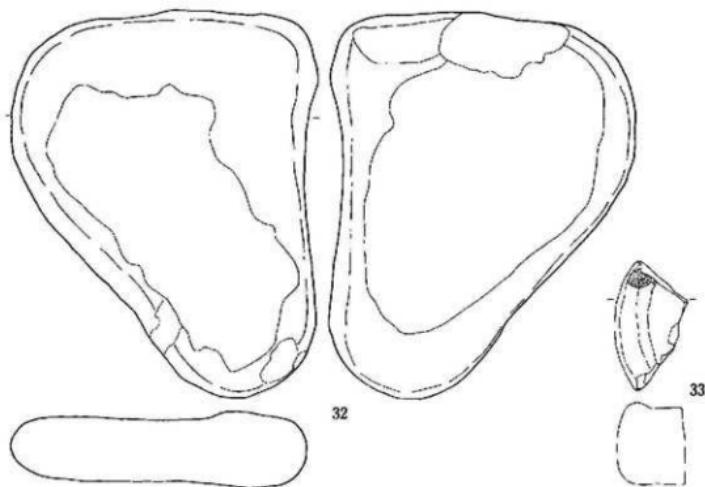
21



第9図 出土遺物(石器 2)



第10図 出土遺物(石器 3)



第11図 出土遺物（石器 4）

表-2 熊ヶ平遺跡出土石器計測表

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	分類	備考
				長mm	幅mm	厚mm	重(g)			
8図-1	C-43	I	石鏃	31.0	13.0	5.0	1.3	珪質頁岩	I a	
8図-2	E-48	カラン	石鏃	43.0	17.0	8.0	4.2	珪質頁岩	I c	
8図-3	D-67	II	石鏃	(21.5)	11.0	4.0	(0.4)	珪質頁岩	II a	基部わずかに折損
8図-4	D-67	II	石鏃	(21.0)	13.0	4.0	(0.7)	珪質頁岩	II a	先端部折損
8図-5	C-60	I・II	石鏃	(19.5)	16.0	3.0	(0.4)	黒耀石	II b	基部折損
8図-6	D-67	I	石鏃	23.0	10.5	5.0	0.8	珪質頁岩	II b	
8図-7	E-64	I	石鏃	26.0	14.0	5.0	1.2	珪質頁岩	II c	
8図-8	A-62	I	石鏃	29.0	11.0	4.0	1.1	珪質頁岩	II c	
8図-9	C-47	III	石鏃	50.0	16.0	6.0	2.6	珪質頁岩	II c	
8図-10	D-68	II	石鏃	(43.0)	12.5	5.5	(2.3)	珪質頁岩	II c	基部わずかに折損
8図-11	D-47	IV	石鏃	(42.0)	12.5	5.5	(2.2)	珪質頁岩	II c	基部わずかに折損
8図-12	E-65	I	石鏃	(30.5)	13.0	4.0	(1.4)	珪質頁岩		基部折損
8図-13	D-58	III	石匙	65.0	21.0	9.0	9.5	黒耀石		両面調整
8図-14	C-48	III	石匙	69.0	21.0	7.0	10.6	珪質頁岩		
8図-15	C-48	III	石匙	45.0	16.0	6.0	2.6	珪質頁岩		
9図-16	C-53	IV	石匙	62.0	29.0	6.0	7.4	珪質頁岩		つまみアスファルト付着
9図-17	D-48	III	石匙	49.0	20.0	10.0	8.0	珪質頁岩		
9図-18	D-47	III	不定形	91.0	48.0	27.0	105.3	珪質頁岩	I	
9図-19	C-43	III	不定形	40.0	22.0	6.0	4.1	珪質頁岩	II	
9図-20	D-66	II	不定形	32.0	31.0	10.0	10.9	珪質頁岩	I	
9図-21	D-48	III	石核	34.0	17.0	16.0	9.1	珪質頁岩		先端・側縁部にツブレ
10図-22	C-60	I・II	磨製石斧	(70.0)	(45.0)	(28.5)	(135.6)	安山岩	I	基部折損
10図-23	A-62		磨製石斧	(75.0)	53.0	25.0	(158.5)	綠泥凝灰岩	II	基部折損
10図-24	E-58	II	磨製石斧	79.0	28.0	12.0	44.7	閃綠岩	III	
10図-25	D-66	II	打製石斧	152.0	62.0	52.0	685.3	閃綠岩		片面剥離
10図-26	A-64	III	打製石斧	(91.0)	(64.0)	(25.0)	(198.7)	閃綠岩		片面剥離、先端部折損
10図-27	D-65	I	敲撃器	148.0	71.0	36.0	557.0	安山岩	I	片面スリ
10図-28	D-67	I	敲撃器	144.0	70.0	36.0	577.0	閃綠岩	I	片面スリ
10図-29	E-64	I	敲撃器	(103.0)	(64.0)	25.0	(245.0)	綠灰岩	I	折損品、石斧軸用?
10図-30	E-62		敲撃器	100.0	70.0	43.0	488.0	閃綠岩	I	全面スリ
10図-31	D-47	IV	石皿	(350.0)	179.0	64.0	(3500.0)	砂岩	I	4脚、操作用、脆い
11図-32	D-62	IV	石皿	293.0	232.0	59.0	5850.0	安山岩	II	両面使用
11図-33	D-67	II	石皿	(95.0)	(54.0)	(63.0)	(289.0)	安山岩	I	破片、縫合作成
11図-34	E-62	I	石皿	(393.0)	(390.0)	(70.0)	(6300.0)	綠灰岩	II	両面使用、脆い

※ 表中では、「緑色細粒凝灰岩」を「緑細粒凝灰岩」と表記している。

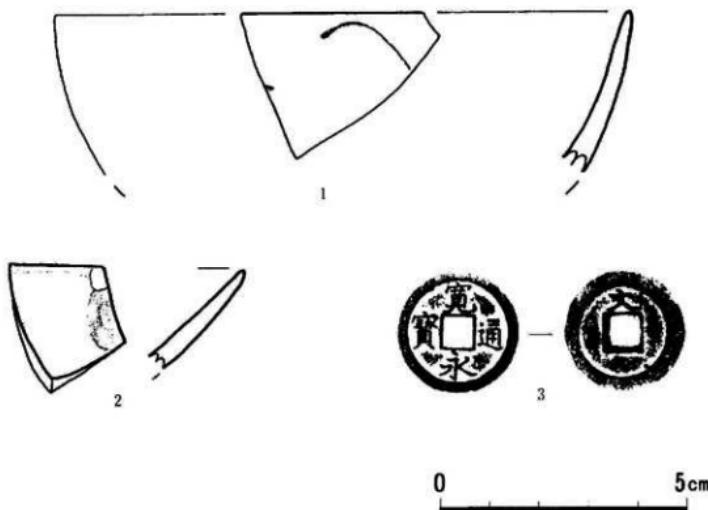
(3) 陶磁器・古銭 (第12図1～3)

平成5年度と6年度の調査で、若干の陶磁器と銭貨が出土している。いずれも、江戸時代以降のものと思われる。

1はC-49グリッド第II層、2はC-51グリッド第II層から出土している肥前の染付である。1は碗の口縁部の破片で、色調は胎土がやや灰色がかった白色、釉は薄水色である。2は皿の口縁部の破片と思われるもので、色調は胎土が灰白色、釉は薄水色である。いずれも大橋康二氏による肥前陶磁の年代区分（大橋1989）のIV期（1690～1780）に相当するものと見られる。

3は、江戸時代に鋳造された寛永通寶であり、B-62グリッド第I層から出土している。直径2.5cm、穿径0.6cm、外輪幅0.2cm、外輪厚0.07cm、重さ2.4gを計り、「文」の背文が見られる。ほとんど腐蝕しておらず、残り具合は非常に良い。

(相澤 治)



第12図 出土遺物（陶磁器・古銭）

第Ⅲ章 ま と め

平成5・6年度に実施した熊ヶ平遺跡の発掘調査の結果、以下の成果を得た。

遺構は、検出されなかった。

出土した遺物は、縄文時代前期から晩期までの土器・石器、弥生時代の土器、近世の陶磁器、錢貨等、段ボール箱合計11箱分である（平成5年度7箱・平成6年度4箱）。

土器は、すべて破片の状態で出土しており、また、摩滅したものがほとんどであった。したがって復原して全体形を知り得るものは皆無であった。時期的には、縄文時代前期と後期のものが主体を占める。縄文時代前期の土器は、主に円筒下層d式と見られるものである。中期の円筒上層式の土器も幾つか出土している。後期の土器は、十腰内I式よりも前のものが大部分である。十腰内I式と思われるものも幾つか見られたが、それ以降の型式のものはごくわずかであった。晩期から弥生時代前期にかけてのものと思われる土器は、小破片が若干出土したのみであった。

石器は、ほとんど縄文時代のものと思われる。

近世陶磁器の破片と錢貨（寛永通寶）も、若干出土した。

平成3・4年度に実施された発掘調査（県埋文報第180集：1995）では、主に縄文時代前期から中期初頭にかけての遺物が大量に出土し、多くの住居跡の検出を見た。また、調査区域の東側（熊野川寄り）からは、後期初頭のものと思われる住居跡が1軒検出されている。

今回の本遺跡の発掘調査区域は、前回の調査区域の東端と熊野川に挟まれた狭い区域であり、地形、基本層序、出土土器の状態から、熊野川の氾濫と流路の変化に長期間さらされていた場所であることが判明した。出土した遺物の大部分は、西側の段丘上に位置する本遺跡の居住域から出土した遺物と時期的にはほぼ一致する。したがって、今回の発掘調査区域は、段丘上の居住域からの廃棄か流れ込みあるいは熊野川の流水によって運ばれてきた遺物の散布地であり、居住域の縁辺部に位置していたとみられる。

（相澤 治）

〈引用参考文献〉

- | | | | |
|--------------|------|---------------------------------|------------|
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』 | 青埋文報第 81集 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 『沖附(2)遺跡』 | 青埋文報第 101集 |
| 青森県教育委員会 | 1995 | 『高野川(3)遺跡』 | 青埋文報第 179集 |
| 青森県教育委員会 | 1995 | 『熊ヶ平遺跡・板子塚遺跡』 | 青埋文報第 180集 |
| 青森市螢沢遺跡発掘調査団 | 1979 | 『螢沢遺跡』 | |
| 川内町教育委員会 | 1992 | 『鞍越・斐川遺跡発掘調査報告書』 | |
| 村 越 駿 | 1974 | 『円筒土器文化』 雄山閣 | |
| 大 橋 康 二 | 1989 | 『肥前陶磁』 考古学ライブリー55 ニューサイエンス社 | |
| 本 間 宏 | 1987 | 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」 『よねしろ考古』第3号 | |

写 真 図 版



調査区域
(北西より)



調査区域
(南東より)



作業風景

写真1 平成5年度 遺跡風景



Cライン土層



礫層検出状況



石皿出土状況

写真2 平成5年度 土層・礫層検出状況・遺物出土状況



調査区域
(北西より)



調査区域
(南東より)



土器出土状況

写真3 平成6年度 遺跡風景・遺物出土状況

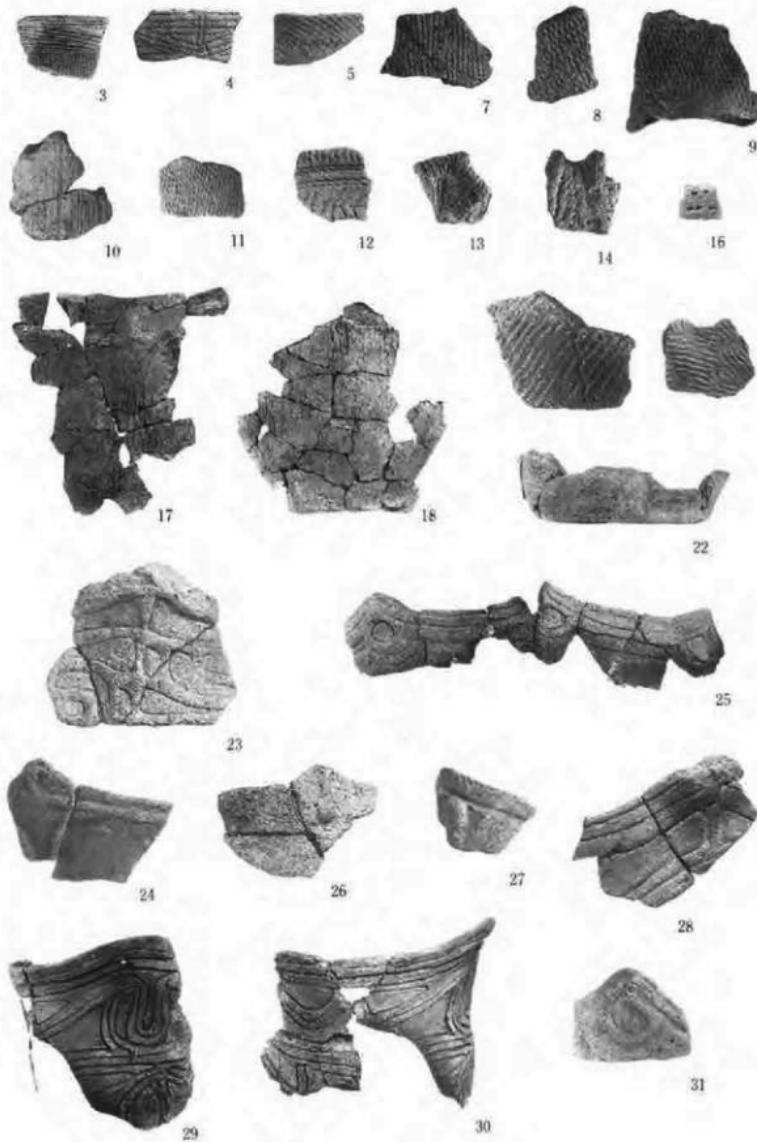


写真4 出土遺物（土器 1）

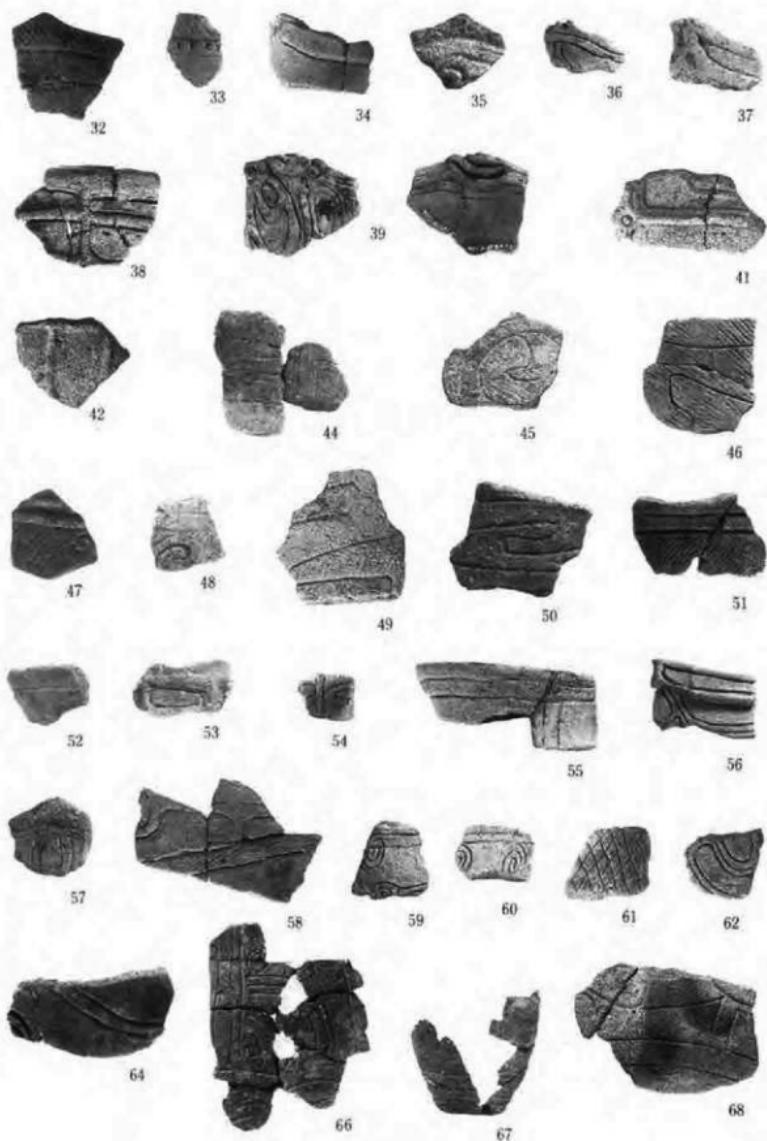
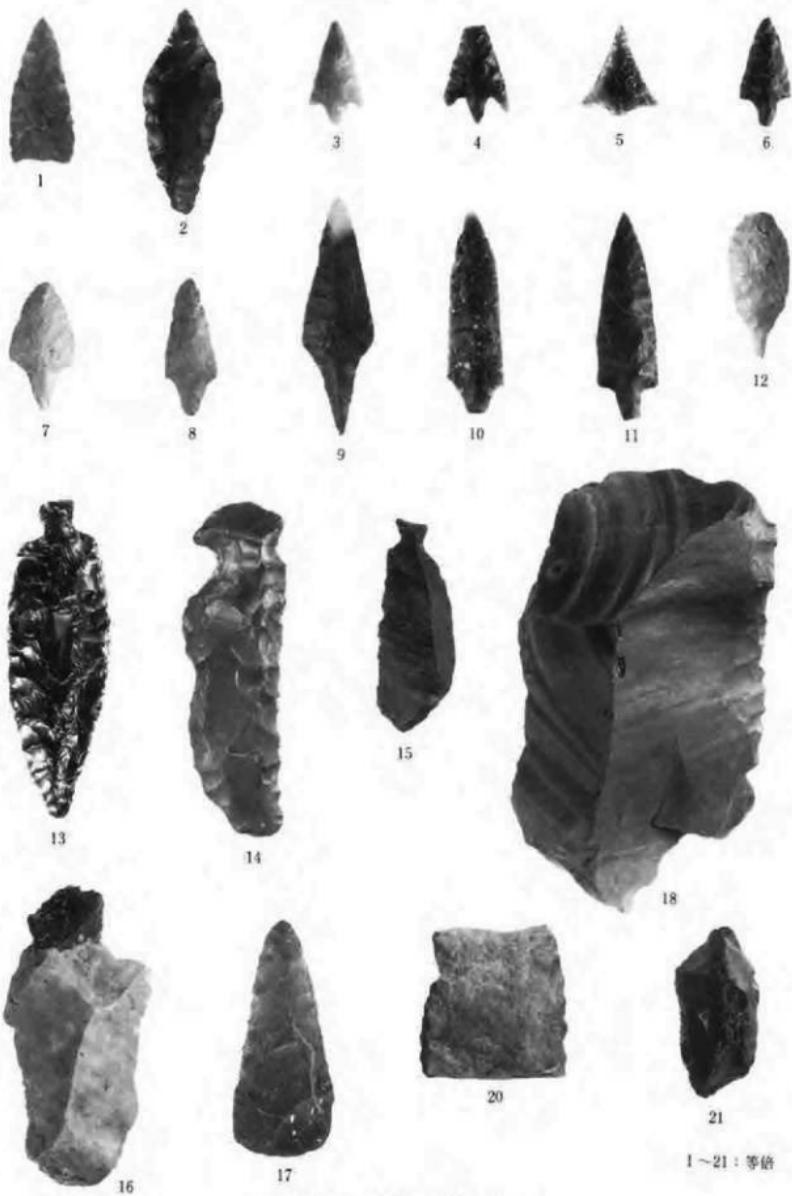


写真5 出土遺物（土器 2）



1~21: 等倍

写真6 出土遺物(石器 1)

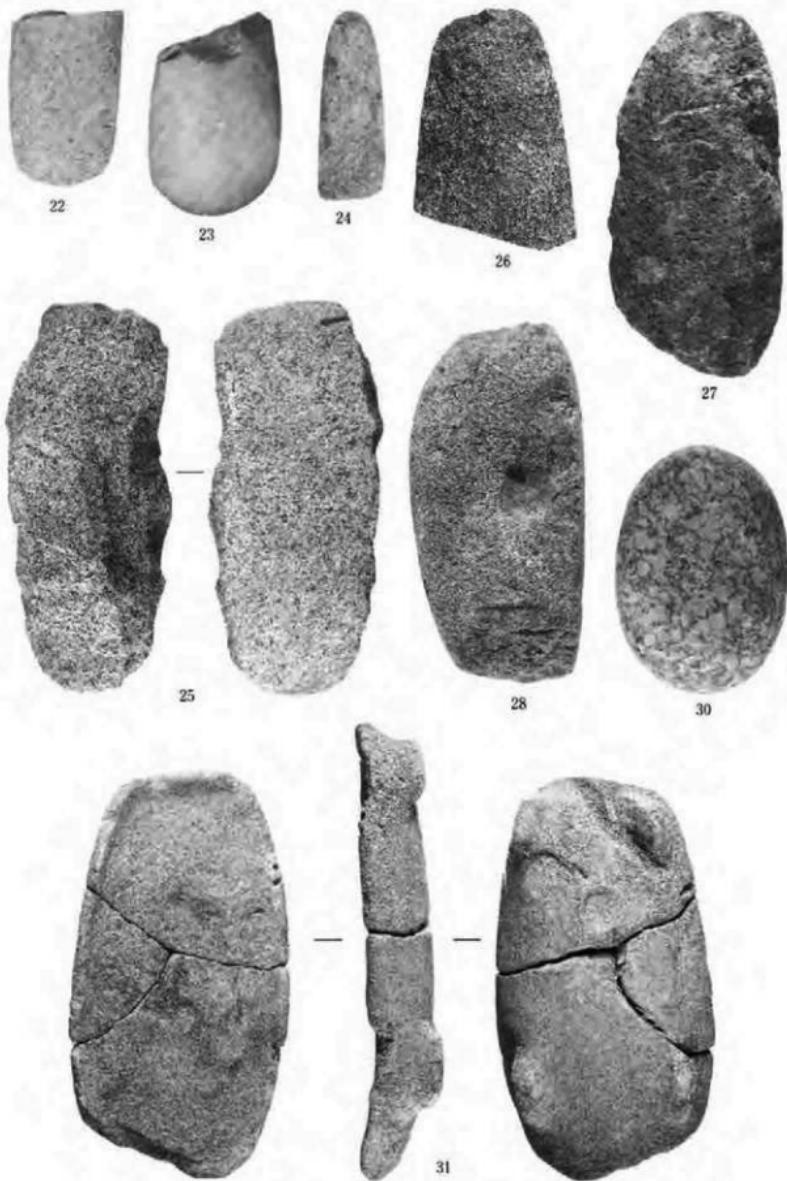


写真7 出土遺物（石器 2）

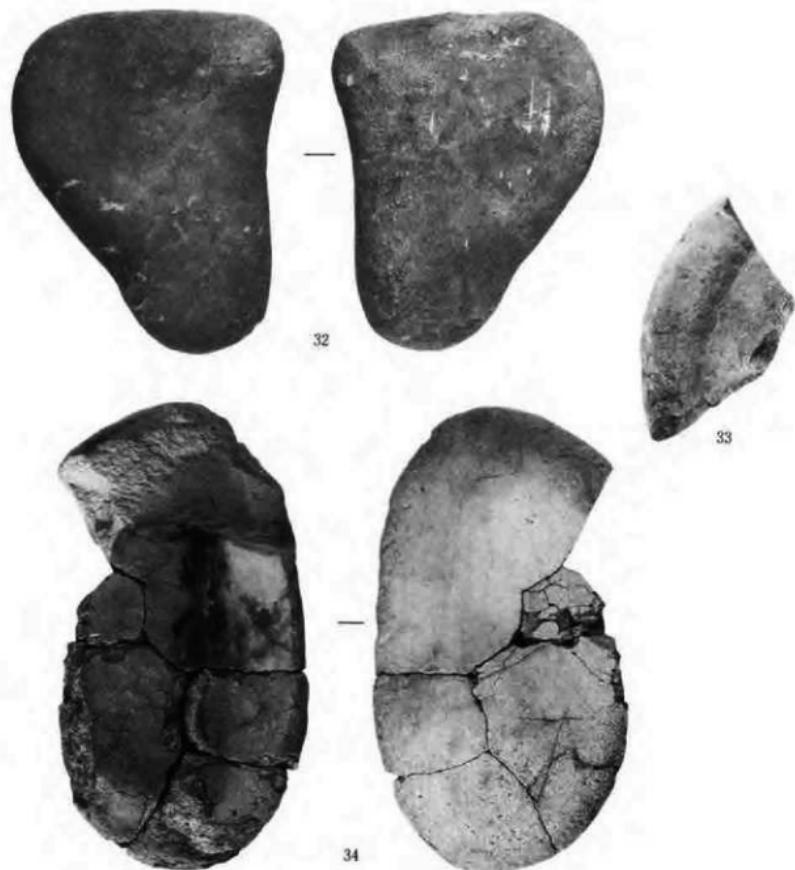


写真 8 出土遺物（石器 3・陶磁器・古錢）

報告書抄録

ふりがな	戸沢川代遺跡・熊ヶ平遺跡							
書名	戸沢川代遺跡・熊ヶ平遺跡							
副書名	県営農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査							
巻次	-							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第192集							
編著者名	戸沢川代遺跡 奈良岡淳 小館孝浩	熊ヶ平遺跡 相澤治 増尾智彦						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177-88-5701							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
戸沢川代遺跡	青森県下北郡川内町 川内字田代133、井	02421	51024	41° 11° 39°	141° 3° 57°	19940822 ~ 19941117	2,800	県営農免農道整 備事業に伴う事 前調査
熊ヶ平遺跡	青森県下北郡川内町大字川内 字熊ヶ平	02421	51002	41° 12° 0°	141° 0° 40°	19931018 ~ 19931118 19940905 ~ 19940930	510 300	県営農免農道整 備事業（高野川 地区）に伴う事 前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
戸沢川代遺跡	散布地	縄文時代	前期 中期 後期	縄文土器 ・円筒下層式土器 ・円筒上層式土器 ・後期初頭の土器			1991、1992年に 発掘調査した熊 ヶ平遺跡（縄文 時代前期～中期 初頭と後期初頭 の集落跡）の東 端から熊野川に かけての範囲を 調査。	
		弥生時代		初頭～前葉	弥生土器 ・鉢、台付鉢、高杯、甕、ミニチュア土器 ・土偶（中空土偶）			
		～		弥生時代	石器 ・石鎌、石錐、石匙、石槍、不定形石器 ・敲磨器類			
		弥生時代	近世	陶磁器 古鉢3点（寛永通宝）				
		時代不詳	土坑 溝跡 灰窓跡	13基 1条 1基	鉄斧 鏡			
熊ヶ平遺跡	散布地	縄文時代	前期 中期 後期 晩期	縄文土器 ・円筒下層式土器 ・円筒上層式土器 ・後期初頭、前葉の土器 ・大洞A式？			1991、1992年に 発掘調査した熊 ヶ平遺跡（縄文 時代前期～中期 初頭と後期初頭 の集落跡）の東 端から熊野川に かけての範囲を 調査。	
		弥生時代		前期	石器 （石鎌、石錐、石匙、石錐、磨製石斧、打製 石斧、不定形石器、石核、敲磨器、石皿など）			
		前期		近世	弥生土器			
		前期		近世	陶磁器 古鉢（寛永通宝）			

青森県埋蔵文化財調査報告書 第192集
戸沢川代遺跡・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書
—県営農免農道整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成 8 年 3 月 31 日
発 行 青森県教育委員会
〒030
青森市新町二丁目3-1
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038
青森市新城字天田内152-15
TEL 0177(88)5701
FAX 0177(88)5702
印 刷 東北印刷工業株式会社
〒030
青森市合浦1-2-12
TEL 0177(42)2221
FAX 0177(65)1115
